



圓光大師行狀圖卷之十

第卅五册六册七册八册九

共十



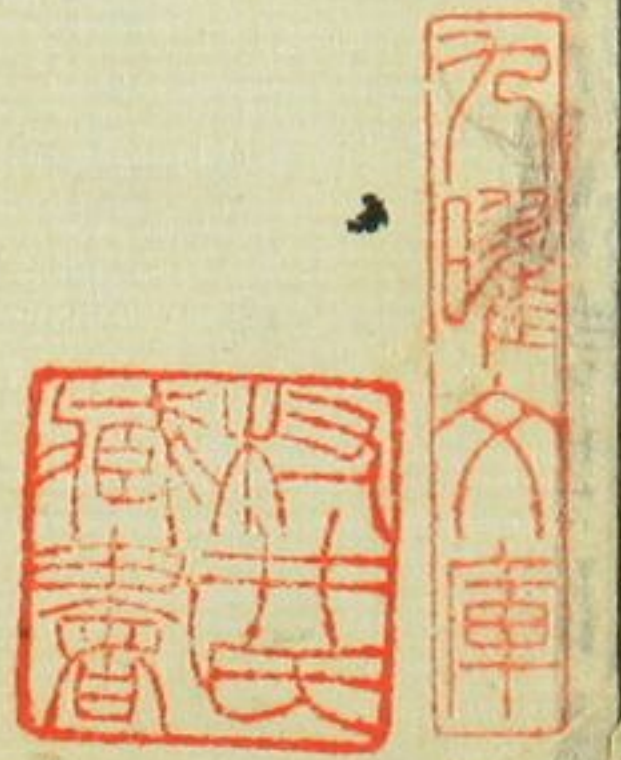
○師盛ハ小松内府重盛公ノ次男母ハ中納言家成卿ノ女ニテ維盛同母ノ弟也元暦元年二月七日つ谷ノ合戦敗北シテ湊河ノ邊ニシテ遠江守義定ニ討ル
 ○重盛ハ平相國清盛公ノ一男母ハ右近將監高階基章ノ女也安

圓光大師行狀畫圖翼贊卷四十五

事義

傳本第四十五

勢觀房源智ハ備中守師盛朝臣ノ子小松の内府重盛ノ孫ナリ平家逆乱ノ後世々々つありて母儀ニシテをくくもてわをる後建久六年生年十三歳ノとき上人ヲ進とと上人こ此を慈鎮和尚ニ進どせしめたり此門室よ多く出て出家をさげをかぬいくたなりて上人の禪室よ歸系し常隨給仕首尾十八箇年上人の隣敗心覆護他よくくく浄土れ法門を教示



元元年三月五日丙午
治承三年七月廿八日出家
法名靜蓮。八月一日薨去。
壽四十二。号小松内大臣。

圓頓戒（此）人（を）てして附屬（と）し強（く）き（り）て
道具本尊房舍聖教（の）こる所（た）く（こ）ま（さ）紙
相承（す）て（ま）す

○師盛。琵琶法師ノ平家ノヨミカ名。方ニ法ノ訓ナリ。八坂方ニ衆ノ訓ナリ
○圓戒ノ傳法。此ノヲモテ。嫡嗣トセラルトゾ。若傳戒論ニ依ラバ。正信房勢觀
房等。同傳戒アリトイヘドモ。其正脈ヲ傳テ。信衣戒儀等ヲ得タルハ。特ニ鎮
西ノ聖光上人也トイヘリ。粗第十卷ニ注スルガ如シ。○道具トハ。今時世出世ノ
具ニ通ジテイヘドモ。本ハ佛具ヲ云ナリ。松陰ノ硯ハ平家ノ重寶ニテ。重衡
卿上人ニ奉リ。上人ヨリ勢觀房ニ傳ハテ。知恩寺ニ留レリ。上人ノ所持
コトコトク相承セラレケルハ。證トモ云ベキニヤ。漢語燈錄第十卷。沒後起請文ヲ載云。
起請沒後二箇條之事（今私に初、一條ハ第
三十九卷ニ注シヌ）
不可請論房舍資具衣鉢遺物等事
予竊聞古見今於人沒後多有喧諍抑是由諍遺塵也或在家之
兄弟弟忽忘連枝之昵或釋門之法孫俄變一器之志每見聞此事
不敢勝安忍然則我弟子同法有志之倫明察此趣於我沒後莫
起諍論但雖弟子多入室者僅七人也所謂信空感西證空圓觀

長尊感聖良清也。此等諸人於彼世出世間之恩深於我至順至
孝之志篤者也。誰人忘二世之恩德致一旦之諍訟乎。此中信空
大德者。是多年入室之弟子也。其志諍厚而有誠為表懇志。聊有
遺屬。謂黑谷本房（寢殿
雜舍）白川本房（寢殿
雜舍）坂下（箇）所。洛中地一所。
此外本尊（三）尺彌陀聖教（摺寫六
十卷等）付屬之（其書在
別紙）感西大德亦
是年來常隨給仕之弟子也。其思相共而不淺。為酬給仕之恩。又
聊有所付屬。謂吉水中房（本在西
山廣谷）高畠地一所（但賣實之時
付屬之）。
吉水東新房是圓親大德所領也。是本主故六條尼公為其
養子。付屬並六條敷地。手自書付屬與之。雖然源空一期之間
可進止之旨。載彼書。將今重所付屬也。（其書在
別紙）長尊大德者。死
去時。覺悟房并付帳一口沙汰與之。又於白川邊買備一屋之
時。價直與。又此吉水西舊房。其本主顯然也。人皆所知不能分配
者也。持佛堂（本在
大谷）西坊。尼公自西尊成乘坊之手。乞之所壞渡也。
此外雜舍一兩雖加潤色。皆附西本房了。此外無房舍及領地。不
能付屬自餘諸人者。也。此外雖非舊交。當時同法者。三人所謂遵
西直念。於西也。為其證人。故所註列也。又西來東去尋問法門。朝
來暮往。叩求出離之人。甚多。誠以不足言者也。云云。
（已上略書此
中二箇條本
主トハ未考。又遵西ハ安樂坊也。依西ハ唯願房也。
錄ノ中二箇條ノ連署ニ注スル事如此直念ハ未考）

建久九年四月八日

擇源空 在御判

○建久九年ハ
勢觀房十三
ノ入室ヨリ四年
時二年十六也
遺屬ナキ事知
スシ

又西山上ノ別傳云、黒谷經藏ヲ法蓮房ニ附屬スヘキ由、既ニ約諾シ、吉
水ノ坊舎ヲ眞觀房ニ因縁アテ先約スルコト終リヌト。云、按ニ所載遺
屬傳文ニ不相似者何也。謂多此遺屬ハ上人平生一時ノ遺誠ニシテ、臨
終ニ先タツ事十五年ナリ。今此傳文ハ末期ノ遺屬ナリ。サレバ分配シ給フ
トコロノ房舎ハ皆平日舊住ノ地ナリ。建久九年ヨリ凡十餘年ヲ經テ配
所ヨリ歸洛ノ後、始テ大谷ノ禪房ヲ得給ヘリ。是故ニ彼遺狀ニ、此外ニ房
舎ナシト云テ、此傳ニ此禪室ヲ勢觀房ニ付屬ト聞エタリ。又此禪室ハ慈
鎮和尚ノ寄附スル所ニシテ、勢觀房マタ彼和尚ノ門室ニ參ゼラル。今此禪
室ヲ此御房ニ遺屬アラシ事、良ニ由アリト聞ユ。又信空大德聖教ヲ得
ラルトイヘトモ、纔ニ大部六十卷等ノミナリ。此外所有聖教、總ジテ勢觀
房ノ所得ト云事、亦知又ヘシ。又本尊付屬ノ事、此像今尚現在ニシテ、
下愚モ拜見シキ。立像ニ尺餘ノ彌陀、金泥彩色以下ノ巧妙、凡工ノ所爲ニ
アラジ。今南禪寺ノ總門ノ北ノ傍、民居ノ村中ニ西福寺ト云草堂アテ。此
尊像ヲ安置セリ。相傳此地ハ古シヘ法勝寺ノ境内ニシテ、即其一院ナリシガ
勢觀上人居住ニシテ、此像ヲ安置セラルト。是則上人付屬ノ遺像ナル
由、御房手自添テ以テ、尊像ノ背後ニ記セラル。其詞云、
上人ノ御安置佛則某送給

建保三乙亥秋當寺住同四丙子正月十九日、二十五日迄於當院
別時念佛執行
沙門 勢觀源智

上人終焉、其期らるべき強く、勢觀房念佛の
安心年來御教誡よあづるといふこと、なほ御
自筆に肝要の御所存、一ふであそびを記して、た
よわわてのられ御了見り、それへ侍らんや
申されたり、なほ御筆をそめ、それの状云
り、海一我朝をうつくし、乃智者たられ、是
申し、も觀念の念よもあは、又學問して
念佛れ心をうらなび、て申念佛よあは、は
往生極樂れきめ、にへ。南無阿弥陀佛と申て

うごひなく。往生するぞとねをひきりて申は
うよハ。別乃子細さうハ。次だご。三心四修など申
てこれ供い受定し。南無阿弥陀佛よて往生す
そと。たもふらに。こも供なり。これほにねくぬ
うまご。涙存せ。二尊れあ。まごまよ。うづれ。本願
よ。これ供ぬ。念佛を信ぜん人。たごひ。一代の
法をよくく。学やりと。一。文不知れ愚鈍乃身
になりて。尼入道の無智れも。が。よ。同して。
智者乃ら。ま。ひをせ。け。して。一向よ念佛と
へ。と。云。や。ご。ま。御自筆れ書也。よ。ご。に
末代の鏡よ。た。れ。る。ま。の。う。と。人。の。一。枚。消
息と。び。づ。く。せ。の。流。布。す。ま。ま。さ。り

○此御消息。今東山新黒谷ニ在リ。御自筆ノ正文ト云○一枚ト云。只一紙
ノ文ナレバナリ。枚ハ箇也。數物。幾箇。曰。幾枚。總。ジ。テ。物ノ數ニ用ル字ナリ。
圖書式ニ。磬一枚。紙花五箇。ナドアルモ。此類ナルニヤ。是ヲ又起請ト云。コトハ
二尊ヲ證ニ取テ。往生ノ大益ヲカケタル誓言ナレバナリ。サレハ起請ノ名ハ
上人ノ御素意ニ本ツキ。一枚ノ字ハ。後人ノ喚トコロナリ。九卷傳ニ。勢觀
上人敢テ披露せる。一期ノ間。頸ニカケテ。秘藏セラレケルヲ。羊來師檀ノ
契。淺カラサリケル。別。合。ノ。法。眼。ニ。カ。タ。リ。聞。エ。ケ。ル。ヲ。勤。切。ニ。望。申。ケ。レ。バ。
授ラレテヨリ以來。世間ニ披露レテ。上人ノ一枚消息トイヘルモノ也トアリ。
抑。御起請ノ趣。一宗ノ奥旨ヲ。迷給ケレバ。一旦ニ解シガタケレバ。愁ニ注ラ
加ヘス。サレド此御詞ノ外ニ。別ニ習モ義理モアリトイハ。御誓言ハ無用ニ
ナリヌ。若此外ニ。更ニ深旨アルベト思ハシ。一宗ノ法門ヲ學バザル人ノ
心ナルベシ。能ク。一。家ノ書ヲ披テ。安心起行ノ旨。趣具ニ心得テ。事真實ニ
習ヘル上。更ニ。一。宗ノ奥義。此。一。紙ヲ出ザル事ヲ。信知スベシ。只願ハクハ。初
ヨリ宗義ヲ學セザル人。人モ信ノ手ヲノベテ。此。一。紙ヲ披カン事ヲ。サアラバ
學モ不學モ。其功ハ。一。ニ歸スベシ。苟モ御誓言ノ上。怒カ疑フベカス。上
人。道。心。深キ。御身ニテ。往。生。ヲ。バ。一。大。事。ト。思。セ。シ。上。ソ。レ。ヲ。カ。ケ。テ。ノ。御。誓。言。

言實ニ信シテモ尚餘アリ。若是ヲモ信ス。ジラ公亦何事ヲカ信スベケンヤ

○サ、キ野ハ
山州記ニ佐々
木野ハ氏神ノ
社大官殿ノ南
見活野ノ東也
昔賀茂ノ神主
佐々木資保ト
云入此所ニ住
ス。花鳥ニ資
雅卿ハ宇多源
氏佐々木野ト
云蹴鞠ノ家
也ト

上人御入滅の後、賀茂はほろり、けくも野といぬ
ところよすこ強々、その由来は上人の御病中
よいばくもわきまなく、車をさすり事あり
かり。貴女車よりとりて上人よ謁したまふ。
わらう、看病乃僧衆あり、あはれあはれ、はる
ちらいで、あはれい、休息し、たゞして、おし勢
觀房一人障子にほりて、さう強々、女房
れ、急よて、いまま、とこそ、おのひた、あ
に、御往生の、げきて、侍らん、そ、無下り心
が、よく、侍り、こても、念佛の法門、たゞ、御往生

め、ちよ、た、ま、さ、し、う、申、を、う、れ、侍、ん、と、申、は、ら、る
ま、い、上、人、こ、ろ、強、々、源、宣、う、所、存、い、選、擇、集、よ
の、せ、侍、り、お、れ、よ、た、ぐ、ハ、強、申、さん、を、れ、そ、源、宣、う
義、を、侍、り、こ、ろ、ま、ら、に、く、侍、へ、ま、さ、と、云、その、く、ら
ま、ら、御、の、の、が、ら、あ、り、て、う、わ、強、そ、れ、氣、色
た、び、と、も、ね、が、え、ざ、り、き、利、は、る、福、よ、僧、衆
た、ど、う、へ、り、ま、い、ま、ら、り、々、れ、ん、勢、觀、房、あ、り、は、る
車、れ、行、来、お、ぼ、つ、れ、く、ね、が、え、て、な、ひ、は、ま、て、見
い、ま、ん、と、一、強、よ、河、原、へ、車、を、や、り、い、て、此、を
さ、し、て、ゆ、か、が、か、ま、さ、ら、い、な、り、に、見、え、は、れ、ら、に
ま、ら、り、あ、や、し、ま、さ、事、ら、ま、ら、り、な、り、

○サ、キ野公佐々木野ト書リ。地理ノ部ニ注セリ。○御病中八九卷傳ニ九
二白トアリ。○カキケツヤウニ見エズナリニケリト。當時下賀茂ノ入口ニ
房ガ死ト云芝野アリ。南北百餘間。東西七八十間計ト相見ユ。父老相傳
ニ云。法然上人御入滅ノ比ニ及テ。貴女見參ノ事マシメシケル。御車ノ
歸處ユカシトテ。勢觀房跡ヲ見ヲクリ給ケシド。終ニ見失ヘリ。又傍ニ侍ル
僧カノ御車ノ行エラシタヒ來テ。此處ニテ追付奉リヌ。ステニ御車ニ近付テ。
貴女ノ御有様ホノ見入奉ルト聞エケルトナンサル程ニ彼貴女ト申公賀
茂ノ御神トカヤニテ。神慮ノトガメユ、シカリケレバ。彼御房ハ此ニ終ヲ
トラレヌサレバ。此地ハ彼房ノ死ケル處ナレバトテ。忌テ神領トシガタケレバ
舊ハ賀茂領ナリケレド。彼時ヨリ社家モ綺ハズナリヌ。其後此處ヲ房之
死ト名ツケテ。何方ノ支配トモ定ラズトナンイヘリ。近比洪水ニアヒテ。居
所ヲ失ケル者。家居シテ。茅屋一宇ゾ今ハ出來ニケル。此事サセル記文モ
ナケレド。村民ノ口實トシテ。老農ツチニ語りアヘリキ

くわて上人。客人の貴女たまへんよう侍らん。と。ぞ
づい申されたまへ。あれこそ韋提希夫人よ加賀
茂の邊よたりし。あはれなりや侍られり。これ

○解脫上人。
諱ハ貞慶。少納
言通憲ノ孫
貞憲ノ息也。
○明惠上人
諱高辨。紀州
在田郡ノ人ナリ。
父ハ平重國

事未代には。あはれこそ侍られり。これと人いひます。
う宿老よりて。行徳をたけ。三昧をも發得
たり。侍れん。權化のより。誠ありや。たま
ん事。たごりくよ。あはれこそ侍

○河原屋ハ
當時相國寺ノ
地ナリ。松鷗軒ニ
法然水ト云
アリ。池水ノ御
歌此處ノ詠

○九卷傳ニ賀茂ノ大明神ノ本地ヲ知人ナシ。而今ノ仰ノゴトキハ。計知賀
茂ノ大明神ハ韋提希夫人也ト云事ヲトアリ。選擇之傳ニ世云。中宮。韋
提夫人。上宮。阿闍世太子。貴船。明神。頻婆。沙闍羅王也ト。今ノ相國寺ハ。
古ノ賀茂ノ河原屋ノ舊地ナリ。上人此ヨリ明神へ請給ヘル通路ナリトテ。法然
述乎トイヘルゾ。今ニ存セリ。具ニ六寺院。ノ中ニ注ス。カ、ル因縁マシメス故ニ。常ニ御信仰ハ
アリケルニヤ。○釋書傳。解脫ニ。解脫上人。春日ノ神祠ニ請テシ。群鹿三ナ前
足ヲ折トイヘリ。又大平記ナドニ。種種ノ奇特ヲ載タリ。明惠上人。佛夫。明
王等ノ感應アリシ事ハ。釋書ニ載テ。其奇特一ニナラス。凡出定入定ノ間

東北ノ方ニ當
レリ。或云遠州
丁子ニアリ。今
天台宗ニテ
寺産五十石
アリト。銘心鈔
遠江國一宮
御領トアリ。

生死をいぐる人事。いくよきありがてくたほえん
れん熊谷れ入道。念佛往生のひひ返たしひいた
よりをきつての筋よきづひ返さぬ。禅門
の教訓をくつてのらぐりまき事ハ。ワグ師
法然上人よたづひ申はるへしきして。奉状を
あへんくれん。上洛して吉水れ山房にまゐりて。
無智れ罪人の極樂浄土よ往生す事れ依
たる返がけたまひん申はれし

○蓮華寺。此寺禪宗ニテ今尚存ス。竹林ノ中ニ御房ノ古墳ヲ遺セリト云
寺院ノ中ニ注ス。○イカニモアリカタクトハ。イカニシテモアルベキ事カタカラシ
トナリトソ。○カノ所ト云。武藏國熊谷ナルベシ。次下ニ上洛ノ事アレバナリ。
○舉状ハ人ヲ吹舉スルノ書札ナリ。東鑑云。建長二年四月二十九日。雜人

訥訟ノ事。諸國ノ者ハ在所地頭ノ舉状ヲ帶スベシ。鎌倉中ノ者ハ地主ノ
吹舉ニ就テ。子納ヲ申スシ。其儀ナクシバ直訥ヲ用ベカラサルノ由。問注所ニ
仰遣ハサルナトアリ。此類諸記ニ往往ナリ。○此禪勝房正嘉二年八十五
歳ニテ遷化セラルトアレバ。承安四年ノ誕生ナリ。二十九ノ年ヨリ。一向稱名ノ
行ヲ勤メトセラルトアリ。是上人ニ見參以後ノ事ナルベシ。サレバ吉水ニイラ
ルトハ。二十九ノ年ナラバ。建仁二年ニ相當シリ

上人はれんハ。それ極樂のありにてわり
すす阿弥陀佛しん。なほ事志ぬ罪人れ
諸佛菩薩よを捨てられ。十方れ浄土のも
門をさまたるも。返。返とくとなしけ
すくりんといぬ願をわらうて。十方世界れ衆生
来迎したまふ佛よ。うくくがねまひ。うわ
びん。心返志がえりて。うくくま。う。唐

去より日本國よりつたる一切經し。五千餘卷あり。それ中より（三）雙卷無量壽經（四）觀無量壽經（五）小阿彌陀經。これらを浄土三部經といはれけり。往生極樂乃やうてとまよへる經なり。此法藏比丘と申しし入道。四十八の願をたてし。極樂浄土を建立して。一切衆生に平等に往生せよとせんまことし。けり。佛にたつた人時其名を稱念せん衆生は來迎せんといふ願をたてて。真實に往生せんと思ふ。念佛申衆生をひくとをきて佛より給ふ。四十八願の中（六）の第十八の願こそこれなり。本願乃ひたしし。いづるに念佛して往生すべきをえむ。此の願にさしづかす。上人給仕乃御弟子の中に信心堅固のほす此ありき。

（一）破戒懈怠無信謗法ノ輩ハ諸佛ノ國上ヲ擯出セラレ。天龍鬼神モ跡ヲ拂テ啼啞スナド説（注）深大集梵（注）細十輪等經。タレバ諸佛菩薩ニモ捨ハラレ。十方ノ浄土ニモ門ヲサレタルト云ナリ。一切經五千餘卷上。大藏綱目云。大乘經律論總六百三十八部計二千七百四十五卷。小乘契經總二百四十四部計六百一十八卷。小乘調伏藏總五十四部計四百四十六卷。小乘對法藏論總三十六部計六百九十八卷。賢聖傳記有譯本者六十八部計一百七十三卷。無譯本者四十部計三百六十八卷。通計大小乘經律論總五千四十餘卷。以開元釋教錄爲在佛祖統紀云。開元錄所載五千四十八卷。白氏文集云。蘇州南禪院經藏石記。經函二百五十有六。經卷五千五十有八。（按）唐開元經藏石記。今按。文集八五ノ字誤レニヤ。開元釋教錄記云。右從後漢逮至皇朝。合二十九代所出。大小乘經律論並賢聖集傳總二千二百七十八部。都合七千四十六卷。於中一千一百二十四部

五千四十八卷見行入藏據其實數但一千一百二十三部五千四十七卷是見行數

四十七卷是見行數
一千一百二十三部五千四十七卷是見行數
一千四百四十八部一千九百八十卷是闕本數
兩件見闕合有二千二百七十七部七千二十七卷

扶桑略記寬平二年十二月二十六日紀云圓珍奏云天台阿闍黎所寫一切經未校正也於是大比叡小比叡明神等現可校之事已及數度珍捨餘財以終其事然今我國所書經二千卷也前大政大臣於彼山令寫一切經開元錄等所有四千餘卷雖求之頗尚不足珍唐來之日楊州人相隨來者岸後還本土爰為求加其卷數差徒僧向天台使書件經可送之狀遣彼楊州人之所彼人信其言送五千卷來頗有如是類可寫足其卷數云云釋書云天元五年台山有法闍流言慈覺之徒欲燒千手院院有智證經藏勅平侍中上山告諸者宿固守經藏今私云天台前阿闍黎所寫者事出釋書傳思之我國ノ藏經此時ニ満足スル歟○心地觀經四云發菩提心捨離父母出家入道彦琮法師叙出家損益表曰天竺貴種辭恩愛而出家東夏貴遊厭榮華而入道ト恩愛ノ家ヲ出テ菩提ノ道ニ入ラ入道ト云○レウハ料ノ字用意ノ義ナリ上ニ往往ニ見エヌ

これいぢり不審なる事ども返たゞり申
くくりにまきて上人御返答此條ト

○九卷傳三百餘日祠候シテ條條ノ不審ヲ尋申ト

一自力他力と申事いゝやうに心得傳へまこと
上人のたまはるく深空ハいぬひりき邊國乃
去民たりやうく昇殿とべき器よあゝも
とらりめはまうらけは二度まて殿上へまい
りたりきこれ志うたがうと此御らる程なり
これ定よ極重惡人無他方便た九まはりて
報身報土の極樂世界へまゐるるべき器りハ
あゝも阿弥陀佛の御らうたれん稱名

乃本願よこころへて来迎よあづからん事なるの
不審ありあづまきりて力れりてなり。無智れ
者なり我んいづく往生をとげんを疑ふら
ばさやうにうづり人なれ。いまぶ佛の願を
あつざるをれぬ。くのごまき乃罪人をす
くりんたれ。本願なり。此名号を唱るるに
ゆえくうごふ事あり。次十方衆生れ
願乃中よ。有智無智。有罪無罪。善人悪人。持
戒破戒。男子女子。乃至三寶滅盡の後。而
歳のあひごえ衆生よ。てもあづ事なり。
これ三寶滅盡の時。衆生へ命れたる。八十

歳たり。戒定恵乃三学。その名をよこよこまきり
けといへり。これ衆生す。ても念佛で。来
迎よ預めり。と知たる。れり。が。身す。て。ぬ。へ。
といぬ事。を。い。く。心得。出。と。へ。ま。や。た。ぐ。極
樂。れ。縁。が。う。か。れ。次。念佛の申さ。れ。ら。ん
ご。ら。り。の。往生。れ。さ。つ。と。た。る。へ。念佛よ。ま。れ。う
ま。い。無量。れ。た。り。て。失。る。ま。い。人。れ。り。念佛よ
い。さ。と。ある。人。無邊の。り。を。ひ。く。る。ま。い。人
れ。ら。相。構。て。願。往。生。れ。心。よ。て。念佛を。相。續
と。へ。ま。れ。ら。我。ら。う。ま。て。い。れ。り。よ。ま。い。罪
人の念佛と。う。へ。よ。本願よ。乘。り。て。極樂へ。ま。い。る

を他カレ願とも超世カレ願ともいぬなり

○内裏へ参ルヲ参内ト云。院へ参ルヲ院参ト云。御殿ノ縁ニテ昇登ヲ外ノ昇殿ヲ云ト云。御殿ノ内ニテ参ルヲ内ノ昇殿ヲ云ト云トゾ。○第三十六卷。故法皇ナラビニ高倉先帝ノ圓戒ノ御師範ナリ。第十卷。高倉院御在位ノトキ。承安五年ノ春勅請アリシカバ。主上ニ一乘圓戒ヲサツケ奉ラレ後白河法皇勅請アリケレバ。法住寺ノ御所ニ参ジテ。一乘圓戒ヲサツケ申サレケリ。年代不注第九卷。文治四年八月押小路ノ仙洞ニテ御如法經ノ御先達ニ参ラル。又建久三年。法皇御惱オモラセオハレシケレバ。二月二十六日御善知識ニ参レ給テ。御戒ヲ授タテミツラル。又後鳥羽院度度勅請アリテ。圓戒ヲ御傳授。年代不注上トアリ。按スルニ後鳥羽院ノ勅請ハ上人晚年ニ及ビ配流以後歸洛ノ後ノ御信伏ナルベシサナクハ建永ノ逆鱗安樂等ヲ死刑セラレ科科ヲ師匠ニ及ボサルノ事ハアズシサレ今此仰ハ建仁ノ比ノ御示ナレバ此ヨリサキ四度ノ昇殿ナルベケレドモ始テ堂上ヲ許サレ給ヒシヲ取テ後後ヲノ給ハヌニヤサテ二度ノ殿上ト仰ケルナラン殿上地下ノ事第二十卷ニ注シヌ。○コノ定ニトハ此様ニトナリ。○命ノナカキ八十歳ナリトハ是大悲經及俱舍論ノ説ナリ。群疑論ニ載之文云未法萬年之後經道滅盡特留此教更住百年此刀兵劫時人

多造惡所執草木悉成刀劍互相殺害瞋毒熾盛人壽十歲身長二寸更不能修三學唯能念佛願生西方於諸經後利益有情取上云云

案内を志すばる人ハ棧き波うづひて往生セざるなり。道心者智者ちの念佛して往生ハ一語ら免あけらば罪と波のまはくら。一文字を志すも志すばるんこれハ念佛申とて之。往生不定なりと疑うものは本願の善惡ハ棧を志してはらう。強はらといぬ事を志すぬ人なり。先世業ごによきてびよれたる男をい。今生れ中にある難ためたるを次事し。はれん女人の男子おんとたりんこれまへも。今生れ中よ

ハラアヒゲニマヅリヒキアケタリ行ナドアリ○コザカレクハ小賢ノ字ナリ
日本紀ニ賢ノ字ヲミナサカレト訓ズ○源空ガ身モト云ヨリ下ハ上ノ
生レツキノ品ヲ不改皆往生スト云コトヲ御自身ノ上ニ引懸テ決シ
給ヘリ謂ク其品位ヲ改テスル往生ナラバ源空ガ身モ諸寺諸山ノ檢校
別當ナド云同位ニモスミテヨリ往生ハスベシ本ノ無官無位ノ法然房
ニテハ往生ハエセシ然ルニ念佛往生ノ一法ハ器ヲ改メサナガラ生レツキ
ノマニテスルミチナレバ但コノマニテ迎ラマテ生レト思フナリトシ
トレゴロ習タル智慧ト云ヨリ下ハ伏難ヲ通シ給タルナリ難云官祿コソ
自レリソキテ承給ハ子何トテ博ク學テ諸宗ニ通シ深ク解テ智慧深遠
トナリ給ヘル通云凡報土得生ハ上ハ十向滿位ノ菩薩ヨリ下ハ薄地ノ凡
夫ニ至ルマデ唯佛ノ願カラ憑テコソハ生ルナレ自分ノ智カニテハ絶テ叶ハヌ
事ナレバトレゴロ習タル智慧ハ往
生ノ爲ニ何ノ用ニモ立ヌトナリ

一淨土一宗乃。諸宗よこえ念佛一行の諸行よす
ぐもあしりといぬ事い萬機を攝とる
ばいぬなり理觀てんが菩提心びんじん讀誦大乘たいてん真言止觀しんごん

等いんせも佛法のをえこよあしりいあ
れはこれ生死滅度れ法をたとも未代よたり
ぬまこしらをよばけ行者れ不法なるにありて
機つれよぬたり時をいへ未法萬年のしら人
壽十歳よはげより罪をいへ十惡五逆ごぎやくの罪
人なり老少男女れともか一念十念れたらひ
よいよまぐれこれれ攝取不捨しやくしよのしらひよこ
え此るなりこれゆへり諸宗よこえ諸行よ
すこれたらし申やり
一臨終の一念ハ百年れ業よすぐれたらと申候い
平生へいせいれうらに臨終ハ一念ほどの念佛の申ひ

とてまづく作やんと。と人の終る。具三心者必生彼國と。さうもたれん。三心具足の念佛ハ百年の業にすぐれし。臨終乃一念とれたる。事なり。必文字れあるゆへり。

○三心サ人具足スレバ平生ノ念佛モ必生ノ淨業トナル。サレバ臨終ノ一念ト差別ナキナリ。業事成辨ハ平生臨終ニ通スト云事。當流ノ相傳ナリ。第二十一卷ニ見エタリ

一念佛の行者毎日れ所作よし念をたつるもあ
り。又心よ念どし數をさる人もあり。いづれ
を本とすべく作やんと。と人の了はつて口よ
とれへ心よ念どる。れたる。名号たれん。いづれも
これ往生の業とあふへ。たゞ佛の本願ハ

稱名と云強ぐゆへよし念よいづすへきなり。經
よ。今聲不絶具足十念とた。釋よ。稱
我名号下至十聲と判ト強へり。つぎ耳てき
こゆるほどを。高聲念佛とするれり。但機嫌を
さるは。高聲とて強きよはあ。地脉ハ念よ
いづれんとれよべたなり

一餘佛餘經よしき。結縁助成せんとい。雜行たる
ゆへ作やんと。と人の了まつて。變定往生れ信
をとりて。佛の本願よ乘らん。他の
善根よ結縁助成せん事。また雜行とたる
へ。次。往生れ助業とたる。善道れ釋

○散善義云
言同發願

心者過去及
以今生身口
意業所修世
出世善根及
隨喜他一切
凡聖身口意
所修世出世
善根以此自
他所修善根
悉皆真實深
信心中同向
願生彼國如
名同發願
心

の中にすてよ他の善根返隨喜し自他
善根をもて浄土に廻向とと判したる人
釋法をて知へきなり

○決定ノ信ヲ取テ念佛ノ一行ニテ不足ナレト思入タル上ニマタ多雜行
トナルベカラズトナリ

持戒のよの念佛の數遍れすくやまこと。破戒
れよの念佛の數遍れなやまこと。往生の後
の位も淺深いへば進へまこと

○持戒ノ人ノ念佛ノ少トハ按スルニ是持戒念佛願毅ノ機ナレレ此ハ
念佛ヲ以テ生因ノ行トシテ不足ノ心ハ更ニ無レドモ佛弟子タル四輩ノ通
儀ナレバトテ戒ヲ持スルナリ然ルニ性習不同ナレバ修戒ハ精強ニ念佛ハ緩
漫ナルナリ凡ソ此問ノ意ハ持戒ノ念佛ハ勝ルヲ以テ往生已後ノ位モ亦
應高無戒破戒ノ念佛ハ劣ルヲ以テ生後ノ位モ亦應卑ト執セナリ
然ニ名號ノ法體ハ萬德ノ所歸ニシテ無上ノ功德ナリ更ニ何ノ法ヲ増

加テカ勝レシムル事ヲセンヤサレバ智愚トモニ稱ジテ同ク生ジ僧俗男女
善人惡人有戒無戒全ク別ク所ナレ何ゾ持戒ノ念佛ハ勝レ破戒ノ念
佛ハ劣ラシヤ但シ生位ニ昇降アル事ハ機根ノ強弱數遍ノ多少ニ隨テ只
自ラ取ル是持破ニアツカルニ非ルノミ是ヲ以テ彼ガ問ニ取リアエス直ニ
持戒ノ執ヲ奪テ只持戒ノ詮議ナク專ラ念佛セヨト示シテ所問ノ生
後ノ位ノ淺深ハ答ヘ給ハス今試ニ往生已後ノ位ノ淺深ヲ論セバ戒行急
ナルガ故ニ蓮華尋開テ多時ノ華合ヲ經ス中品上生ニ蓮華尋開ト是ナリ
念佛緩ナルガ故ニ無生漸ク悟ル下品上生ニ經十小劫具百法明門得入
初地ト是ナリ茲ニ知ヌ戒急ナルガ故ニ速ニ蓮開クトイヘドモ乘緩ナルガ故ニ
位稍下品ニ降ル也破戒無戒ノ念佛ノ人ニニアリ一ニ平生廻心ノ人
自ラ破戒無戒ヲ慚愧シテ如是ニ學無分ノ出離ノ縁ナキ我等カ爲ニ
發シ給ヘル本願ナレバ我コソ往生ノ其ノ人ナレト深ク信シテ疑ナク慮ナク
佛ノ本願ニ打乘ジテ定テ往生ヲ得ト思ヒテ日夜精進ニ數遍ヲ積ミ
スレバ皆上品上生ヲ取テ速ニ初地ヲ得是レ戒緩ナレドモ乘急ナルガ故ニ
上位ニ昇ル也二三臨終廻心ノ人是レ乘俱ニ緩ナルガ故ニ多劫ノ後華
開位最モ下品ヲ取ル此ノ人若廻心ノ後病愈命延テ年久シク念佛ノ功
ヲ積バマタ向ノ
人ノ如クナルベシ

末法燈明
記一卷傳教
大師述

上人坐し強へる疊をさうくくの強く。たゞこれ
あつたつきて座をたれたるや。やねまはらるるをば
論ずへきたり。疊たれくいづく座をたれたるや
ふれらるるをさう論ずへきたり。たゞやうに
末法の中よ、持戒をぬく。破戒もなり。たゞ名
字に比丘のよあり。傳教大師乃末法燈明記
り。それじよあさうのやうに。そのうに持戒破
戒の沙汰あるやうに。たゞこれくくのたゞ
ぬめた。たゞたゞ本願をたれ。たゞいさうさ
てもいさうさうを。名号を稱とへ。

○二百五十戒。マタク受持スルヲ。比丘ト云ナリ。山家ノ意ニ依ニ。當時末法ノ

世ニナリテハ。持戒堅固ノ人ナケレバ。比丘トイヘルモ。只名字ノ。三ナリトゾ。涅槃經六ニ。聲聞僧中。有假名僧。有眞實僧。有和合僧。云云。今名字ノ
比丘トハ。經中ニ假名ノ僧ト云是ナリ。○末法燈明記云。設雖末法中。有
持戒者。既是怪異。如市有虎。此誰可信。韓子云。有言市有虎。則
可信之乎。市無虎。明矣。云云
此釋ヲ解スルニ二義アリ。一云。是或大乘律儀戒。小乘戒者。依十人僧
十人僧何。非謂大乘菩薩戒焉。漢語燈錄興。而受之也。末世無有
有得戒者。非謂大乘菩薩戒焉。禪護國論。或通收大乘戒。謂凡
大乘ノ戒ハ。菩提心ヲ能起トシテ無作ヲ起シ。復此心ヲ所依トス。然ニ未
世ニ僅ニ信心アル者アレドモ。菩提心ヲ發セル人ハナシ。若能發所依ノ心
無クシ。戒體何ニ依テカ起リ。還何ヲカ所依トセン。故ニ大乘戒モ亦無也。
或大乘戒ハ。從他ハ一人僧。又自受ヲ聽ス。茲ヲ以テ小乘別解脫戒ノ十
人僧ノ得カタクキニ不同。又縱ニ末世ト云フトモ。何ゾ發心ノ者無ト云ハ。ンヤ
故ニ吾カ大師ノ一化盛ニ圓頓戒ヲス。メ給ヘリ。只是少在屬無ニシテ。全
無ト云ニ非ス。一云。末法ニ破戒ノ僧多シ。恐ラクハ在家ノ人。謗罪ヲ造ラシ
事ヲ。故ニ此釋ヲ作テ。持破トモニ信敬セシム。功德ヲ得ベキカ故ナリ。是即
諸經ノ密意ヲ述ス

破邪顯正ト云
記取意
一後生をハ。蘇陀れ本願をたのし申さハ。往生う

たづひの現世をぞ。いづれか。いづれか。いづれか。上人
の路。現世をぞ。いづれか。いづれか。いづれか。念佛の申は。我
ふ。いづれか。いづれか。念佛は。いづれか。いづれか。
ぬべし。ん。事を。いづれか。いづれか。いづれか。一。所。よ。て
申は。いづれか。修行。いづれか。申へ。修行。いづれか
申は。いづれか。一。所。よ。て。申へ。いづれか。いづれか。申
は。いづれか。在家。いづれか。申へ。在家。いづれか。申は。我
づれ。道。世。いづれか。申へ。いづれか。いづれか。居て。申
は。いづれか。同行。いづれか。共。行。いづれか。申へ。共。行。いづれか。申
は。我。づれ。一。人。いづれか。居て。申へ。衣食。いづれか
は。我。づれ。申は。我。づれ。他人。いづれか。いづれか。申
は。我。づれ。他人。いづれか。いづれか。申へ。我。づれ。自。力
に。て。申へ。妻子。いづれか。後。類。いづれか。自身。いづれか。と。け。ら。我
て。念。佛。申。え。ん。た。め。わ。念。佛。の。さ。ら。わ。た。ら。へ。ん。
ゆ。え。ん。く。も。い。づれか。所。知。所。領。も。念。佛。の。助。業
は。いづれか。大。切。な。ら。妨。よ。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか

○修行上。廻國巡禮ナドスルヲ云ナリ。修行ハモト行住坐臥ニ通シ。又身
口意ノ三業ニワタレドモ。日本ノ俗昔ヨリ山林并敷ノ身トナリテ。拈鉢
遊行スルヲ。修行ト云ナリ。續日本紀云。聖武天皇天平三年八月詔曰。除
行基之徒。自餘禁持鉢行路者。其遇父母。夫喪。期年以内。修行勿論。
詞花集云。修行ニマカリアリケル。野中ニ宿シテ侍ケル夜。旅ノ枕ノ
露ケク侍ケルニヨメル。圓玄法師。カクレツ。終ニト。ラムヨモキ。アノ思ヒシラ
ル。草枕カナ。蓮生法師。世ヲノガレテ後。修行ノツサテ。アサカ山ニテ讀シ
歌。新勅撰ニ見ユ。此等ノ例。諸書ニ往々ナリ。○本ヨリヒジリタル身ナリトモ。
念佛申サズ。在家ニナリテ申ヘシトナリ。若イマタ。在家ナリシ身カ。ヒジリ
テ。ハ。イカ。ナド。思フ。勿論ナルベシ。ヒジリトハ。妻子眷屬ヲモフリ捨テ。ウキ

世ヲカロクシタルヲ云ナリ。第三卷ニ注シヌ○從ハ願也字我ニ隨願シテ給侍スル輩ヲ從類ト云ナリ

惣そとしてこれをいんぐ。自身安穩あんげんよとして念佛往生をとりげんがためよは。たに事をこれ念佛乃助業なり。三途さんずよへる處ところさきこへ後のちよる身をさしてすてぐるをれいんぐもこころごとくびとにありて往生とべき念佛申さん身をばいんぐをいんぐもてやりすへ。念佛の助業たすけなり。して今生れために身を貪求えんぐとる。三惡道さんあくだうに業とやる。往生極樂ごくらくのために自身は貪求するは往生の助業とやる。わらとそて修しゆれたる已と取詮

○凡多助業様トナル中ニ念佛ニ對シテ云アリ。往生ニ對シテ云アリ能能可なり意符事ナリ。第二十下卷ニ注シヌ○ハク、ミハ育ノ字ナリ。九卷傳ニ羽合ヲ字ヲ書リ、モテナスハ。第二十六ニ見ユ。金葉集ニ。天台座主仁覺アハレシト思フ心ハヒロケレトハダ、ム袖ノセバクモアルカナ。梵網古迹ニ云身心道器不取毀傷云云此ニ言心亦此謂ナルベシ

本願のうごひをやく。往生れまひも治定ぢぢぢとしてよきこと。上人の座下ざげ儀ぎ辭い下向げきやうの服ふくを申まをする時。上人京きやうとせんこと。聖道門せいだうもんの修行しゆぎやうの智恵ちゑをまひめて生死しんじをいれき。浄土門じやうどの修行しゆぎやうの愚癡ぐぢよへもて極樂ごくらく入りむよる也。心得こころえありとぞ修しゆれたる

○辭ハ辭退ナリ。暇ヲ申テ別ルヲ云○京ツトハ萬葉ニ菴あま直ちか裏らノ字ヲ書ケリ。又裏物トモ書ケリ。其所ノ土産ナリ

はて本國ほんこくよへもていんぐとこれ徳とくをかして

○國府の第十七卷ニ注レヌ○サルヘキヒリトハサヤウナル聖ノ然ルヘキ人ト
也。行幸ニサルベキ人々ニモ立ヲクレトアル此類ナリ○イカニモアヤシク
侍リトハナル程心モトナレトナリ○往事ハスキツル昔ノ事ヲ云ナリ。白居易
詩ニ往事耽忙都似夢文集第七○目モアヤニ見ケリトハ。見ル目モアヤシクテ。
覺エケルトナリ。源氏ニサタスキタル御メトモニハメモアヤニコノマレウ見ユ若
抄目モアヤシキニテ驚クナリ細流。拾玉集ニ忍年戀。慈鎮。アラヌ色ニ
我クロカミノ成行ヲ波ナラ子バ入ソアヤメヌ○律師ノ申分ガニモスズル
事ナリトゾ。サモイハレタリトテ褒タル詞ナリ

律師アウれ弟子ていしどももんろくにをくらて。たあくあひ
しそまらまる志ろしよ。たに事にてを御一言を
ろく物しんと申々我い。志ろしよこれものしよあ
ざりたる。たろしよへまて。つゆへくをのく念
佛つひよ申もをくせはまて。往生し強へそを
の終る。其後の國中ハ貴賤きせんたうとそあがぬけ
れ。番匠ばんじやうにてもえれたハ。世念佛の化導をひら

くそ傳つたる。此し志り申はれを。浄土宗の
学問の所詮しよせんハ。往生極樂ハ。やとれ事と。ころ
う。はが。大事なる也。なと。心得こころえも。や
と。る。べき事なり。志ろしよに近代の学生ハ異
義いぎあり。く。た。聖教しやうきやう甚深じんじんなり。邪正じやせいも
ま。へ。て。但上人の信しんよ。い。ば。し。を。れ。事。い。ち。り
た。と。そ。の。強。を。し。ら。て。或人ハ。往生しやうじやうハ。い。う。程。よ。う
思定しやうぢやうも。て。傳つたる。と。り。れ。を。こ。ん。た。の。こ。ゆ。を。
右れこゆ。に。て。う。ん。よ。う。ら。し。む。は。ま。ま。は
ご。に。お。ほ。え。強。と。申。を。を。さ。う。強。て。あ。た。あ。ふ

祓ぐい師資礼をあれくすれども大原乃
座主上人と法談の時之門弟三十餘人を相
率してこれ座よ攝せしむ

○醍醐ハ聖寶僧正ノ開基小野密派ノ本山ナリ具六第四卷ニ見エタリ。
禪徒ハ第三十二卷ニ注シヌ○師資ハ第三十九ニ注シス師弟子ノ禮ヲ
云ナリ釋書云黒谷源空之徒也ト云云○攝ハエラヒ入ラレ義ナリ収也ト
訓ス彙詩ノ大雅ニ朋友攸攝トアリ

治兼此逆乱げき ん。南都東大寺なん とう とう だい じ焼失乃あひび。
これひ志りをせらして大勸進だい こん じんの職しやくよ補おせらる。
とくぐり造管ぞう かんをくつりしるる工こうの器用きよう
をえらつらんためにある番匠ばん じやうをえらして屋を
かたらんとなりよまたふまこれにて本舞ほん まいをう

た人事にん じいごあるべきことといはれよ番匠ばん じやうとて屋
いさしと。いま見え及儀ぎの法ほふを申まをす故ゆゑたよ
やうありたはけくまといはれよ我われをせよあるまじ
き事こと志こころいでてく傍輩ぼう ばいにいつくまらんといふよ
志こころたよわがに侍しやくりと申まをすある此番匠こゝ ばん じやうこれ
らやうにのち中ちゆう々しやうの中に一人領掌りやう しょうするあわ
ゆる屋や目めころをほくらたる事こと侍しやくわやや
といはれりばらる事ことい侍しやくひとを。たよよとらも
をらん強つよらんあにといはれりて心こころを侍しやくあと申まを
る我われんが時ときまよふにうれあにけりをらん
とよいあはれたごのほげ後ご志こころしたために

いふつりなりとて。それらう造殿又エうして
東大寺をいはくわたりて。此等とやんたか
るよるわいよ。くもくくく。こま人たかりた
ん。それらうわくくく。にて支度第一俊乘房
とて。人申す。

○東大寺焼失以下ノ巨細粗第三十卷ニ注シヌ○エハ匠也。工匠所以作器
也。宇屋舎等ヲ作ルヲ大工。或ハ番匠ト云。サレバ屋宇ヲ作ルヲ大工ト云。金
石土木等ノ器物ヲ造ルヲ細工ト云。ト云。カナ匠ノ匠。實ニモノ匠。西ヲ
ヨメル歌アリ○領受也。掌主也。彙引受テ我役トスルヲ云ナリ○番匠ハ大
テノ稱。大工ハ棟梁ニ限ルトノ或説ニ此時ノ大工ハ伊勢國物部爲里櫻
島國宗ト云。ト。具六寺院ノ中ニ注セリ○支度ハ用意ノ義ナリ。第二卷ニ
注シヌ。此比世ニ四天王ト名テ。智慧第一。法然房持律第一。葉上房支
度第一。俊乘房慈悲第一。阿性房ト申ケルトナリ。盛衰記四。二見エタリ。
環書云。源有巧思。乃作一輪車。大可容身。車之左。貼詔書。右。幹疏
縣勸勵萬民。其巨楹。願梁長。二百尺。大。數十圍。源。巧畫妙

計。車如神。祥人皆附。而乞指授。詔書。文第二。十卷ニ出スガ如シ。

備前周防兩國をたまたりて造営此切返をへ
建久六年三月十二日。供養返らむ。天子
行幸あらさき。鎌倉北右幕下。結縁のため
上洛都鄙群をたひて。嚴重の法會たり。わ
十一間二階の大佛殿。金銅十六丈八尺。此盧舎
那如来同時。よひくわたりて。こがまいつじ。さきたん
にかろけれ心をさきて。ふくい。ゆふ。色き事
よあ。ゆ。ら。さ。ん。建久三年十一月。當寺がうひて
供養。此御願文。六角中納言親經卿。よま。た。び。ら。に
あ。ら。る。の。せ。れ。て。傳。り

○親經ハ俊經
卿ノ長男母ハ
參議平實親
ノ女也。元久

○備前周防兩國ヲタテハリトハ東鑑十五ニ文治二年四月十日始テ入周防國^其料材致^{杜礎}釋書聖一傳云文永六年勅領東大寺幹事以周州^其費^略ト云云○造營ノ功ヲフヘト釋書云十餘歲建久六年春三月落慶^{重源}又云其月某日復先^{資治}又傳云建永元年秋九月勅主東大寺幹事不^テ踰四歲大殿層塔凡^當有之所悉備足ト○金銅盧舍那ハ第十六卷ニ注シ又朝野群載ニ殿高十五丈六尺東西二十九丈南北十七丈基砌高七尺東西二十二丈七尺南北二十丈六尺柱八十四枚殿戸十六間天壺三千二百二十二蓋步廊一廻戸二十間東西徑五十四丈南北徑六十丈木像身量結跏坐高五丈三尺八寸^{面自等量具注就中基砌}ト云續日本紀云五丈釋書云六丈六丈トアリ是ミナ往古ノ量ヲ計テイヘルナリ今十一間ト尋常ノ一間六丈モテ十五丈六尺ト云ニ對スレバ太概半ヲ減シタリ若倍量^{一丈ニ尺ヲ}モテ計シバ大抵昔ノ量ニ相合ヘリ又佛ノ身量五丈ナド云ラハ坐像ノ量ナレバニヤ若是ヲ立像トナストキハ十餘丈ノ量ニ符合スラシカレ知人更詳焉○心ヲキテ源氏ニ上ノ御心ヲキテナド云類往往ニ見エタリ俗ニ心ダレナミト云ニ同意ナルベシ○建久三年十一月當寺カサ子テ供養ノ御願文ト云文治元年八月二十八日大佛開眼アリ建久六年三月十二日今此年月カサ子テ供養ノ義イカバ百練抄云建仁三年十月

一日^{後鳥羽}日被供養東大寺仍上皇御幸トアリ久ノ字筆ノ誤ナルニヤ文治建久^{院御宇}ヲ經テ源公ヲシテ大功ヲ終シメケレド供養ノ後逐電セラレケレバ定テ闕トコロナクハアラジサレバ建仁^{土御院}ニ及テ愈修補ヲ加テ重テ供養ヲトゲラレケルニヤ此後尚イマダ全備セサレバニヤ建永ニ榮西文永ニ聖上ヲシテ幹事タラシム次上ニ注スガ如シ○草ハ草案ナリ第十五ニ注シ又此卿ハ新古今真名序ノ作者ニテ後鳥羽院ノ御談ナリキ建仁四年二月六日左大臣二十九日造東大寺長官トナル具ニ公家ノ中ニ注セリ○タヒト六アラサルヨレノセラレテトハ權者ノ化現ナリト注サルトナリ盛衰記^{四十一}ニ釋迦ノ化身ナル由解脫上人ノ夢ニ見給フトアリ僧尼ノ中ニ注スガ如シ

上人の勸化よまゝ了るひく念佛を信仰せよ。此故山とれ醍醐。無常臨時に念佛をす。て。未代乃恒規ら。それほろ七箇所り。不斷念佛を興隆す。此東大寺に念佛堂。高野山に新別所等。これなり。それはとんいよにた

○新別所相傳智證大師ノ

開基又智泉毛
住レ王フト舊
記ニ重源ノ所
住專修往生
院ト云ト近比
律院トナリテ
靈嶽山圓通
寺律藏院ト
号ス凡高野
山ハ本中院
南谷西院並
北谷三院ノ
外ヲ總テ別
所トス其外ニ
始テ此地ヲ
開ク因テ新
別所ト名付
タルマ

えんじとんじうのまゝ

○醍醐ノ西谷ニ圓明院トテ俊乘房ノ住處ト云傳テ今尚存サリ恒規
念佛ハ斷絶シテ寺老モ其事ヲ不知傳寺僧トイヘリ是亡僧アル時ニ臨テ
コレヲ修スルヲ定式トシケルニヤサレバ無常臨時ノ念佛トイヘルナルベシ○
七箇所不斷念佛ハ或傳説云東大寺念佛堂高野新別所播磨淨
土寺醍醐舊住道場伊賀大佛道場大坂渡邊道場周防阿彌陀
寺是爲七箇處云云今按ニ播磨ノ道場ハ郡御末詳伊賀道場ハ大佛
村ニアリ相傳是斯處ニ木佛ノ木像ヲ造立セラレテ安置申サレキ此地
今大佛ト云ラ村ノ名トシテ寺ハ禪家ノ僧侶住持セラレ今尙尙太佛ノ
御頭殘給ヒテ方丈ニ安置シケルトカヤ渡邊ノ道場ハ建仁元年ニ俊乘
房上人行道講ヲ修セラレシ處事次下ニテ今ノ八間屋ノ邊其遺跡トカヤ
東鑑云建久六年五月二十日將軍家參天王寺給洛中於中周防阿
彌陀寺今尙相續シテ繁昌昔ニ取ストカヤ開山自筆ノ記文及繪旨
已下舊記等皆現ニ傳持サリ今其少分ヲ載テ未代ノ龜鏡ニ備ヘトス
其記云

周防國佐波郡牟禮鄉
下月彌陀佛
銘

東限山峯

南限大路辰巳經尾
未申多多良境

西限多多良山界

北限山峯

淨土堂 奉安置阿彌陀丈六像

附持齋戒念佛衆十一口

多寶十三輪鐵塔

奉納五輪水精塔

釋迦眞舍利七枚

經藏

鐘樓 六葉鐘一口 豎三尺
口一尺八寸

護法神社

八幡 熊野 春日

公峯 山王 白山

食堂

釜 壹口 瀾六尺

浴室 鐵鑄壹千斤

くはゆるすへしと。さへ人の天狗制し申さるよ
らめて。極るはまにさるより申はるへて侍り。
それ詞もいざりもる不思議此事なり。建久
六年六月六日東大寺に。してをわら返らるれ
よるるるるる

書圖

○天狗ノ事第四十八卷ニ見ユカクハ。日本紀及白氏文集ニ諸ノ字ヲ
書ケリ。カタハラニ侍ル諸人ヲ云ナリ。新古今ニ百首歌奉リケル時。前大僧
正慈圓。夏コロモカタヘ涼シクナリニケリ夜ヤ更ヌラン行合ノ空。古今ニ
躬恒。夏ト秋トユキカノ空ノカヨヒチハカタヘス。レキ風ヤ吹ラン。○建久
六年六月六日東大寺ニヲハリヲトラルト。彼寺ノ念佛堂ニ此上人ノ位
牌アリ。表ニ大勸進上人南無阿彌陀佛。裏ニ俊乘房重源。元久二年
六月五日入滅。春秋八十六トアリ。是土御門院ノ宸翰ニシテ。宋陳和桂カ
又賜息アル裏ニ。毎年六月五日。位牌等ヲ出ガル。ニ諸人群ヲ

ナキ拜ス。即上人ノ忌日ナレバ此事アリトゾ。サレバ今此ニ云年月等ハ
傳寫ノ誤ナルニヤ。東鑑十五。建久六年五月二十四日前掃部頭親能將
軍家ノ御使トシテ。高野山ニ向ハル。是東大寺ノ重源上人。去ル十三日ニ逐
電シ彼山ニ在ノ由。近日風聞ノ間歸洛スベキノ旨。イサナヒ仰ス。ニ依テナリ。
二十九日重源上人出來レリ。將軍ノ芳命ヲ重ズルノ故ナリ。將軍關東ニ
御下向ノ事。日ゴ彼ガ行方ヲ尋ラル。ニ依テ延引ト。云長明發心集。齋
所權介成清ガ子。此上人ヲタノミテ出家セシヲ新別所ニ進メヤルトテ。
我初メ居ケル所ナリナトイヘリ。若今ノ時日ニ本寺ニカヘリテ入滅ナラバ
時節甚々迫リテ。上ノ二文ニ叶ハサルカ。又百練抄云。建仁元年九月廿一日。
於渡邊東大寺上人行道講。上皇御幸。云是建久六年ヨリ七年ノ
後。元久二年ヨリ。五年先ダテリ。建久六年ヨリ。元久二年ニ至テハ。凡十一
年ヲ經タル歟。一説ニ於高野山新別所建立之。即於當所建永元元年
六月入滅。年八十六也。具本紀。氏系圖。トイヘリ。建永八元久三年ノ改元ナリ。又
彼阿彌陀寺誓願記文ノ奥ニ書云。

勅号彌陀佛 建永元六五
夜半入歸寂 定印偈唱曰
諸業本不生 以無定性故
諸業亦不滅 以其不性故

異説ノクノ如シ知人更詳ニシ給ヘ盛衰記五十八合傳二同シ

翼贊卷四十五

翼贊卷四十五

○鎮西ノ西海
道十一箇國

ヲ總テ筑紫ト

云壹岐對馬

ヲ除テ筑紫九

箇國ト云天智

天皇即位十

年十一月筑

紫ノ大宰府ヲ

置テ聖武天皇

天平十四年

正月廢之同

十五年十二

月始テ鎮西府

ヲ置テ皆筑前

國ヲ其處トセリ

是西蠻ヲ鎮ル

將軍ノ住所ヲ

云ナリ

○加月莊ハ

遠賀郡香月

莊香月村也

圓光大師行狀畫圖翼贊卷四十六

事義

傳本第四十六



鎮西ハ聖光房辨長又号辨阿ハ筑前國加月庄此人也。生年十四歳。天台宗海学次。二十二歳。壽永二年ハ春延曆寺にのりて。東塔南谷觀穀法橋ミヤコの室ムロよいる。のららハ寶地房法印證真マコトよはく。一宗乃秘蹟ヒツクをうけ。四明シヨウメイハ真義マコトギをまさしむ。廿九歳。建久元年トキハ故郷コトウよかへりて。一寺イッテ山ヤマ乃学頭ガクダウよなり。補ホとし。三十二サンジニのころ。世間セカイの無常ムジョウをはらりく。無なと道心ミチココロ返かへらし。今生イマノイハ乃名利ナマリキをすく。身ミ乃ららはれ

翼贊卷四十六

加月勝木甲
木ハ皆訛轉也
師御誕生、地
ヲ西親ノ御タマ
ニ寺トナシテ吉
祥寺ト号シ給
○觀敬法橋
ハ山僧筆記云
未考

○油山ハ筑前
國早良郡ヲ
リ。聖武帝時
聖賀上人筑
前國怡土郡
二七箇寺ヲ立
ル。其寺ノ燈
油ノ料ニ此山
ヨリ菜油ヲ作
リ出サレ故油
山ト云フ。東油
山西油山トテ
西村アリ。皆東

油山泉禪寺
僧舎三百六
十アリ。今唯觀
音堂一宇アリ
西油山天福
寺僧舎三百
六十アリトシ
山ノカタハラ高
所ニ龍樹權現
社アリ。近コ
ロ三村ノホトリニ
遷レリ
○崑崙山ハ
山海經海内
東經云。崑崙
山在西胡西
又地理志云
在臨差西。又
大荒西經云
西海之南流
沙之濱赤水
之後黑水之

資糧を乞ふ。建久八年吉水此禪室に參
じ。時り上人六十五。辨阿三十六あり。ひそくに
たをく。上人の智辨ふ。いほもたりんぞ
わが所解にまぎらんやと。ころろに浄土門に樞
捷をたぐ

○本傳云。人王七十八代二條院御宇應保二年壬午五月六日辰
時誕生。七歲登善提寺附妙法師師撰虛空藏菩薩緣日初授於
書。其性岐嶷時年九歲嘉應二年庚寅九月十三日午時也十四歲
登壇受戒先付唯心法師住岩學天台教。三箇後從常寂法師明
住稟宗綱目。五箇稽古日積雖粗獲幽致而尚欲遊叡岳即依寂
師教示遂到觀敬法橋之室。○壽永二年ノ春本傳二八冬
トアリ。○本傳云。後時觀敬受請旅行此國。前厥後稟一宗祕蹟於
證具云。○本傳云。次年建久補學頭。學頭ト云。武山家者云。三塔
之碩字寺拜任之人。必兼探題職而掌論談之法。義等都預學道
之事。釋家官班記云。延曆寺學頭一。園城寺學頭一。等被任僧綱
例也。勸學講一同之。○本傳云。至三十二親見。弟。絶入。從中
而蘇。忽驚眼前無常速思身後浮沈。即閣所學法門。遍修往生行
業。云。○建久八年吉水ノ禪室ニ參ト本傳云。筑前國明星寺昔有
三層塔婆婆壞年久衆徒令上人聖唱知識九州年來新塔速成
欲迎本尊為之上洛自思惟我昔聞法印證眞常讚法然上人。第
卷ニ今得便宜不可不謁。迺詣東山禪室時五月上旬也。書

上人くるへての。海りも。汝ハ天台の學者たり。れん。
とくか。く三重此念佛を。別してき。いめ
ゆ。一よハ摩訶止觀よあり。念念佛。二よハ往生要
集よすむ。ひる念佛。三よハ善導乃を。弘川の念
佛なり。とて。か。く。此をの。念た。ま。好。文。義
廣。博。う。して。智。解。深。遠。たり。崑崙乃い。い。さ。き
を。あ。ら。う。と。く。蓬瀛此をの。き。ひり

前有大山名曰崑崙之丘
十州記云崑崙在西北海戌地北海亥地去岸十三万里大明一統志三十七云崑崙山在肅州衛城西南二百五十里南與甘州山連其巔峻極終夏積雪不消世呼雪山

よたわ。ひのどらわ。子れ時りいもまで。激
説敷魁よをよぶ。これさるしり。高峯れ心
やえ渴仰れ思ひら。まゝに九支解脱の直路い
浄玉乃一門。念佛の要行よい志りばらわらと信
解して。たぐくよへ。師ご一專へて暫も座下
をらわ。ひのどらわ。一宗改習学して。はぶさ
り庭訓をうたわらわ

○決答銘心鈔云。一止觀念佛者。是為助止觀。請佛救護。揚聲稱名也。二要集念佛者。雖要期往生。念佛之言。廣與五念門通。觀稱況。作願門。一向菩提心也。非但信稱名。言念佛。三今家所立念佛者。分別助正二業。觀察等。為助唯稱名。為正。故念佛言不兼餘也。先師云。故上人彼申。要集念佛。與今家所立念佛。寬狹異也。私云。上人者。辨阿上人也。今按スルニ。此三重ノ念佛。如次上中下ノ三。初ニ相當セリ。於中成佛往。生事。觀理。觀觀。稱通。局。諸佛。除陀等ノ分別。更ニ詳ニスヘシ。○崑崙山本姑蘇山ト云。麻姑掌ト云モノ。此ニ於テ仙道ヲ修シテ天ニ昇ルル高山ナリ。具ニ地理ノ中ニ見エタリ。○蓬萊瀛洲ノ海中ノ仙居ニシテ。凡ハ六エリカタレトソ。○高峯ノ心。本傳ニハ高舉ノ心息。心大歡喜トアリ。高峯渴仰ノ上ノ崑崙頂。蓬瀛ノ底ト云ニ對映セリ。大論第四十九云。譬如深井。美水若無。綆者無由得水。若破。憍慢高心。宗重敬伏。則功德大利。歸之。又云。如雨。墮不住。山頂。必歸下處。若人。憍心。自高。則法不入。十輪經。八云。邪見。慢山。正信。定河云。○暫モ座下ヲサラストハ本傳ニ五月ヨリ七月ニ至ル三箇月ノ間トイヘリ。相傳此間ノ住所ハ四條綾小路。佛工某カ後園ニ小菴アリシヲ。新塔ノ本尊彫刻成就ノ間。暫住ノ旅。宿トシ給。又建久十年ヨリ元久元年ニ至ル六年ノ間モ此處ニ居給。鎮西へ歸リ給フ時。自眞影ヲ書テ佛工カ請ニ酬テ小菴ニトム。因テ呼テ聖光菴ト云。今京極ノ聖光寺ト稱スル是ナリ。○庭訓ハ親切ノ教訓。餘人ニカハルヲ云ナリ。論語ノ季氏ニ伯魚庭ヲ過ケレハ孔子呼テ教訓シ給テ父子ノ間。別シテ親切ナル事。他ニ殊ナリシヲ云ナリ。又書言故事ニ。見聞録。韓魏公守北京。李稷以國子博士。為漕漕。轉頗慢。公公不與校。待之甚禮。俄文路公代魏公留守。未至。揚言云。李稷之。父絢我門下士也。聞稷取慢魏公。必以父死失教。至此吾視稷猶。子。禮待稷也。果不悛。呼庭訓之。庭前訓。誠之也。公至北京。李稷謁

○崑崙山本姑蘇山ト云。麻姑掌ト云モノ。此ニ於テ仙道ヲ修シテ天ニ昇ルル高山ナリ。具ニ地理ノ中ニ見エタリ。○蓬萊瀛洲ノ海中ノ仙居ニシテ。凡ハ六エリカタレトソ。○高峯ノ心。本傳ニハ高舉ノ心息。心大歡喜トアリ。高峯渴仰ノ上ノ崑崙頂。蓬瀛ノ底ト云ニ對映セリ。大論第四十九云。譬如深井。美水若無。綆者無由得水。若破。憍慢高心。宗重敬伏。則功德大利。歸之。又云。如雨。墮不住。山頂。必歸下處。若人。憍心。自高。則法不入。十輪經。八云。邪見。慢山。正信。定河云。○暫モ座下ヲサラストハ本傳ニ五月ヨリ七月ニ至ル三箇月ノ間トイヘリ。相傳此間ノ住所ハ四條綾小路。佛工某カ後園ニ小菴アリシヲ。新塔ノ本尊彫刻成就ノ間。暫住ノ旅。宿トシ給。又建久十年ヨリ元久元年ニ至ル六年ノ間モ此處ニ居給。鎮西へ歸リ給フ時。自眞影ヲ書テ佛工カ請ニ酬テ小菴ニトム。因テ呼テ聖光菴ト云。今京極ノ聖光寺ト稱スル是ナリ。○庭訓ハ親切ノ教訓。餘人ニカハルヲ云ナリ。論語ノ季氏ニ伯魚庭ヲ過ケレハ孔子呼テ教訓シ給テ父子ノ間。別シテ親切ナル事。他ニ殊ナリシヲ云ナリ。又書言故事ニ。見聞録。韓魏公守北京。李稷以國子博士。為漕漕。轉頗慢。公公不與校。待之甚禮。俄文路公代魏公留守。未至。揚言云。李稷之。父絢我門下士也。聞稷取慢魏公。必以父死失教。至此吾視稷猶。子。禮待稷也。果不悛。呼庭訓之。庭前訓。誠之也。公至北京。李稷謁

見坐客大久之公著道服出語之曰師父吾客也只八拜授不獲
已如數拜之

翌年建久九年此春上人選擇集を聖光房に以
けりしる。此月輪殿此任よりしてえりしる
所なり。いまも披露よ及びどといへとも。汝の法器
れり。傳持しるたり。やう此書をうけりて未
代よりひろむる。と信じてる。かくだけれく
頂戴してうたわれ。我大師釋尊。たゞ法然上人の
里ゆきぞ。たごひ申とせむ。

○此集ノ起り建久九年正月一日ヨリ房籠ノ事ニ依テ月輪殿ノ請
ニ應ニテ撰述シ給ヘリ。サレハ此御傳授ノ殿下へ編進セラレテ後イク程
ナカリシカナイ。夕披露ニ及ハヌトナリ。一説ニ正治元年建久十
年改元二月
復趣帝土重奉仕法然上人。上人告言建久九年正月二
月依月
輪禪定殿下請命造一軸書號選擇集蒙嚴命不流布是以前無聞
于世無人于寫瓶汝法器仁須傳我法密寫斯書必通未代良榮
決疑

同年八月よ上人の嚴命候うて豫列よ下く
念佛をすむ。その化よ志しうをれとて誠志を
ど。又建久十年二月よ歸洛して上人よ奉仕と
それより元久元年七月よいりるまで六箇年。
寸陰をわいて釋文を研覈し一宗に深奥をま
しむる。水を器にふりてかきし

畫圖

○本傳ニ歸安置佛像於塔遂供養儀於此安居一向稱名矣建久
九年到預州勸念佛從八月至十一月傳法繪云弟子辨阿上人
入室後遣伊州而弘通念佛還鎮西建立光
明寺道俗歸者如雲霞焉豫州久米郡鷹子村西林山三藏院淨
土寺昔法相宗今
真言宗也ハ相傳テ孝謙天皇ノ勅額ナリト云堂宇荒涼セリ時
賴朝卿聞召テ再興アリ。其後郡司河野氏修飾ヲ加ヘテ代々ニ及ベ
リ。境内八町四方ヲ限リテ重科違犯輩ト云トモ當寺ノ領ヘ入ヌ

ル。赦免アルヘキヨレ照文アリトカヤ空也。上人圓光大師聖光上人ノ影アリ。是其門流ナト住居セル事アリテ此像ヲ置ナルヘシ。即是光公ノ念佛勸進ノ遺跡ナリト云事疑ナカルヘキニヤ。又良忠上人到筑紫詣光師而上洛時於當寺勸拜四衆亦作自影侍。大師光師影ト云。元祿十五年三祖ノ影城下ノ大林寺ニ遷座アリ。淨土源流章云西山第四世孫見性大德門下有快喜者住豫州宇和郡弘持所傳同三世孫觀日門人有豫州成信聖人又證入西山之門下有豫州蓮宿公中是皆鎮西ノ遺風ニ扇カレテ出生セル者歟。○淮南子一云。聖人不貴尺之璧而重寸之陰。晉書陶侃傳云。禹惜寸陰。○研カカクト訓ス。數ハ物ヲ考テ其實ヲ得説文ナリ。○水ヲ器ニウツストハ傳授ノ相違ナキヲ云ナリ。第十卷ニ見エタリ。本傳云。凡日參學都無懈怠。非帝聞淨土兼亦涉餘宗。爰有真觀法師而諭云。奉觀上人每夜稱名不顧疲勞。連日談義從晨至暮。老體豈無有窮。屈宜有意忠義。自今以後二日一參云云。依之。一日不參漸至暮天。上人遣使而曰。今日遲參有何障耶。今欲談法門。應疾來也。得此使節始識傳法志。屢抑感淚。即時參學云云。書

此の學好り切をへて。元久元年八月上旬吉水

此禪室を辭して鎮西ノ舊里より入里淨土

一宗を興とる。利益四遠よあまのり

○本傳云。道俗歸者二千餘人。男女去者其數幾耶云云

こゝにある學者上人の門弟と号して云。淨土甚

深の秘義ハ天台圓融ノ法門よたれど。こゝに此宗

此徹底たり。又密これ口傳あり。金剛寶戒こゝに

たり。善導の雜行を制して專修をす。久遠ハ

志も〜初心れ行人のめれり。これに實義り

あ〜此とれら上人の相傳おわと。云

○今世ニ金剛寶戒章ト名クルモノ三卷アリ。其上卷ヲ金剛寶戒訓授章ト云。其下卷ヲ金剛寶戒釋義章ト云フ。又一卷アリテ。金剛寶戒秘決章ト名ツク。是蓋大師ノ門徒ノ中ニ異見ヲ生セル者。偽テ書ヲ著シ。名ヲ大師ニカリテ時ノ人ヲ誑惑シテ。殊ニ空門ノ秘奧。大師ノ實義ト稱

スルナラシガクノ如ノ邪説放興在世既ニ發ル。是以光師當時ノ邪僻ヲ碎キ未來ノ迷没ヲ憐テ。決テ大師ニ取ル。然トテ其後尚固ク執レテ弁ス流行弥盛ナリ。了惠上人拾遺語燈錄上卷ノ末ニ偽書ノ安リニ正教ヲ亂ルコトヲ恐テ。別ニ一件舉テ多偽書論。後學者其中亦載此。三卷又長樂寺ノ鏡空上人ノ奥書ニ。此書ハ法本房行空之輩偽作シテ安ニ上人ノ作ト云。全不可用ト云。

○度脱房未考

此真偽をあきつるめんのためよ。元久二年三月。門弟度脱房をばらひらして書状を上人進むるに。件の兩條くつくと我試みのせむ。座下に侍し。漢家先賢浄土法門を釋とす。その義蘭菊なれども善導の御心ハ。弥陀乃本願也專修正行。こま往生極樂乃正路。この宗乃元意なるより。は孫に伝へたるまゝいままゝかくれど。まのこゝに候き。このま機なるを熟せざれば。御教訓を蒙らざる。このやく一家に狼藉をぞめ。未代の念佛を印持せんがためよ。御在世とて是非を改断し。御證判をばらて專修の一行をたてんやれよ。

取意 畧抄

○今文巨細ヲ畧セリ。九卷傳ニ具ニ載テ云。浄土宗ノ小僧辨長。上人ノ御房ノ法座前へ誠惶誠恐謹言。

二箇條疑問事

- 一 鏡像圓融疑問事
- 二 金剛寶戒疑問事

一 鏡像圓融疑問者。所謂或浄土宗學者向天台宗學者相語云。天台宗與浄土宗其義是一致也。所以天台宗以鏡像之譬顯圓融之法。浄土宗亦復如是。以此鏡像圓融之義為浄土宗最底。是則浄土宗甚深義也。暫善導和尚為誘引初心之人。制止難行勸進專修。理實以鏡像圓融之譬得其意。為後心之人。天台浄土是

則一同也。云云天台諸宗之人者以鏡像圓融之譬用淨土宗最成者以淨土宗不可立別宗只以天台摩訶止觀等可立淨土宗何故天台宗之外可立淨土宗哉又小僧辨長跪上人御房法座前常雖蒙淨土教訓之條於此義者未曾聞也但依機未熟不蒙此御教訓歟云云下

二金剛寶戒疑問者或淨土宗學者云付淨土宗有二戒品所謂金剛寶戒是也於諸宗戒品是異也各々口傳所傳之也是吉水上人御房之傳也云云辨長救云吉水上人御房御義全以不然淨土宗者只弥陀本願專修正行以此一行為往生正路全以不兼餘行何以於此宗今付金剛寶戒哉云云以前二箇條為決斷弟子之疑問為對治諸宗諷難又為停止一家狼藉云云下トアリ此外公今取意セラルル文ノ趣ヲ不出也○印持公智慧ヲモテ物ヲ取捨シ決定シ已テ自許シテ是トスルヲ印ト云其上一自解ヲ守テ他ニ轉セラレヌヲ持ト云ナリ唯識論等ニ見エタリ○決斷公理非ヲ決擇シテ邪正ヲ判斷スナリ韻府ニ裴漢在魏除相府墨曹斷決如流ト○タテトオモフトハ此項ノ書翰事ノ終ニ如此ノ文體諸記ニ往々ナリ

こゝに上人てづ〜筆紙をめぐりて彼状を勘付下り

此て云已上二箇條以外僻事也源空全以如是事不申供以釋迦弥勒為證更如然僻事所不申供也云云上人自筆此誓文未代念佛の龜鏡なり彼書いもほま〜と世にあつたまら〜と此を〜とらんこれ相傳の義す〜始る信受とるに〜をさる者歟

畫圖

○疑問ヲ注セル狀ノ面ニ所勘ノ趣ヲ條々ノ下ニ注シ付ルヲ勘付ト云ナリ薩戒記三ノ永亨二年二月十八日中御門宰相宗繼除目執筆問事不審等注出一卷被送之云勘付可送給云云予已注付愚案趣送之中ナトアリ○拾遺語燈錄上云黑谷遺鎮西狀云金剛寶戒章偽書也源空全如是事不述

これひぢり安貞二年此冬肥後國往生院よりして四十八日此別時念佛を修りし時後

○往生院ハ飽田郡白河川ノ邊ニアリ相傳行基菩薩

ノ神創也。本尊弥陀ノ立像五尺二寸ノ尊像安阿弥カ彫刻ト
○末代念佛授手印一卷鎮西上人作也。此書ノ起リ録倉宗要ノ敬蓮社ノ行状ニ詳ナリ

○高良山ハ延喜式神名帳云筑後國三井郡高良

五番命ト云云
○厨寺ハ高良神祠ヨリ十五町下テ乾方ニアタレリ。境内四面六十間ハカリニシテ府中町ノ傍ニリ。今厨山安養寺ト号ス。往昔厨府中ノ地頭トシテ寺地ヲ寄附シ。堂舎造營ニテ聖光上人ニ奉事セシ。其後累代檀契ヲ改メス。厨大貳久清其子久直連綿トシテ今時ニ至リトシ

昆乃異義をいまいめん。一巻の書を制と。これ末代念佛授手印と云づく。上人相傳此義勢。はぶさしてこの書にのせた。著述をへてのち善導大師まれあり。道場リ影現し。強しあり。この書にのせたる。の好ましく。これ法門の證明たるべし。ひざり。これを拜し。て。げ。す。で。よ。證。を。得。た。り。と。て。感。波。を。た。が。さ。れ。た。り

○書ノ仲。魁之語ニ乘裕後昆文選傳李ノ注ニ後嗣也。○證明ハ證據明鑑ナリ

又筑後國高良山乃ふ。もと一の精舎あり。厨寺と号と。大六尊弥陀の像を安置と。聖

光房リ。道場。して。一千日如法念佛を修。強。よ。ハ。百。日。よ。を。よ。び。て。高良山乃大衆會議。して。い。く。當山ハ。こ。ま。真言止觀。此學地也。此山乃ふ。を。て。專修念佛。勤行。と。て。海。の。波。の。れ。切。り。發。向。して。念佛衆を。退出。と。べし。と。衆議。し。を。へ。よ。と。ま。を。の。く。明。曉。を。期。と。念佛衆。此事を。ま。て。ず。と。や。り。に。退出。す。と。ま。り。を。申。と。し。ひ。ざ。り。の。こ。ま。つ。く。汝等ハ。ま。り。を。心。よ。ほ。す。べし。我ハ。ら。に。い。川。魚。と。は。と。こ。れ。う。へ。の。れ。退出。の。思。を。や。め。て。惡。徒。れ。ま。た。を。ま。つ。程。よ。れ。り。の。は。に。一。山。乃。大衆。

色に供物をさくげてまじりていふまじり
 れぬ念佛停廢の悪計をたすに今夜靈夢
 を感ずるあり赫奕たる光明より
 まじりてこれ道場をすらすあやうとた
 つめるところよかすに人ありていづく聖
 光上人念佛を行はるゆへより此佛ひらけ
 れらしてばよにこれまじりていづく
 諸人の夢一同なりこまにらりてこれ前非を
 改悔して慚謝のたえよ群衆とと云ま
 じりのちよ一山歸依をわ四輩信心海あり
 けり

畫圖

○高良八宇佐宮ノ末社武内宿禰ノ神祠ナリ宇佐託宣集ニ具ナリ
 精舎ハ社ヨリ十五町下テ乾ノ方ノ麓ナリ厨ノ所ノ名ニテ寺ソノ所ニ
 アリ今尚七間四面ノ堂アテ本尊ハ坐像ニ尺分ナリ弘院行基ノ作
 ト云ラ安置セリ厨山安養寺ト名ツケテ淨土ヲ宗ト善導寺ヲ本
 寺トス其ニ寺院ノ中ニ見エタリ○如法念佛ハ第二十八卷ニ見エタリ○
 居家必用注ニ謀之於衆曰議又曰僉議謂咸其定議也書經傳云
 議皆言衆人舉之僉議謂咸其定字彙ニ僉皆也咸也衆共言之也
 議謀也評也定事之宜也諸人アツマリテ評定スルヲ云ナリ朝廷ニテ
 公卿ノ僉議桃花葉云山門ニテ衆徒ノ僉議第卅一アルニ僉テカク
 ハ云ニヤ○天武天皇二年癸酉二月八日高良明神託宣曰我在百
 八十神之中依玄孫大臣物部大連守屋之訖于今未信佛法爰
 去正月十五日夜中斗數比丘偷來誦仁王般若偈句吾今聽之
 初發菩提之心雜嘗佛法之味嗚呼悲哉外稟二季之祭祀雖播
 神威内薰二熱之毒煙巨避業道若為我有志之人建立精舎於
 此林興行佛法於万代吾成護法檀那承事佛陀摩養僧伽託宣
文圖書生清原真人道理解記焉同月十四日早朝國宰依長早部公夜夢之示現
 草創佛殿為大神宮寺法名高隆寺同八月十五日國家道俗合

始て建、釋書
 六那賀郡ノ獵
 者大伴孔子
 古寶龜元年ニ
 州創、伊都郡
 瀬田村ノ富家
 ノ寡婦住宅ヲ
 捨テ精舎ヲ改
 ムト
 ○嘉禎三年
 西條院即位
 五年丁酉歲
 也

○毎日ニ等以下ノ行狀具ニ本傳ニ見ユ○アカ月ノ子サメノ床ニシ
 カストハ白氏文集 第五題禁中詩云門嚴九重靜寢幽一室閑好是
 修心處何必在深山西行法師ノ御裳濯川歌合ニアカ月ノヨラニ
 タクフ鐘ノ音ヲコノロソコニコタヘチツキク

嘉禎三年十月より病惱同四年正月十五日
 ひりどれ尅門身をあつめて来迎れ讚を誦
 一念佛でしむ聽聞れあひひ隨喜の涙をふ
 しくしく極樂の聖衆ハ天よとらくたよへり
 と聞人奇特ノ思をなすと同廿三日たけの尅化佛
 来現一孤の門弟に志あすと同二月廿七日う
 れこも異香志まきりよ薰ど同廿九日未尅七條
 の袈裟を着し眞北面西よりて五色のくもを
 ひく平生れ尅一文字三禮の自筆

れ阿弥陀經を合掌乃母指よきくはらきて
 念佛すると一時らかり寂後よきくは高聲
 よられへて光明遍照とていよはぎれ句よいつ
 ざるよ秘るるがごとくして寂り歸と春殊
 七十七夏藤六十四たり命終の時よあつりて
 五色乃雲天よとびま又紫雲たぐめにいはり
 をおほぬ道俗群集とてあまのくこれをこる

○本傳云十月以來漸以不食明年正月二日頸下有腫同七日
 夜時共門弟等高聲念佛一次日投諸人菩薩戒乘相異常聽者
 落涙云○來迎讚文世三行ハ者ニナラス第十二卷ニ記スルカ如
 シ本傳云示曰來迎讚云念佛三昧現前此句肝要也告已廣說念

○寛喜二年
後堀河院年
号光師入滅
八年以前也

佛功德宛如古昔云當時惠心僧都ノ製作トテ當麻寺ノ迎講ニ
誦念所ノ讚文トイヘル者世ニ行ハル其文中云ノトキ身心ヤスクレ
テ念佛三昧現前ト云句アリ○本傳云佛今來現門弟問曰何
佛哉答阿彌陀佛也二月廿二日夜夢中拜釋尊眠間聽說法至
朝辨備供物令唱寶號爰雖腫得減不食增氣閏二月廿六日時
身著七條向西端坐取五色幡合掌恭敬誦曰願我臨欲命終時
云云又敬白釋迦彌陀等ノ願文アリ五色ノ幡ヲ取事○同二月
廿七日ウシノトキ等本傳ニ此時頭北面西右脇臥當枕異香頻
薰同廿八日時自結一偈教門弟等令同音誦其文曰願見佛身
來迎引接決定往生出離生死ト○同廿九日未尅等本傳ニ高
聲一時ハカリシテ光明遍照ノ丈ヲ誦シテ亦念佛入漸末終ニ至テ頭
北面西ニシテ合掌不亂念佛相續ニ光明遍照ト唱ヘテ次句ニ不至ト
○本傳云年六十九寛喜二年庚七月廿八日一字三禮燒香
散花如法如說書阿彌陀經一卷一々字底圖阿彌陀像擬臨終
素紙朱字而三鋪也
之持經焉又云握經取終兼有契約念佛往生券契無如彌陀經
我最後時手握此經遂於往生奉值彌陀請於開說云○拇指ハ
大指也説文云將指也將指者謂為諸指之帥也和名鈔云國
語注云拇大指也於保於與比○紫雲ナメニトハ古詩トモ
日影ノヨヨサスタ陽斜照白雲斜橫カリアテ紫雲ノ横タヒオホフ
ヲ云ナリ

○大福寺ハ
上妻郡川崎
庄馬場村戸
リ紫雲山竹林
院ト号ス天福
年中聖光上
人御居住トカ
ヤ云又注ニ聖
ノ舊居トサハ
俗呼テ天福ノ
号ヲ稱シ傳テ
今ニ寺号トナ
レトシ又上人
入滅ノ時紫雲
此地ニタナヒキ
ケ六山号トシ
侍ルトカヤ

又入滅カクの翌日クあり。上妻カミに天福寺テンポクジ 聖ホリの乃本房ノホンボウ
此コノうへに紫雲ムラサキクモたれびくこと三箇日ミツカ。村里ムラより
入る人イダおほし。又臨終リンシウ乃ノまきばらマキバラとてをくクりあり。
紫雲ムラサキクモよれどドらきて来て。入滅カクよあふとて
あり。又草野クサノの郎ラウ等ナラたりたるも此夢ユメに當寺トウジ
に迎講ウケカウあり。ひさり手に金字キンゴに阿弥陀經アミトキョウを
もち給へり。と見てあらぬ。すれスレば往生シヤウジヤウれり。
をまきて。とせまきりて入滅カクの儀ギを拜イハするに
らにゆえ乃所見ノショケンよたがらタガラとく。らくラク隨ズイ

○敬蓮社ハ
光師ノ弟子
入阿彌陀佛
也

○緯阿ハ光師
ノ弟子也。自ラ
授手印ヲ書キ
授ラル。今猶現
存シテ緯阿傳
受ノ本ト云。紙
ノ長一尺一寸
一行十四字。

和點及系語
ハ朱。横堅ノ界
ハ墨。長紙ハ紫
地ノ打墨。表裏
金銀ノ切薄。袖
書ノ四句ノ文
ハ。信佛本願
專称名号最
後終焉決定

往生此四句
樂之本。薩生
房之。本。良。忠
上人。之。本。聖
願。房。ノ。本。各
生。院。ノ。又。住
公。袖。書。ノ。四
善。導。ノ。起。請。ノ。文
第。八。子。來。請。ノ。連
四。署。ハ。ツ。テ。亦
又。衰。二。増。減。リ

喜し。千里。志。の。ま。ち。平。生。此。祥。瑞。終。焉。此
靈。異。そ。れ。ど。ら。れ。つ。た。り。あ。ら。ま。れ。あ
ち。り。和。尚。を。拜。し。あ。ら。ま。れ。た。よ。弥。陀。を
ん。と。て。ま。つ。ら。或。ハ。極。樂。の。依。正。目。れ。ま。へ。現。し。
或。ハ。釋。尊。の。光。明。身。を。う。へ。を。て。す。又。門。弟
敬。蓮。社。ハ。極。め。に。師。ハ。此。善。導。の。再。誕。たり
と。ん。あ。る。人。ハ。弥。陀。乃。垂。迹。たり。と。見。る。と。れ。こ
と。ま。り。奇。瑞。そ。れ。の。故。あり。とい。へ。ど。も。志。々。記
よ。ら。り。て。の。と。と。と。

畫圖

○トヲクヨリ紫雲ニオトキテ等ト本傳云豐後國日田地頭沙
彌緯阿之息十四歳升九日未時登山見當坑後國善導寺

色雲上人往生之雲歟。又告父禪門緯阿驚馳參寺。瑞相與入滅
時尅全同。流淚隨喜。有僧實教見瑞雲而參寺云。○艸野ハ鎮西ノ
鏡ノ社ノ大宮司二郎大夫永平トテ。平家ノ逆亂ニモ朝廷ヲアフキ
奉リ源氏ニ志ヲ通セシ者ナリ。東武家ノ中ニ見エタリ。郎等ハ字ヲ源
二郎ト云。年來念佛ヲ不信。上人ヲ誹謗セシカ。此後日來ノ邪見ヲ改
メケル傳トフ。○迎講ハ今時當麻ノ練供養ト云。即此講ノ儀式ナリ。
惠心僧都横川ノ花臺院ニテ。始行シ給シテ。寬印供奉。其跡ヲ戀ヒテ。
丹後國天橋立ニ移行ハル。梶井門主僧正承圓。大原西林院ニテ。年コ
トニ修給ケル。又遊行ヒシリ。願行房於云是密宗ノ棟梁ニテ。東寺ヲ再興
事ヲモ載ハ。常陸國櫛郡。阿彌陀山ト云名ノユカシサニ留マリ。并テ。七日ノ
念佛迎講。往生講ナト行ヒシトカヤ。具ハ沙石集。壘囊抄。及述懷鈔
ナトニ見エタリ。東鑑云。安貞三年二月廿一日。彼岸ノ初日也。三崎ノ
海上ニ於テ。來迎ノ儀アリ。走湯山ノ淨蓮房。駿河前司カ請ニ依テ。結
構ヲナス。此儀兼テヨリ。此所ヲ設ケ。十餘艘ノ船ヲ浮ス。其上ニ於テ。件
講アリ。莊嚴ノヨフホヒ。夕陽ノ光ニ映シ。伎樂ノ音ハ。魁浪ノ響ヲ競ス。事
終テ。說法アリ。其後將軍家賴經御船ニ召サレ。島々ヲ歴覽シ給ト。云。其
コトハ所々ニテ行ヒシトフ。○和尚ヲ拜トハ善導ノ影向ヲ拜ナリ。次上ノ傳

文ニ見エ又○本傳云或時見極樂聖衆或時見淨土變相上人自語
或時見數百體地藏菩薩近遷化期○決答疑問抄云又被仰辨阿
上人自善導堂釋迦像放光照辨阿給ツル也曆仁元年二月廿八日
云○奇瑞ノカスアリト云本傳云有人夢持地菩薩權化有人竹節
即夢上人來告曰我是八度再生者也云又云春秋二時必來
迎儀臨其會日若有雲覆雨降者出庭舉聲祈請泥雲忽晴書已
上臨終及没後ノ奇瑞ナリ傳云生前懿德没後靈瑞或聞忠師之
傳説或依入阿社敬蓮之記録粗記梗概云

此制製作の念佛往生修行門云世此中の念
佛者故上人此御流と申あひて侍まとも上人の

御義よはたうり一事を申さざり侍こそ

不便此次第よ侍ま故上人辨阿にをり侍り

善導の御心ハ淨土へいんんとねまらん人の如

く三心具足して念佛を申へりなり一は至誠

心と云ふまじくも往生せんことなり

念佛を申れり二は深心と云ハ我身の罪惡生死

乃九夫なり志るに弥陀の本願乃かぞ

えれまにまじりて此念佛より外ハ我身のた

すのるへまじりてかこく信する候申也

三に廻向發願心と云ハあまひとすらに極樂小

まいんどもた先の念佛たると思をいぬたり

こまごま法然上人より習はるへまじりて

たも三心よ侍り此外またえ別のやう

なり也故上人乃に預ま供一ハ在家此いと

はたしん人の一萬二萬たを申へり僧尼

妙也。とて。此のまをさうたうんき。一は。二萬
 六萬なり。後申る。いふ。まは。はく申に
 すぎたる法門あるべし。詮どる。とる。
 此念佛の決定往生れ行なり。と信をさうらぬ。ま
 し。自然り。三心の具足して。往生するぞと。
 やとくと。信らまは。信ら。ま。これなり。い
 ぬ。これなり。い。い。信ら。ま。ぬ。ま。
 信ら。また。信ら。申。信ら。と。三世に諸佛。十方に
 菩薩。一。一。いた。乃。ま。して。つ。所。の。釋迦
 孫。隱。觀。音。勢。至。善。導。聖。靈。念。佛。守。護。乃。梵
 天帝釋等の御あり。ま。これ。く。して。現世後世。
 身。折。言。言。嚴。重。なり。それ。う。此。聖。ま。ご。に。奇。瑞
 を。あ。り。して。往。生。を。と。び。ら。ま。ぬ。得。益。法。門。ま
 ぬ。所。述。を。れ。信。受。あり。ま。ぬ。と。れ。く。勢
 觀。房。の。先。師。念。佛。の。義。道。成。た。と。申。人。の。鎮
 西。乃。聖。光。房。なり。と。と。申。と。れ。なり。

○決答疑問抄云。又禪門道辨袂父云。昔親盛法師語予云。上人
 在世之時奉問云。御往生之後淨土法門不審可問誰人乎。上人
 答曰。聖光房金光房委知。所存彼等為遠國能化為汝。不易京中
 聖覺法印亦知我義本傳。又云。聖覺法印說法。次云。聖光房上人
 數年稽古故上人御義。一分不違。誓言及度々云。敬蓮社聞此說
 法。疎一念義。而令成善導寺。御弟子畢本傳云。然上人遺自筆誓
 狀。鎮西云。源空所存皆申于御邊畢。此外若有所存者。以梵釋四
 王可奉仰其證已上。又云。嘉禎三年酉作徹撰擇集二卷。是則為

令相傳義不令落也。同八月一日以淨土宗法門付屬然阿諱良
手抄紫毫自書血脉是亦為令相傳義而弘通也

此いふり嘉禎三年九月二十一日聖光房よ送

りていふり相互不見參作年月多積作

干今存命今一度見參今生難有覺作哀

供者歟抑先師念佛之義未流濁乱義道不似

昔不可說作御邊一人正義傳持之由兼及作

返之本懷作喜悅無極思給作必遂往生本望

可期引導值遇縁作者也以便宜捧愚札御報

何日拜見哉他事短筆難盡作云其後文永

比聖光房附法弟子然阿弥陀佛と勢觀

房の附弟蓮寂房と東山赤紫地よて四十八日

談義をいふ時然阿弥陀佛をよとくらう

て兩流を授合せ給まことに一とて違と

とて改ちりり此も蓮寂房比云日比勢觀

房比申はれいふいふすてよ符合いぬ

予の門弟よをきて鎮西の相傳をもて我義

とすへい流をたけぬへい流とこ

きりりわてり勢觀房の門流はれ鎮西の

義に依附して別流をたてはれとぞうけた

まはるそれ外安居院の聖覺法印二尊院は正信

房たてり義はあやうぬ證誠りハ

聖光房をいそ申はれと當世築紫義と号

○文永八龜山
院ノ年号光師
入滅ヨリ二十
年後ナリ
○然阿弥陀
佛諱良忠姓
藤原京極大
殿師六世之
孫石州三隅
莊人也父諱
圓尊東塔南
房法印官宰
相賴通息中
納言經定孫
也母伴氏也
正治元年七
月二十七日
生十三春投
雲州鶴淵寺
月珠房信進
之室十六刺
漆三十八嘉
禎二年九月
七日謁光師
於天福寺明
年七月一家
秘奥傳傳寶
治二年春上

在帝都

すゝの。み。聖光房此流よて傳せられたり

畫圖

○兼房公ハ攝政関白太政大臣藤忠通公第四子也
 ○兼良卿ハ太政大臣兼房公一男兼實公為子母ハ大納言藤隆季卿女

○然阿彌陀佛トハ良忠上人是也鎌倉光明寺ヲ開テ盛ニ宗義ヲ弘給ヘリ。具ニ別傳アテ行ハル粗僧尼ノ中ニ注ス○蓮寂房諱ハ信惠ト号ス高野太政大臣兼房公孫大納言兼良卿ノ息知恩寺第三世ニテ勢觀上人ノ跡ヲ補ハレシ知恩寺 舊記トソ○東山赤築地ハ清水邊ト聞エタリ。地理ノ中ニ注セリ○ヨミクチトハ讀師ナト云義ナルニヤ○校合ハカガヘアハスト訓ス書物ナト左右ニヒカエテ讀合スヲ云ナリ○依附トハ依用シテ附就ストナリ。言心ハ鎮西ノ義ヲ用井テツレニツキ隨フトナリ

圓光六師行狀畫圖翼贊卷四十七

事義

傳本第四十七



○親秀未詳
 ○通親具平親王六世之孫久我内大臣雅通公之長子母美福門院女房典藥助藤原行兼ノ女也建久十年六月廿一日内大臣トナリ号主御門内

西山ノ善惠房證宣ハ入道加賀權守親秀朝臣法名の子ナリ。久我内府通親公此猶子トシテ。生年十四歳ノ時元服せり。久我内府に童子トシテ。けり。父母あやまて。一條堀川の橋占儀にひきこに。一人の僧真觀清淨觀廣大智惠觀悲觀及慈觀常願常瞻仰せしめ。これへて。東ら西へ移くあり。宿善内よそよかすなり。わらこて。出家をい。さん。師範の沙汰

これいぢりの意巧よて人の心得やとくもんた
めは自力根性乃人よじつひて百木此念佛といふ
事淺はひに申はまよとらる。此言よいくも
自力此人の念佛をいろごらなる。或ん大乘乃
はらなをえて色らり。或んちまも領解をえて
いろらり。或ん戒をもていろらり。或ん身心を
られある。或ん色ごらんと思はれ。定散のいろ
どらある念佛をん。志ねやせちらり。往生うご
ひたうとよらる。いごらり。念佛をい。往
生いせぬとやごくれ。里げくも。うごらる。此
自力はまよひなる。大経乃法滅百歳の念佛。
觀經乃下三品此念佛ハたにれいろらり。の
なき。白木此念佛なる。本願乃文の中此至心
信樂を稱我名号と釋し。臨終るえ。白木に
なりえる心はら

白木ノ念佛別傳ニハ此事載ラレス世ニ傳フ此上人白木念佛ノ心
ヲヨメルトテ山カツカ白木ノガウレソノニニウレシツカ子ハハゲ色モ
ナシ○心ニ引受テヨク合点シタルヲ領解ト云ナリ○定二十三觀
散ニ三福等アリ彼師ノ立義本願ノ念佛ハ非定非散ト云○釋ニ給
ヘルトハ往生禮讚云若我成佛十方衆生稱我名号下至十聲等觀
念門云若我成佛十方衆生願生我國稱我名字等云
所謂觀經の下品下生此機ハ佛法世俗此二種
乃善根なき無善此凡またるゆへにこの色ごら
一とたり況や死苦よせめり此て忙然とゆると

一。三業とて正體なるも機也。一期の悪人なる
 故。平生れ行のらちとてたのじぬさ
 臨終の死苦よせめぬる故。止悪修
 善の心也。大小権實れらるるをて。次
 起立塔像の善も。この位よかたふへく捨
 家棄欲れ心也。このとさいたらるるに
 極重悪人なり。更よ他の方便ある事なり。そ
 一他力れ領解もやある。名號乃不思議をも
 や。念どの念もやと。ぬまことを告よせめ
 此て。次第よ失念ともあひ。轉教口稱
 て。汝若不能念者。應稱無量壽佛といぬま
 意業。忙然らぬた。十聲佛を稱
 此ん聲よ八十億劫生死の罪を滅して見
 金蓮華。猶如日輪の益よあづるなり。此位
 一の機の道心一をぬく。定散れ色どる一をぬ
 た。知識のなるへま。こころりにて。別の
 け。さき心をたきて。白木にとれへて往生とる
 かり。たとへんをけらるるもぬ手をとりにて。物
 をやせんが。あに小兒の高名なりんや
 下と品れ念佛も又くれ。知識と弥陀
 この御心よて。け。た。けへて。往生をとる
 るなり。弥陀乃本願。とて五逆深重れ人の

ために難行苦行して願行たる故也。失念の位の
白木此念佛也。佛の五劫兆載の願行はなまじり
して。世窮れ生死を一念よひてめく。僧祇乃
苦行を一聲に成じりぬ。

佛法世俗ノ二種ノ善根トハ世俗ノ五常ハ佛法ノ五戒ニ同ス廻スレハ
遂ニ浄土ノ因トナル。孝養父母奉事師長トイハル即是ナリ。○惘然
ハ失志自棄ノ字。十方ナキナリ。東京賦五。惘然ノ字アリ。吳季重東
河王書ニ精散思越惘若者失ト。○サリトモタノムトハ。サハアリトモ
イカヤウニモアレ捨ハセジナト頼ムナリ。千載集ニ式子内親王サリ
トモトタノムコノハ神サヒテ久シクナリ又カモノミツカキ。○轉教口
称ハ教ヲカヘテ知識自口称シテ彼ヲシテ亦唱ヘシムルナリ。○サカシ
キハ日本紀ニ賢ノ字也。○兆載僧祇ハ三十數ノ多キナリ上ニ見エタリ
又大經此三寶滅盡乃時此念佛也。白木此念佛

なり。その故也。大小乘此經律論。これ龍宮に

ねさまり。三寶をなくして滅したる。閻浮提
よ。唯冥こたも衆生也。惡乃外よハ善といぬ
名だよ。更にある人か。戒行成をへた
律も滅しれぬ。いかに乃教よありて。止惡修
善此心もあるへま。菩提心候とる。經をいれさ
だらして滅せし。いづれの經よりわし。菩提心を
もたし。滅盡し。これとらるる。今も世よれ
けれん。やういひて知。道をたし。故よ定散
乃いろざり。これうせんとしたる。白木此念佛。六字
此名号なり。世よハ住とるべきなり。それとき聞
く一念見者。これまばらに往生とる。とらる。

よくこれと別を。つまよるべきをこれなり

畫圖

○文曆、四條、院、辛巳也

津戸此三郎入道尊願不審なる事をもん。上人往生乃後、善惠房よたづひ申せり。つゝよ文曆の比、関東此念佛者此中よ善惠房乃義として心えぬ事こそ披露しるに似たり。善惠房よたづひ申せる状云。念佛往生の間入事。弥陀此本願よほうせ。善導和尚乃御釋。故上人の御房乃御すめり。よらわて上百年よいたり。下七日十聲一聲にいしる。念佛往生ハ、変定此より、返りて往生を祈るべし。候所り。候世候

こと。當時関東乃学生此中り。無智よて、ははれあり。こと。臨終志いよをらり。も往生したり。と思へ。又學問志たんをいたる。臨終此ときいれる狂乱なり。やうひ顛倒したるも、変定往生れり。と申候。此事御房中にいりやうに思食たもいぬ事。慥乃便宜のとき。信するべく候。よろに申せし。尊願がとる。なす事申せり。候。ほりやぬ事にて候。こと。學問せぬ人のなが子申あひび申候也云

御房中トハ謙敬シテ直ニ其人ヲ指ス。隨仕ノ人ニテ聞スル詞也。御門下御座下ナト云ト同意ニテ實ハ其人ヲ指ス辞ナリ

同年九月三日。善惠房此返状云。學問せらる。ひし信

一此念佛ハ。往生とてうらうらうとす。此邊に申と
 きこえ然らん。極たるひつ事よ依たり。ひくに信
 して學問せらるるも。又文よはきて學するも。これら
 ひく所ハ。たゞたれど。南無阿彌陀佛にて。往生
 とてべき事よして。他へ。或ハひくに願力を信
 して。ワケ心よたれぬとて。念佛とて人も依。
 或ハ本願を信とて。うらうらうとす。いよて。いよて。いよて。
 あまき。せんため。學問も人も依。意樂たれ。
 うらうらうといへ。も。往生とて。うらうらうとす。
 を學問とて。人の。學せらるる。びと。一。學せらるる。人
 學問とて。家人をて。事。あひ。た。い。ま。さ。ら。め。る。
 る。い。が。事。た。り。た。り。所。詮。ハ。法。藏。菩。薩。の。乃。至。十。念。
 れ。ち。い。に。こ。と。へ。て。衆。生。稱。念。せ。ん。の。ゆ。え。に。し。ま。
 る。へ。ま。こ。と。わ。れ。ま。い。り。て。す。で。よ。阿。彌。陀。佛。よ。
 ひ。り。て。善。惡。の。九。ま。を。て。ら。ら。は。次。接。し。た。よ。へ。る。故。
 一。釋。迦。も。こ。れ。依。と。も。諸。佛。の。證。誠。も。い。は。れ。ら。る。
 事。を。し。て。御。念。佛。依。り。更。と。御。往。生。し。て。い。
 れ。く。依。こ。の。ひ。よ。を。こ。と。へ。て。存。す。る。事。に。て。
 依。へ。つ。人。よ。を。申。さ。う。せ。身。も。も。存。し。依。へ。取。詮。

九卷傳ニ返狀云阿法房ノモトヘノ便ニツケテ御不審候ケル
 様承候コソ存ノ外ニ候ヘ其後申披ヘキヨシ存候ヘ共慥ノ便ヲ不
 得候間思ナカラ過テ候程ニ御所勞トテ阿法房下向セラレ候便
 ヲ悦テ申候此下トアリ如文○乃至トハ九卷傳ニタダシ平信トテ本
 願ノアリサマヲモシラス按スルニ我ツ三深シ又本願深重ナリトモ善惡ノ
思ハス只入モ申セハ我モ申ナトノ類ナルヘシ

因果ヲモ不辨按スルニ申セハ功德大利アリ罪作レハ惡趣ニカヘルトモ思ハス惡人モ我モスルナタ、南無ア三々佛ト申ハカリニテ往生スト心工タ
ル輩當世ニ多ク候。コレハ一往ハ信スルニ似タリトイヘ共。委シク尋
ヌレハサシテ思久タル處ナシ。フカク信スル義候ハサル也。是ヲハ
ヒラ信シト申ニモ不及候也。加様ノ輩ニ向テハ。本願ノムナシカラ
ス。凡夫ヲ攝スルイハレ一分ニテモカマヘテ心工ヨト申キカセ候
也。是カ聞工候ヤラシ。正シク本願ノムナシカラサルヲ信シタル上
ニ隨テ或ハ等トアリ。今ノ文コレヲ畧シテ乃至トイヘリ。○取詮
トハ九卷傳ニ見參ニテ申ニホシク候ヘトモ。今ハ互ニカナハ又事ニ
テ候ヘハアラアラ申候ナリ。阿法房ハカヤウノ事モ是ニテ聞ナレ
思入ラレタル事ニテ候ヘハタツ子キカセ給ヘク候云トアリ

又同年十月十二日其狀云。無智此人ハ往生セ所。臨終
正念よて命終すとも。往生とて定むべし。然るに
學生ハたとひ臨終狂乱ととも。其をこそ此往生
なりといふ。返こひり事にて候也。無智此

人往生セ所といふ。弥陀の本願すてよ。機をきき
ぬにや。それ理也。又學徒ハ他カ本願を
信ぜい。有智無智これ往生すべし。信心をた
て後ハ學不學ハ人の心よ。あつたがふはまなり。本
願を信ずる人正念よ住らん。うへハ。なんぞ往生セ
所といふ。又學生を臨終狂乱ととも。往
生と定む。經釋の中に。それ文惣
トて見及候。此道理也。然るに。凡往生極
樂よをききて。その本願を信じて。なり。
も。學生よ。又無智よ。これ候なり。
信心をた。有智も無智も。臨終ハ。これら

此正念よ住とへんがんで学生にいつて正念
 成すてんや。そへ学生たるとも臨終狂乱せん
 といふは信心なき故あり。但下品下生れ此
 人苦逼不違念佛等此文よ。異義を成とるも
 うら依毀。これ文の心はたゞ死苦れ失念なり。ま
 く狂乱顛倒れ相よあつて。はまの釋よ。臨終正
 念。金花來應也といひ。たゞい病死の苦痛あ
 りとも。念佛れ行をこころし。うら正念と
 する處も。れら苦痛と顛倒と。それ體大よこ
 とれ。ゆへに依。これよ。此の荒説御信用あ
 り。此の一向本願をたれ。御念佛をこころ
 して。依れん事。本意たれ。れら依れり。取詮
 これ自筆判形の状等なり。龜鏡とすにき
 此に仰てこそを信すへ

釋ハ散善義也○苦痛ト顛倒ト此辨イニタ先徳モ顯ハニ釋セス。此
 義ナラ後世ニ迷ヒヤスカラン。サレハ畧シテ其躰ヲ指示ザル言心ハ若
 入臨終ノ時心ニハ三種ノ愛心ナト密ニ起レト身ニハサノ三苦痛ヲモ
 不受形ヲ見レハ安泰ニシテ心ハアラクニテ顛倒シタルモ多カルヘシ。又百苦
 身ヲセメ四躰床ニ解レトモ。心ハ西方ニ通ヒテ住シ念ハ苦界ヲ厭テ
 正シキモアリヌヘシ。都テ此間ノ辨別凡智ヲモテハ測カタクカ第
 廿三卷ニ上人御解釈アリキ○荒ハスサムト訓スムサト云チラレタ
 ル惑乱狼藉ノ臆説ナリ

志うれとや。九條乃入道將軍れ御尋よけさ
 て。善惠房とて。申はまこを状云。三心具足の
 念佛ハ佛乃願り相應とる故よ。かれは

○九條入道
 將軍ハ征夷
 大將軍賴經
 卿ナリ光明峯
 寺入道前攝
 政道家公ノ

三男母六従一
位藤倫子西
園寺公經公
ノ女也嘉祿二
年正月廿七
日正五位下二
叙同日右少
將征夷大將
軍三任寛元
三年七月落
飾

攝取の利益返さる。此攝取の故を釋すとすに。
親縁近縁増上縁の三乃心あり。一は親縁とい
ぬ。此鈍根無智れ機をさるらば攝取とすべきい
れより。正覺成り。然無尋光の體なる故なり。
この佛乃三業其功德我等の煩惱惡業乃三業
に多し。故に稱とさる。故に稱とさる。聞き
し禮とれい見たよ。念とれん知縁とい
へ利。是則行者其心乃善惡返さる。此
じ心。つらぬ。變定往生すへき稱名
とき。たも。變定往生とへき禮拜と見たよ。
變定往生すへき憶念と志らね。此
彼此三業不相捨離と釋し。縁へ。二は近縁とい
ぬ。さ。道理さ。い。我等身
口意業を佛れ知縁のよ。又佛の三業
をさるべきいとれあるゆへ。思へすれ
ら。え。乃至臨終よ
あ。此たよ。これこのころ。三は増上
縁といぬ。これ二縁乃他力よく成とす。
此をあら。衆生稱念。即除多劫罪。命
終時佛與聖衆自來迎接。諸邪業繫無能
導者。故名増上縁と釋したまへ。衆生稱念即
除多劫罪。これ親縁乃體。他力にて成とす。

攝取の利益返さる。此攝取の故を釋すとすに。
親縁近縁増上縁の三乃心あり。一は親縁とい
ぬ。此鈍根無智れ機をさるらば攝取とすべきい
れより。正覺成り。然無尋光の體なる故なり。
この佛乃三業其功德我等の煩惱惡業乃三業
に多し。故に稱とさる。故に稱とさる。聞き
し禮とれい見たよ。念とれん知縁とい
へ利。是則行者其心乃善惡返さる。此
じ心。つらぬ。變定往生すへき稱名
とき。たも。變定往生とへき禮拜と見たよ。
變定往生すへき憶念と志らね。此
彼此三業不相捨離と釋し。縁へ。二は近縁とい
ぬ。さ。道理さ。い。我等身
口意業を佛れ知縁のよ。又佛の三業
をさるべきいとれあるゆへ。思へすれ
ら。え。乃至臨終よ
あ。此たよ。これこのころ。三は増上
縁といぬ。これ二縁乃他力よく成とす。
此をあら。衆生稱念。即除多劫罪。命
終時佛與聖衆自來迎接。諸邪業繫無能
導者。故名増上縁と釋したまへ。衆生稱念即
除多劫罪。これ親縁乃體。他力にて成とす。

ところを釋しありと詞なり命欲終時佛與
聖衆乃至無能尋者といへる。近縁は見佛他力
にて成るといふ道理は釋しあり。此詞なり。故
よ。此縁は他力乃體を以て成るといふ。詮は縁は
のこころ心得き。親縁は依て稱念すこと。無量
劫は滅する道理あるを以て。行者の心こそ
よ。よ。不はきて。惡はをたれ。惡をたじむ。
これ心いよくをこころし。又近縁はよ。ありて。凡
まのつら。この眼は報佛をこころ。大善根さ。い。わ
ぬ。こと。此功力よ。よ。不は。此て。已作は善にい。
ゆる。を。隨喜の心をた。未作の善よ。を。い。は。
修習はた。り。の増進する。故。り。増上縁とい。は。
あり。然則三心具足と。故。よ。歸命は心は。こ。ろ。
た。ま。は。南無とい。は。三縁それ。い。ま。こと。無尋光乃
體。我。亦。罪惡の身。よ。ゆ。は。は。こ。ろ。を。た。じ。む。切
徳を。阿。彌。陀。佛。とい。は。れ。里。故。よ。南無阿。彌。陀。佛。と
稱。と。も。此。六。字。の。名。号。に。一。代。の。佛。教。は。本。意。も。
こ。こ。ろ。を。よ。た。さ。ゆ。り。十。方。三。世。は。化。物。を。た。じ。む。
た。ま。は。こ。れ。つ。ら。が。故。よ。念。と。不。捨。者。是。名。正。定。之。
業。順。彼。佛。願。故。とい。は。れ。て。南無阿。彌。陀。佛。の。は
ら。又。餘。事。は。も。ゆ。り。を。以。釋。よ。ん。自。餘。衆。行。
雖。名。是。善。若。比。念。佛。者。全。非。比。校。也。是。故。諸。經。中。

釋義
卷之三
三

處と廣讚念佛功能。如無量壽經四十八願中。唯
明專念弥陀名号得生。又如弥陀經中。一日七日專
念弥陀名号得生。又十方恒沙諸佛。證誠不虛也。
又此經定散文中。唯標專念名号得生。此例非一也。
廣顯念佛三昧竟と判トたまふ。かくれく。
三心三緣重とよ分別と判ハ。あやまることありけく
して。これ愚惡の九支。直に報土に往生をさぐら
たりあるに。これ惡人處にて。此といふ。一系に
道理をさぐらく。惡ハ憚るか。と。いふ邪見をね
く。惡もさぐら。おれはく。いふ僻見あり。これをも
まが惡のさぐら。せんが。さぐら。ありて。枉て。いまれ
教に所談と稱む。事。これ。さぐら。て。然る。さ
次垢障れ機のうへ。南無阿弥陀佛の行成と
といへ。も。先世の罪愆。臨終。まて。は。さ。げ。て
苦よせ。せん。ら。く。といへ。も。其心。こ。と。れ。とい。往
生をさぐら。故。観經の。下品。下生を。此人。苦逼。不
遑念佛。善友。告言。汝若。不能。念者。應稱。無量
壽佛。を。説給へ。里。これ。文。よ。付。く。を。れ。さ。り。惡の
さぐら。の。たま。よ。ありて。臨終。狂乱。す。べき。ゆ。へ。り。
狂乱。と。さ。え。往生。と。い。ぬ。輩。ある。是。則。さ。ぐ
ら。あ。や。まる。の。こ。に。あ。り。又。他。を。あ。や。ま。つ。そ
ら。さ。ぐ。ら。れ。る。ゆ。へ。これ。品。の。人。の。往生。を。さ。ぐ。ら。と

四行記 卷之三

あつるよ當世りの門流と号りし中よ多念
を功勞とくべかれは臨終を沙汰とくは次といぬ
人を傳よや此義すぐてようれ消息記録等よ
違よもうへはこれまて善惠房の義よあつて
未學れ今案なり流乃よまざる候まてこれ
えとのとめをうたぐよとたつれ

書圖

これいぢらハに恭敬修を專よ志て不淨
のときハ四十八度なんど手洗を洗々る毎月十
五日よハうぬくハ廿五三昧を行トて見聞の七
者をうらひ有縁無縁はハ早世の人とあは

よと念佛して福んぞろよ廻向一談義れをい
毎日ニ浄土の三部經を讀誦一。名号六萬及を
とれへて半夜よ及んて睡眠せ候曉更よハ法
門を暗誦して佛号候とて此事をしてりや
里ま。天福二年九月十四日此夜沙門源弘ゆん
れを善惠房とて十一面觀音乃化身なり
うれ門徒ハうぬくハ十一面觀音の像を二寸八
分にいりて安置すへ一と。

委命在
夢記

○天福四條
院年七ナリニ
年ニ改元アテ
文曆ト云
○源弘未詳
○夢記未見
本文別傳ニ
諸人ノ夢ヲ載
今傳文ト同シ

廿五三昧ハ本涅槃經ヨリ出テ二十五有ヲ破スト
止觀ニラニイヘリ
第四十三ニ注シヌ○式ハ取法也
景常ニ用井テ改マラヌ作法ヲ云第

このいふより西山に善峯寺あり。信列善光寺にいたるまで十一箇の大伽藍を建立してあるは曼陀羅を安置し。或は不斷念佛茂くして免をく。これこれ供料供米修理の足をはけしてあつて。いまはほく勸進奉加をたつて諸人の供養物をたげて。このいふれをたつて。興隆の次第は。いふにちと人よあつて。次と申あへり。

或宗派云善峰源筭為開祖具見寺院記次觀性法橋次慈鎮和尚吾住凡三十年次善惠上人承父年中承和尚付屬再興當山晚弟子本靜房良空上人付屬云源流章云西山善峰寺延曆寺別院被寺北尾名住生

庵留躑別傳粗別傳云白川龍護由ノ歡喜心院ハ上人建立四箇寺ノ其一ナリ釋迦彌陀丈六ノ金像ヲ本尊トス三重ノ寶塔ヲタテニ階ノ蓮舎ヲツクリテ當麻ノ曼陀羅ノ寸尺ヲタカヘズ移シ奉リテ安置セララル又云善峰ノ往生院ヲハ建保ノ比慈鎮和尚ノ附屬ヲ承テ上人止住ノ後承久三年十一月三日不斷念佛ヲ始行セララル和尚即緣起ヲ記給ヘリ其詞略云昔淨土始祖廬山惠遠者始有餘人之念佛於白蓮社今彌陀行人當寺證空者待七道諸國之濟度於金蓮臺云又云上人寺院ヲ建立セララル事ハ西山往生院ヲ始トシテ歡喜心院淨橋寺攝州武庫川邊遣迎院法性寺邊等ノ四箇所ナリ塔婆ヲ起立スル事ハ西山善峰寺同往生院歡喜心院淨橋寺並河内磯長ノ御陵等ナリ各々料所ヲ寄附シ顯密ヲ勤行セシム不斷念佛ヲ始メ修スル事ハ天主寺ノ聖靈院當麻ノ禪林寺以下十箇所ニ及フ是又佛供燈油僧衆衣食ノ料ヲ定メラカルト云已上累書○供料ハ香華燈油等ノ料ナリ供米ハ飯餅等ノ用ナリ料ハ物料也字彙用意ノ物ヲ云ナリ足トハ凡世ノ珍寶ハ事ノ用タリテ足アル人ノ自由ナルニ喩タリ錢ハソノ一種ナレハ別シテ足トハ云ナルヘシ下學集ニ錢ヲ料足用脚ナト云トアルモ此心ナルヘシ徒然

草ニイモカシラノアト云モ。錢ヲイヒタリ。晉書ニ魯褒著錢神論其略云無翼而飛無足而走白玉蟾集雲遊歌ニ初到家山穉骨肉腰下有錢三百足

○寶治元年
ハ後深草院
ノ即位元年
也

寶治元年十月此より。日來の不食増氣して身心やどかゆといへども。端居して日こり法門を宣説する事。平生のこころ。同十一月廿二日。往生乃期らるゆへ。門弟夢想乃告を感ず。いそぎ師に前より参じて。かぎり申さんとして。いまま言はれはるる。終焉らるまゝあり。るをのこまひて。往生浄土に已證をのべ。觀佛念佛の兩宗を談と。廿三日ハ。清浄乃內衣を著し。大衣をとりけて。定散兩門の義をせらる。廿四日ハ。天台大師講法をこれい。二十五日ハ。他人の請によらて。佛を讚歎し。はる自行のためよこして。本尊は稱揚し。法則日來にあらは。次讚歎此法門ハ。玄義不序題門に大意は。二十六日ハ。大衣を着し。大衆と同音に。阿弥陀經を讀誦し。其後又已證の法門などの處をば。して。本尊に御前より。念佛二百餘遍。西よ。じ。端坐合掌し。秘するがごとくして。息たえぬ。時年七十一。寶治元年十一月二十六日。午に正中れ。里一條の宰相千時中將能清の室家。當日巳時の夢よ。善惠房雲に乗して。西をうして。さり。死んで。

○能清ハ將
軍頼朝ノ姉
婿能保卿ノ
玄孫頼氏卿
ノ子也

善惠房雲に乗して。西をうして。さり。死んで。

ゆえさめてのち。未尅にいりて。往生れり。
をきく。これほり。奇特一よあり。此のいへこそ。
志なきよりてのり次

畫圖

隋煬帝ノ詩ニ端居事拱垂端居端坐同意ナリ○己證ハ自己ニ發
明シタル法門ナリ○清淨ノ內衣トハ袈裟コロモノ下ニ着スル衣履ナリ
平生ノ綿布ナトノ小袖ライヘリ○大衣ハ九條十二條乃至廿五條ヲ
大衣ト云○天台大師講ノ事第十七卷ニ見エタリ○佛ヲ讚歎シト
ハ事ニフレテ說法スルニ佛徳ノ大ナルヲ法談スル也。或ハ佛ヲ讚歎
シトハ開眼供養ナルヘシ。本尊ヲ稱揚シトハ便宜ノ修供ナラシ。サレハ
佛トハ他ノ所持。本尊トハ自ノ安置ナルヘシ。讚歎稱揚言異意同。
ワノ法門ハ序大門ノ大意ナリトイヘナリ○別傳云。於白川遣迎
院入滅遺身ヲハ密ニ出シ奉テ西山往生院ノ傍ニ華臺廟ヲ點シ
テ移シ申ケルト云。石塔今ニ在テ慈鎮和尚及宇津宮入道等相
並ヘリ

圓光大師行狀畫圖翼贊卷四十八

事義

傳本第四十八



○空阿公種
姓等未詳

法性寺此宣阿弥陀佛いひまの所此人といぬ
事終まらば延曆寺の住侶なりき。叡山を
辞して聚洛いひ川上人よあひ奉りて一向專
念此行者と成て經をもよほば禮讚をも行じ
此稱名乃ほり。他れはと免れ。在所を
はらふ。此別の寢所なり。沐浴便利のほり。夜を
わがば行徳ありて。人こそをたすとむ。此の
ハ四十八人の能聲をそのへて一日七日れ念佛を

勤行す所この道場いたる所の所なり。極樂れ七
重寶樹の風此の音をいふ功德池のたもこのを
と後なりいて。風鈴を愛して。とくく如へよは
とをちして。ける所なり。うたうけこまをうけ
れなり。心ありん人愛翫とるにもれるをれなり。や
つものことごとく。如來尊号甚分明。十方世界普
流行。但有稱名皆得往。觀音勢至自來迎。乃文
を誦して。嗚呼南無極樂世界といひく。たると
をぞわとさまをる。これ多念く佛の根本れ。念
佛の時乃をうらむ。これ一人念佛名。西方便
有一蓮生。但使一生常不退。此花還到此間迎。娑
婆よ念佛は。とむきん淨土よ蓮ぞ生ぶ。れ。一
生了よ退す。ひん。これ花のうらむ。むふなり。
一世れ勤修ハ。須臾乃程。衆事返たげす。て祇
よる。祇がうかたう。及びむきん。ゆめく
をこた。事なり。此。光明遍照十方世界。念佛
衆生攝取不捨。と。これへられ。念佛のあり。む
り。文讚をいろへ誦する。こと。これ。を。こ。よ。
ら。わ。ん。と。ま。ち。ち。

畫圖

○人コレヲタウトムトハ。九卷傳ニ尊貴ナリトイヘトモ。面ヲムカフハ
必崇敬シ。智者ナリトイヘトモ。ロヲヒラケハ。悉伏庸スト云。○愛ハ。
好樂翫ハ。遊觀也。貪悅也。サレハ。愛翫ハスキコノムナリ。○如來尊
號甚分明等トハ。五會讚也。○此項淨法草昧ニシテ人執多端ナ

リ。彼一念ヲ執シテ。數遍ヲ妨。學問ヲ先トシテ。修念ヲ疎ニスル
等是也。サレハ佛祖ノ奧義ヲ極テ。多念ヲ事トスル者。時ニ希ナ
リト聞ユ。然ニ此聖深。上人ノ教ヲ仰テ。數遍ヲ專ニセラル。ガ
クテ往々ニ其類出來テ。數遍ノ行者。世ニ盛ナリキ。サレハ多念
念佛ノ根本トハ云ナルヘシ。○此界一人等トハ五會讚也。○一世ノ勤
修ハ須臾ノ程等トハ大經前後ノ文ヲ交擧ラレタリ。須臾ハシハラ
ク日本紀日本紀ト訓ス。○イロハ。綺ノ字ナリ。綺互現文ナトアテ。ササ
雜日本紀合セテ。ホドヨクスルヲ云ナリ

これいざなり所勞れとき。日來乃安心。修治
定でんごめ。とんよたづ。申はれ多にけき
て。の御返事云。凡まの生死をいづる事ハ。往生淨
土ハ。まの次。往生れ業にほ。といへとも。稱名念佛
よ。まの次。稱名往生ハ。これの佛乃本願の行也。
故よ善導和尚の。若我成佛十方衆生。

○觀ハ。想念也。

稱我名号下至十聲。若不生者不取正覺。彼佛
今現在世成佛。當知本誓重願不虛。衆生稱念
必得往生。故よ稱名往生ハ。此彌陀本願
なり。念佛れとき。この觀をなすへ。本願あや
まりなまの次。引接をたまふ。南へ。この
ほろにハ。別れ觀行い。多へ。又往生要集乃
臨終の行儀にい。これ念をなすへ。如來ハ本
誓ハ。一毫もあやまり事。祿ぐ。いほけ
け。變定。我を引接。南無阿彌陀佛。
ある。漸に略をとりて念。祿ぐ。ハ佛
の。引接。南無阿彌陀佛。臨終ハ觀

黨也。以是彼論爲此宗 ○御書ハ上人ノ御返書ヲ云也此御書何時何由依勅流通之證也テカ彼寺ヲ出テ今洛陽ニアリ

上人の此の如くは、源実朝の智徳をえて人を化
すむを不足なら。法住寺の宣阿弥陀佛ハ愚
癡不社とも念佛れ大先達とてあまよく化導
ひろし。我々一人身をうくる大愚癡の身とれ
念佛動行えんぎやう乃人たる人ごぼはら神々。宣阿
弥陀佛ハ上人をほとけのどくよ宗敬一申
はまし。右京権大夫隆信れ子。左京大夫信
實朝臣よ。上人の真影をうめ。一期れあひぶ。
本尊とあふき申はらも。當時知恩院よ安置

畫圖

○右京権大夫隆信ノ子。左京大夫信實父子トモニ繪ノ事ニヨカリケレハ父ノ朝臣モ。法皇後白ノ勅ニ依テ。上人ノ真影ヲカ、レタリ。第十卷ニ信實朝臣。又時ニ妙畫ノ人ナレハニヤ。似繪人ノ影ヲヨク見エタリヲ書レタル事。諸記ニ往々ナリ。又隆信ノ娘ニモ妙畫ノ人アリキ。○當時知恩院ニ安置スル繪像ノ真影今尚現在アテ坐像一尺五寸ハカリ。御衣ハ墨。御ケサハ胡粉ニテウス彩色。三十天台衣ニテ。尋常ノ影像ニカハラス。面貌少傍ヲ見カヘリ給テ。頂ニ金色ノ五輪アリ。摺寫ノ尊像ニ。此御資ナルガ。世ニ流布シケルハ。此寫ナルニヤ。イカナレハニヤ。五輪ヲハ頂載ニシテシケン。知カタレ。彼靈山寺ノ別時念佛ニハ。勢至菩薩行道ニ給シテ。遊蓮房夢ノ如クニ拜シシナトアレハ。若ハ本地ノ寶瓶ヲ戴給フガ。加様ニ見エサセ給ヒケルニヤ。サテソレヲ摸寫スルナランカシトソ人申アヘリ。又讚州置文ノ御影モ五輪ヲ戴給ヘリ

毎年正月一日より七箇日別行を勤修し給

發得し給第七卷九卷傳ニハ是ヲ恒例ノ正月七日ノ念佛トアリ元

久二年正月一日ヨリ。靈山寺ニシテ。三十七日別時念佛ヲハシメ給

第八同三年寅正月四日念佛ノ間ニ三尊ノ相ヲ現ス九卷傳三

摯ナトアリ。菌田ノ智明。津戸ノ尊願。元日ゴトニ臨終ノ儀式セ

シモ。此類ナルヘシ。又春秋ノ彼岸ニ念佛修善スル事源天王寺ヨ

上人亦恒例トシ給ヘルニヤ。九卷傳云。正治元年未八月時正七日ノ

別時建久二年戌八月時正七日ノ別時念佛ノ間ナリ。○サメサメハ。雨六ナリ。

記スルニ。多クハ二月ノ別時念佛ノ間ナリ。○サメサメハ。雨六ナリ。

詩ノ却風ニ泣涕如雨古今ニ大伴。ク口又シ。春雨ノフルハ涙カサラ花

千ルヲオシメ又人シナケレハナトアリ。又澤女澤女ト書ケリ。是神

代ニ啼澤女命アリ。コレ凶神ナリ。澤多也。今人ノ涕泣スルヲサメサメ

トナクト云。是ヨリオコレリ

往生院又号念佛房叡山又号念佛房の住侶。天台又号念佛房の学

者又号念佛房のさき。あつはる上人又号念佛房の勸化又号念佛房よりわて。浄土又号念佛房乃

出離又号念佛房をそとめ。たちまち比又号念佛房の名利又号念佛房乃学道又号念佛房をわ

かして。ゆるく又号念佛房。隱遁又号念佛房の風味又号念佛房をこゝの祿又号念佛房がたまらある

こと。忽然又号念佛房と往生又号念佛房よ疑心又号念佛房おこりて。無常又号念佛房いまま又号念佛房到

来又号念佛房せは。生死又号念佛房いづせまの。あつはる上人又号念佛房の御在世

たう又号念佛房い。とま。浅又号念佛房う又号念佛房い又号念佛房さ又号念佛房深又号念佛房系又号念佛房変又号念佛房して又号念佛房ま又号念佛房り又号念佛房これ

を又号念佛房と。あ又号念佛房つ又号念佛房は又号念佛房り又号念佛房ま又号念佛房げ又号念佛房きて又号念佛房祿又号念佛房たま又号念佛房へ又号念佛房る又号念佛房夜又号念佛房の又号念佛房ゆ又号念佛房め又号念佛房に又号念佛房上

人又号念佛房室又号念佛房中又号念佛房の又号念佛房現又号念佛房れ又号念佛房た又号念佛房ま又号念佛房ひ又号念佛房て又号念佛房。彼又号念佛房佛又号念佛房今又号念佛房現又号念佛房在又号念佛房世又号念佛房成又号念佛房佛又号念佛房とい

へ又号念佛房。と又号念佛房ま又号念佛房り又号念佛房ひ又号念佛房ど又号念佛房。衆又号念佛房生又号念佛房稱又号念佛房念又号念佛房必又号念佛房得又号念佛房往又号念佛房生又号念佛房。た又号念佛房ま又号念佛房り又号念佛房

れ又号念佛房う又号念佛房づ又号念佛房ひ又号念佛房う又号念佛房あ又号念佛房る又号念佛房と又号念佛房れ又号念佛房は又号念佛房せ又号念佛房う又号念佛房や又号念佛房浅又号念佛房深又号念佛房兼又号念佛房て又号念佛房。を又号念佛房う又号念佛房て

ゆ又号念佛房め又号念佛房の又号念佛房う又号念佛房ち又号念佛房に又号念佛房感又号念佛房涙又号念佛房せ又号念佛房ま又号念佛房あ又号念佛房へ又号念佛房ど又号念佛房。た又号念佛房く又号念佛房く又号念佛房た又号念佛房ど又号念佛房ら又号念佛房ま

よ又号念佛房ち又号念佛房ら又号念佛房。と又号念佛房れ又号念佛房より又号念佛房疑又号念佛房殆又号念佛房た又号念佛房ま又号念佛房ぐ又号念佛房た又号念佛房え又号念佛房て又号念佛房。往又号念佛房生又号念佛房れ又号念佛房た又号念佛房も又号念佛房ひ

変又号念佛房定又号念佛房せ又号念佛房し又号念佛房れ又号念佛房よ又号念佛房ち又号念佛房わ

○往生院ハ。嵯峨ニ尊院ノ西北ニアリ。西山上人第六世賢智上人ハ此院ノ碩學ナリト云

○念阿ハ。或宗派ニ念佛上人大納言雅家卿子照道禪心師資相奉續千載集新續古今ノ作者ナリ

○宋書伯玉傳ニ溫雅有風味○アハレハ天晴ノ心ナリ。第四卷ニ注ス○イカ、セマシハイカ、スヘキナリ。夫木鈔ニ忠岑ノ長歌ニ。イカニセマシトウチナケキ○參決シテマシモノヲトハ見參ニ入テ決断スヘキニト也。後撰集ニ中務秋風ノ吹ニツケテモトハ又カナ菟ノハナラハ音ハシテマシ○彼佛今現等トハ禮讚文也○疑殆論語為政ノ字ニテ。ニ字トモニウタカハシト訓ス。第卅二卷ニ注シヌ

美久三年。嵯峨乃清凉寺釋迦堂。回禄乃事侍是也

を。これひむら。知識をとりて。程なく造営成

をへ翌年二月廿三日。供養をとりて。此よき。あ

西隣に往生院も。これひむらの草創なり。居を

この所よきあり。此より。は。た。ま。い。近程よて。毎日よ

清凉寺にまゝ。て。ま。ま。の。建長三年十月晦日。

入堂して寺僧よあひて。かみ。を。り。り。ぞ。これ御堂

へ。ま。い。り。せ。ん。ど。と。申。は。ま。ま。を。た。ま。い。こ

も。い。こ。ろ。へ。ら。り。な。家。ほ。ど。て。同十一月三日。

殊勝の瑞相ありて。往生に素懐をとりけ。み

り。ち。り。生年九十五也。身もたやむ事なく。て

かみをきき。ちと申。さ。此。く。ん。よ。して。死期をま

れたる。ほ。も。あ。り。は。ま。て。不思議に。こ。ろ。く

ぞ。た。が。ゆ。

畫圖

○左傳ノ昭公十八年ニ鄭子産禱災於玄冥回祿。注ニ玄冥水神回祿火神也。天災ニテ焼亡スルヲ回祿ト云ナリ○諸人ヲ勸メテ奉加助成せしムルヲ知識ヲトナフト云。サレハ知識トハ朋友知音ナト云ニ同意ナリ。本朝文粹三ニ慶保亂ノ知識文ニ勸學會所欲被故人黨結同心合力建立堂舍ト。弘法大師唱鐘知識文

○建長三年ハ後深草院即位五年辛亥歲也

一首。性靈集ニモ見エタリ。東鑑ニハ建保六年十一月十日。嵯峨ノ
棲霞寺ノ釋迦彌陀兩堂燒失ス。本尊ハ取出シ奉ル。帝主編年記
久ト改。百練抄云。承久元年七月十九日釋迦堂上棟也。貞應承
元也。改。元年二月廿三日清涼寺供養也。法皇御幸。雲客為堂童
子。先年回祿之後。往生院念佛房所造營也。砂石集 六二。嵯峨ノ
釋迦堂炎上ノ時。勸進ノタメニ。五十箇日ノ間。毎日ニ說法有ケリ。
其中ニ。淨遍僧都ノ說法ニ。日來二三十日ノ間ノ奉加ヨリモ。物出
來テ。ホトナク造營有ケリナトアリ。○ナカハ近程トハ堂ト院
トノ中間。チカキ程ナリ。

○感西公考
大系圖刑部
卿京夏十五
代之後文章

博士資實之
孫石大辨家
宜之。更有非
藏人少進士
入道兼嗣本
稱兼氏蓋此
人歟又杉原

伯耆守光平
之孫。民部丞
貞平之四男
有僧真觀。
○正治二年。
土御門院即
位二年庚申
歲也。先大師
入滅十三年

真觀房感西進士入道ハ十九歳よてくぐりて上

人の門室よいる。師くくはくへて。法要法答詢く

事にけくの年なり。選擇を草ひくれるよもこ

れ人を執筆とてらまわるる。外記の大丈逆終

上人一日返りて。真觀房よはくとんさすくれ

き。器用無下のいあらりるを。上人よ

らまだらて。正治二年閏二月六日。生年四十八よ

て往生をとぐ。上人念佛をすく。先孫々の我

をすてく。たいともこよとて。たいともをとれ

く孫々を

畫圖

○進士ハ。文章生ノ異稱ナリ。源氏細流ニ。進士ノ字ハ。禮記王制ニ
出タリ。進テ爵祿ヲ受ヘキ士ト云事也。孟津抄云。進士ニナレハ必
昇進スル也。○詩ノ小雅鹿鳴ニ。周爰咨詢左傳ニ。訪問於善為
諮。諮親為詢。○外記ノ大夫ハ。是安樂房ノ父師秀ナルニヤ。○真觀
房ニツトメサセラレキトハ。此御房進士ニ舉ラレシ人ナレハ。素
ヨリ儒學ニ長シケン。サレハ外記カ家ノイトナム修善ニハ。便
宜ニ隨テ。別シテ此人ヲ撰ハレケルナランカシ

○石垣公筑後國竹野郡也

石垣の金光房は上人稱義乃言我思ぬに浄土乃法門闡與よいし能るこまわぬ處。嘉祿三年上人の門弟を國へはけいさ地しとき。陸奥國よ下向はるよりこよて入滅の間うれ行状ひろく世よまきこえざるにまわてくりくこ地をたるとらば

畫圖

○彼寺石垣山觀音寺元明天皇敕願所和同二年創建行基開基也

○闡同相門極也。漢馮唐曰。相以内寡人制之。相以外將軍制之。サレハ闡ハ内外ノサカヒナリ。奥室西南隅主人之所安息也。又深也。内證ノオクフカキ處ヲ云。法門ノ深義ヲエタルヲ。闡與ニイタルト云ナリ。論語ニ昇堂入室ト云ノ意ナリ。決答銘心抄云。石垣者別處號也。筑後國在之金光坊者。是彼寺別當也。本宗天台宗也。訖訟ノ事アテ。鎌倉ニ下リ。安樂ノ勸ヲ聞テ。忽ニ發心シテ。世間所事ヲ捨テ。上人ノ弟子トナリ。上人在世ノ時。聖盛法師問奉云。御往生ノ後ニ浄土ノ法門ニ於テ。未嘗ノ事ヲ誰人ニカ問申ヘキヤト。上人ノ給ハク。聖光坊金光坊ハ。委ク所存ヲ知レリト云。○銘心鈔云。至奥州粟津所。遂殊勝。往生ヲ今聞。彼國ノ父老相傳云。當國栗原ノ往生院ハ金光房ノ遺跡ニテ。元祖ノ影像ヲ安置セラレ。今ニ現在ニシテ。靈驗多シ。就中村民堂ニ衆病悉除ノ祈ヲ申。公響ノ聲ニ應スルカ如シ。益ヲ蒙リ侍ルトカヤ。後津輕ニイタリテ入滅スト云。尚僧尼ノ部ニ餘事ヲ注シヌ

上人の門弟。それぞ侍中。宿老の世にまじり。此のほり。法本房行定。成覺房幸西。とてよ。念義をたて。上人の命よとびま。て門徒を擯出。す。此下或ハ義流通分ヲ兼タリ。○一念義ノ事。粗第廿九卷ニ見エタリ。浄土源流章。戒檀院云。幸西大徳立。一念義。一念者佛智。

○行空公源流章ニ美州ノ人ナリト云種姓等未詳。○幸西公傳文第廿九卷二分明也。或傳ニ俗姓物部

一念止指佛心為念心。凡夫信心冥會佛智。佛智一念是弥陀本願行者。信念與佛心相應。心契佛智。願力一念能所無二。信智唯念々相續。決定往生。乃至此師製作。一諦記畧料簡稱佛記。ヲ出シテ。廣ク所立ノ義ヲ述セリ。擯ハ斥也。棄也。ハラフト訓ス。又云。幸西大德美州。行空大德。法寶九品寺。長西大德等。並源空大德。親承面受之弟子也。或宗派ニ。法本上人。行空成覺。相共立。一念義。弟子覺住アリ。決答銘心鈔云。一念義者。幸西異義也。然上人御在生時。少々依有其聞。上人有門徒。放文委細。如彼狀云。五重拾遺云。成覺者。彼人依被放門徒。下州栗原鄉移住。勸道俗。今彼門人在之。云見聞云。下總國栗原ト云在所。道場ヲ建テ居住シ給フ。近年ニテ其跡アリシ也。云云。擯出ノ事。三長記亦同之。第卅一卷ニ注シキ。

○長西公源流章ニ長西乃讚州人。尤

歲上谷隨管家。長者服膺俗典。十九出

首尾十一年隨逐學法云

○住心源流章ニ出雲路

住心上人天台學者大系

圖ニ樺大納言成通卿孫

中納言有通卿子山僧隱

遁者覺瑜或宗派ニ住心

房覺瑜号出阿文章生康

房伊勢國之息也。一書云

廬山寺住心覺瑜上人寬

元三年建立云

覺明房長西ハ上人没後。出雲路の住心房

依止。諸行本願のじひを執して。選擇集リ

違背と。これ三人随不名譽。仁たりといへも

上人の冥慮らかり。さよよわけて門弟乃列

よのせらるること。海なり。人々あやしむこと

たふれ

○覺明房長西出雲路ノ住心房。已上ノ二師僧尼ノ部ニ注ス。並ニ

諸行本願ノ義ヲ立ラシテ上人ノ御義ニ背ケリ。出雲路ノ事。地

理ノ中ニ見エタリ。○門弟ノ列上ノ列坐ノ心ニテ門弟ノナシナリ

圓光大師行狀畫圖翼贊卷四十九

地理

傳本第一

久米南條稻岡莊

久米公郡ノ名ナリ。此一郡南北二分レタリ。九卷傳ニ。稻岡ノ北莊枳社トアリ。一莊又南北二分

レタリ。此例諸國ニ多シ。粗事義ニ注シヌ

陽明門拾芥云東面也山氏造之五間戸三間號兵衛御門北端

傳本第二

台嶺

此山天台ヲ宗トス因テ台嶺ト云大唐三天台山アリ巖山ソレニ象

四明

大明一統志四十四云在府城寧波西南一百五十里周迴八百里陸紹興台州之境二百八十峰其巔五峰絕高形如芙蓉道書謂是山為丹山赤水之天上有石窻四穴通日月星辰之



光故曰四明又有石樓石鼓之類奇異非一方輿勝覽七云浙東路慶元府禹貢揚州之域牽牛婺女之分野唐置鄞州尋廢為鄞縣玄宗時以越州鄞縣置明州以境內有四明山遂名之要郡名四明山在州西八十里陸龜蒙云山有峰最高四穴在峰上每天色晴靈望之如戶牖相倚福地記曰三十六洞天第九曰四明山二百八十峰洞周迴一百八十里名丹山赤水之天上有四門通日月星辰之光故曰四明書略孫興公天台山賦云涉海則有方丈蓬萊登陸則有四明天台皆玄聖之所遊化靈仙之所岬宅佛祖統紀一智禮法師四明上稱スル郡名ニ從ト此法師此山ニ住シテ天台ノ正義ヲ弘メテ四方ノ邪解ヲ折給ヘリ智者ノ法水時ニ通シテ末世其流ヲ受テ魯山其法ヲ傳タリ平家物語云延曆ノ比ラヒ皇帝ハ帝都ヲタテ大師ハ當山ニホリテ四明ノ教法ヲ弘メ給ヒシト云是山ノ總名ニシテ亦別ニ一處指テ四明ト名クル處アリ下ノ水飲ノ處ニ見エタリ

叡岳西塔北谷

叡岳トハ比叡嶽ノ略言ナリ此山始ハ日枝山ト云朝叡山ト云山門日記云此山ハ鎮護國家ノ道場天子本命ノ靈場ナレ叡聖ノ雙ナキニ比シテ比叡ト云ナリ或説云桓武帝傳敎大師ト叡念ラ比同シテ台宗ヲ建立シ給ヘル故ナリト已上下シカレドモ舊事本紀

○行譽集記云舊事本紀有比叡神名山依神為名

比叡ノ神ノ御事見エタリトテ山家者ノ説ヲ疑ヘル書神皇正統記等七往々也平家物語ニ彼月氏ノ靈山ハ主城ノ東北大乘ノ幽岬ナリ此日域ノ叡岳モ帝都ノ鬼門ニソハタチテ護國ノ靈地ナリト云山城國ハ舊ハ山背ト書シテ延曆ニ遷都アリテ此山都城ヲ守ルヘシトテ今ノ字ニ改ラルトソ正統記及山家又漢土ノ天台山ハ長安城ノ東北ニアリテ帝都ノ守リトスルニ象トレリト人口ニ言傳ヘ又書ニモ記シヌレト方輿勝覽廣輿記及大明一統志トニ長安城ハ天台縣ヨリ數百里ニシテ西北ニアタレリトテ此説ヲ非シタル書モアリ天台明近記ニ延曆寺委者比叡山四明天台鎮護國家ト云ヘシトサテ此山三塔ニ分チテ東塔ヲ止觀院西塔ヲ寶幢院橫川ヲ首楞嚴院ト號セリ又三塔ニ都テ十六谷アリ東塔ニ五谷アテ南谷東谷檀那院北谷虛空藏院西谷無動寺或云南谷ト稱ス西塔ニ五谷アテ北谷東谷南谷南尾北尾ト稱ス橫川ニ六谷アテ枕尾戒心谷般若谷解脫谷都率谷飯室谷ト稱ス已上明近記

造道

一書ニ上鳥羽ヨリ下鳥羽ニ至ルノ間ヲ云ト徒然州ニ鳥羽ノ作道ハ鳥羽殿タテラレテ後ノ名ニハアラストサレハ此道アルコト久シ誰カ力闢初ラレケン知リカタ兵範記曰保元三年二月二十八日己未天皇春日社行幸自朱雀經造路并鳥羽中著御頓宮頓宮在

傳本第三

櫛生

近江國滋賀郡東坂下ニアリ。山王ノ鳥居ヨリ辰巳ノ方三四町
分カリニ皇覺住房ノアトアリト云

黒谷

西塔ノ北谷也。十六門記云。法弟聖覺黒谷ノ為體ヲ窺見シ
谷深シテ流淨。竄亂併去リ。路細シテ跡幽ナリ。隱居尤便アリ

上人此ニ住テ年月幾ナラサルニ真言戒律一身ニ兼學シテ血脉ヲ磨
空上人ヨリ稟承ス。略今一房アテ。大師ノ御遺骨並ニ真影ノ坐像ニ
尺餘許ナルヲ安置セラレテ青龍寺ト號ス。又此處ニ報恩藏ト名ケテ經
藏アリキ十六門記等。法蓮房信空ハ大師ノ上足トシテ年來ノ芳契アルニ依
テ黒谷ノ本房寢殿雜舍等。經藏以下ニテ此ハニ附屬シ給フトツ具ニ第四
十五卷ノ專義ニ注シヌ

大原

山城國愛宕郡ナリ。凡大原ノ内河ヲ境トシテ西ヲ小鹽山トイヒ東
ヲ小野山ト云大原名所記。東西都テ八郷アテ東ハ井出戸寺上野大

長瀬勝林寺來迎寺。西ハ野村草生ナリ。比叡山ノ乾ニアタテ別院トス。凡
四十八院アリ。即是大唐ノ天台山ノ乾ニ當テ大原山アルニ象トルトツ
新勅撰ニ

拾遺ニ

大原ハ比叡ノ高根ノ近ケレハ雪フルホトヲ思ヒコツヤレ

西行法師

世中ニアヤシキモノハ雨フレト大原川ノルニツアリケル

新續古今俳諧

清輔朝臣

大原ヘユクハナレニコヒスレハヤセトホリヌルモノニツ有ケル

此外續古今新後撰寂然法師ニ遣ハシケル西行法師ノ山ノカキノ五丈
字十首寂然法師ノカヘレ大原ノ里ノ末ノ七モシノ十首等其詠往々也

傳本第四

天台

漢土ノ台州府ノ天台縣ニアル山ノ名ナリ。廣輿記ニ云。台州府唐
曰海州。曰台州。國朝為口州府。領縣六。天台縣同山川下

天台山大明志云。在天台縣西一百一十里。道書是山上應台星。
超然秀出。有八重視之。如一帆。高一萬八千丈。周迴八百里。山去
天不遠。路由福溪。水險而清。前有石橋。廣不盈尺。長數十丈。下臨
絕澗。惟忘其身。然後能濟。濟者梯岩壁。援葛藤。始得平路。見天台
山蔚然。奇秀雙列。於青霄上有瓊樓玉闕。天堂碧林。醴泉仙物。畢
具也。石梁寺事具法苑珠林也。文選。孫興公。遊天台山賦。凡此山天ノ三台。星
二應スレハ。天台山上。名ツクト。又天梯山トモイヘリ。登テ天ニ至リツヘケレハ也。
四教義。智者大師。此山ニ住テ。法華ヲ盛ニシ給ヘリ。サレハ山家釋之所
諸鈔

住ニ從テ宗ヲ天台ト名ツクトイヘリ。具大佛祖統紀一或從山名如南岳天台或從師號如智者法智ト比叡山其教ヲ移スヲモテ又稱シテ天台ト云又統紀道遠傳附録ニ日本國最澄遠來求法泛舸東還指一山為天台創一刹為傳教已上略書釋門正統同之

西天 天竺六漢土ノ西ニ當ル故ニ云又西域西乾トモイヘリ具六祖庭事苑等ニ見エタリ

東夏 大唐ヲ云夏大也都也都ハ大國ニシテ大ニ禮儀アルハ也論語語ノハ侑ニ夷狄之有君不如諸夏之也也ト邊土ノ小國ナラ子ハ中夏トモ云夏ハ褒美ノ語ナリ今東夏トハ西天ニ對シテ云ナリ

岡 雙岡ヲ云葛野郡御室ノ南ニアリ御室丘仁和寺丘トモ稱ス小山相雙テ一岡ニ岡ニ岡相連レリ一岡北ニアテ最高ク二三六稍界相傳ノ寛平法皇此岡ヲ築給テ廣澤ノ池成ルト云

傳本第五

中河 大和國添上郡也忍辱山ニ近シ釋書實範傳云初範在忍辱山採花至中川山見地勝形申官建伽藍名曰成身院忍辱山公奈良ノ東二里ハカリナリ中川公奈良ノ丑寅忍辱山ノ北ニ片寄

傳本第六

西山廣谷 知恩寺舊紀云粟生光明寺山後也万里小路殿所領之處也云京ヨリ丹波ヘノ通路ニ履懸ト云處アリ廣谷ハ其乾ニ當レリト云

東山吉水 今丸山安養寺ニ水アリ石ヲ疊ムコト方五尺計清水中ニ盈リ吉水ノ名是ニ依テ起レリ古慈鎮和尚所住ノ勝地

事見第十卷事義ナリ一書ニ今尚青蓮院御門主傳法灌頂ノ闕伽ニハ此水ヲ用テト一説ニ上人所住ノ吉水ハ知恩院ノ境内ヲ指ト按ニ大凡此邊安養寺知恩院境大相接テ近鄰ニ十總テ吉水ト名ケシナリ大師ノ御住房殿ノ如ク三所ニアリテ中房二岩今ノ鐘樓ノ東新房樓ノ東北今ノ三門ノト云トモ今ノ知恩院ノ境内ニアリテ安養寺トハ別處也凡總名ヲ別處ニ屬シ別處ニ總名ヲ通稱スル事勿論ノ事ナリ

賀茂河原屋 今之百万遍是遺跡ナリト云寺院ノ中功德院ノ事跡ニ注シヌ

小松殿 配處ノ卷ニ見エタル小松谷ノ御房トイヘルト向所也是今ノ大佛馬町ノ東南ナリ一書云應仁記ニ小松谷殿等光寺ト云ハ

馬町ノ東南ニシテ寺ハ彼大亂ニ退轉シケリ迴城上即是平重盛公四

十八ノ燈籠ヲ掲ラレシ平家物語此所ナリ。燈籠堂ノ舊跡今尚遺テ俗ニ火トボレト云ヘリ。其處正シクハ文殊院ノ北門ノ西ニ當レリ。サハ重盛公ヲ燈籠大臣事盛衰記又ハ小松大臣トモ云レトカヤ。燈籠堂ノ本尊孫公今山科ノ卍堂ニオハセリ

風雅集ニ小松内大臣家ニ菊合シ侍ケルニカハリテ讀侍ケル
建禮門院右京大夫

ウツレウフル宿ノアルレモ此花モトモニ老セヌ秋ソカサ子ニナトアリ。其後九條殿ノ御手ニ入ケルトソ

拾玉集ニ元月七日故殿ノ小松谷ノ墓所ニテ五部ノ大乘經供養ト隰テサウソク送タテツル次ニ前攝政ノ御モトヘ

アトアリテ神サヒワタル小松原ケフヤ身ニム秋ノ谷風トアリ
慈鎮

大谷 今之知恩院即其處也。文曆年中勢觀房上人興隆シテ勅額ヲ大谷寺ト賜ハリヌ。事寺院ノ中ニ注シキサレハ釋書云大谷寺源空云凡大

谷ト稱スル地圓山ノ西北祇園ノ邊ヨリ栗田口ニ至ニテヲ云ナリ。サハ榮花物語ニ皇太后妍子三條院后道長公女萬壽四年九月四日ウセ給ヌギランノ東オホタニト申テヒロキ野侍リソノカタニシオハレヌヘキナリ神土記

右大民記或曰土右記ニ康平六年二月十六日前鎮守府將軍源賴義朝臣所進俘囚貞任重任經清等首并降人交名解文右大辨念進覽之云云先栗田山大谷北丘上踞躡徘徊首三各挿鋒植之云云至于西嶽櫻樹泉之云云

鎮西 西海道十一箇國ヲ總シテ筑紫ト云鎮西ト云。壹岐對馬ヲ除テ九國ナルヲ筑紫九箇國ト云ナリ。天智天皇即位十年十一月筑紫

ノ太宰府ヲ置給ヘリ。聖武天皇天平十四年正月廢之同十五年十一月始テ鎮西府ヲ置ク。皆筑前國ナリ。是西方ノ蠻ヲ鎮守將軍ノ住所也。續日本紀云天平十五年十二月始置筑紫鎮西府以從四位

下石川朝臣加美為將軍云云

坂東 相坂ノ關ヲ限リテ東ヲ總シテ坂東或ハ關東ト云
後拾遺集ニ
左京大夫道雅

又 アラ坂ハ東チトコソ聞シカト心ツクシノ關ニワアリケル
大江匡衡朝臣

アラ坂ノ關ノアナタモタミ子ハ東ノコトモシラレサリケリ

ト。サレハ近江美濃伊賀伊勢等ノ諸國ニナ坂東ニ屬ス東鑑ニ建仁二年賴家有病八月以關西二十八箇國地頭職與舍弟實朝關東二十八箇國地頭并總守護職與一幡君賴家長子ナトアリ。若坂東八箇

國ト云トキ武藏相模安房上總下總常陸上野下野ナリ是皆根山ヲ限テ東ヲ云ナリ

傳本第七

武當山

太平御覽四十三二曰山記曰武當山區城周迴四五百里中央有一峰名曰參嶺高二十餘里望之秀絕出於雲表清朗之日然後見峰一月之間不見四五輕霄蓋于上白雲其前且必西行夕而東返嘗謂之曰朝山蓋以衆山朝揖之主也又南雍州記曰武當山有石門石室相承云尹喜所棲之地又陰君內傳云君字長生入武當山昇仙是也又郭仲產南雍州記曰武當山廣三四百里山高峻峻若博山香爐茗亭峻樹于霄出霧學道者常百數相繼不絕若有於此山學者心有隆替輒為百獸所逐山海經曰祭水源伏流三百餘里漢武帝遣殿上將軍載生之此山採仙藥遂得道不返唐書地理志三十曰均州武當郡下義寧二年折浙陽郡之武當均陽置貞觀元年州廢二縣隸浙州八年以武當鄖鄉復置土貢山雞尾麝香戶九千六百九十八口五萬八百九縣三有府一武當上義寧二年折置平陵縣武德七年有鹽池有鄖鄉上本隸浙陽郡武德元年豐利義山有伏龍山有錫武當山

傳本第八

月輪

凡此名アル處洛陽ノ近邊ニ其一ハ愛宕山ノ東ノ半腹ナリ彼寺ノ緣起云山城國葛野郡鎌倉山月輪寺ハ皇四十九代光仁天皇ノ御宇天應元年藤井慶俊僧都ノ草創ニシテ唐土ノ五臺山ニ擬ヘテ五岳寺ヲ建レシ是其第一峰ナリト愛宕山緣起云建釋書云釋仁鏡南京人晚年尋求勝地聞愛宕山者地藏龍樹攝化之地不可取唐之五臺峨嵋住居大鷲峰晝夜讀妙經續日本往生傳云真統上人住愛宕山月輪寺空也堂緣起云上人空清水ノ觀音ヲ祈リ念佛修行ノ地イツクカ善トスヘシトアリケル大士夢ニ告テノ給分愛宕山月輪寺ハ是補陀落山ニシテ魔界跡ヲ絶シ聖衆來迎ノ靈場也ト云ハ彼山ニ攀登ラセ給三清瀧川ノ龍神アラレ出テ上人所持ノ御經ハ軸中ニ佛舍利アルヲ求得タリ其恩ニ酬トテ上人ノ御望ニ任セ山上ノ水ヲ瀧セリ即崇テ當山ノ鎮守トシ給ヘリ水及社今尚存上略書河今千手觀音餘材ヲ集メテ作之トヲ本尊トシテ御堂一字アリ又影堂一字ニ空也上人法然上人兼實禪閣ニ軀ノ木像ヲ安置セラル別ニ卍舍一字アテ彌陀ノ坐像兼實公ノ安置セラルト三尺計ナルヲ安シテ預リノ人居住ヲナセリ今時ハ愛宕ノ福壽院兼帶セラレ

○或云兼實ノ像ハ是慶後僧都ノ像ナリ

宗祇名所獨吟ニ

待ワフルコノ月ノ輪ノ寺アリテ

ハレヨタカラノ山ノ夕霧

又一ハ齋山ノ西ノ麓修學院ノ邊二月輪寺ト云アリ。寺ハ絶テ田地ノ字トナレリ。又扶桑略記本朝文粹日本紀略ニ或ハ月林ト書ケルモ同寺也。拾遺集ニ清慎公月林寺ニカケルニウケテ讀侍ケル

藤原俊生

昔ワカオリシ桂ノカイモナシ月ノ林ノメシニイラ子ハ

本朝文粹新古今續古今六月輪ト書タリ。ミナ天台山ノ麓修學院ノ邊ニアテ。此ニテ勸學會ナトシケルト

新古今ニ小野宮ノオホキオホイウチ君清慎月輪寺ニ花見侍リケル日ヨメル

元輔

タカタメニアスハ殘ラシ山櫻コホレテ句ヘケフノ記念ニ

此歌元輔集二月林寺ニトアリ。拾遺集二月ノ林ノ召ニイラ子ハトヨメルモ。月林寺ニ清慎公ノカケル時ナリ。サハ處々ニ文字ハカハリタレトミナ此公ノウケテ給ヘル云ナレハ寺ハ別ナラスヤ。又一ハ東山福寺ノ東二月輪ト云所アリ。昔ヨリ人々ノ往來シケル所ニヤ

後拾遺集二月輪トイフ所ニカケレ。元輔惠慶ナトモニ庭ハ藤ノ花ヲ

モテアツヒテ讀侍ケル

大中臣能宣朝臣

藤ノ花サカリトナレハ庭ノ醜ニ思モカケ又浪ソ立ケル

又カツラナル所ニ人々ニカケテ歌ヨミテ。又來トイヒテノチカツラニハカケラテ月ノ輪トイフ所ニ人々ニカケテカツラアラタメテ來ルヨシ讀侍リケルニカハラケトリテ

祭主輔親

サキノ日ニカツラノ宿ヲミシユハケク月ノワニクキナリケリ

袋州紙云。經信卿難後拾遺云。輔親カ語リシ能宣カ桂ノ家ニ會シテ

又ノ日元輔カ月輪トイフ所ニ同人トマリタリシカハラケ輔親トレト云侍シヲ能宣ハエツカウマツラレト云侍シヲ猶ナド元輔申侍シカナレシ井ニカハラケトリテ讀侍ルト云。カクテ行客モ茂ク人居モ多カリシ所ニテ桂ノ里ニ

モ近キ程ト聞エタリ。禪閣ノ月輪殿ハ此所ナリ。東福寺境内ヲ定ムル弘安三年ノ文書云。事四至。東限月輪殿堀路通。西限法性寺塚。南限

溪川。北限東北院田端。ト又九條殿東洞院右府師ノ東ニ法性寺殿

アリ峰殿アリ月輪殿アテ皆相鄰次セリ。又昔大織冠瑞物ヲ得給シ所

御原月輪兩槐門圖云。昔鎌足遊獵月輪得金壘預知後世ナレハ遷都于此邊我子孫亦繁富藏金壘今之宇賀塚是也。其地ニ殿造リ因テ稱號トセルナリ。臣基家公亦稱月輪殿。大彼愛宕又坂下ノ月輪ハ寺號ナリ。此月輪ハ所ノ名ニシテ亦稱號ナリ。縱ニ濫セラズ欲ストモ奚シフ得ヘケンヤ。又西山上人傳ニモ法性寺ノ遣迎院ハ月輪殿

峰殿ナトモ程トヲカラス。洛陽ノ化導タヨリ有ヘケレハトテ光明峰寺殿ノ御サタニテ始ハ人屋ヲ點シテ上入山ノ住處ト定メラレケリト。明月記寛喜二年四月六日記云。自水無瀬殿前御輿宰相已下騎馬自鳥羽北殿北出東路入御月輪殿。又云。御佛事於月輪殿可被修御墓所又其近邊云云。僧月輪入道殿御墓長嚴

同池橋

傳文云又云頭光橋云。釋書云。空謁藤相國于月輪談話而出相國下庭拜背後語左右曰。空公頭上現金圓光。卷傳三頭光現シテ後門外ニテ見ヲリ給ニ又勢至ナリト

傳本第九

河東押小路仙洞

河東賀茂河ノ東ヲ云ナリ。山槐記云。永曆元年十一月廿四日戊戌。今夜美福門院御葬送。自押小路殿河白渡御鳥羽東殿兵範記云。保元三年正月十日辛未。天皇為朝觀行幸美福門院御在所白河押小路殿。自中門東行。自東洞院南行。自郁芳門大路東行。自川原巽行。自押小路未東行云。吉記云。壽永三年四月十六日甲戌。今夜院押小路殿御移徙也。本是鳥羽院仙居。松院御傳領。次被奉建。春奉院了。法住寺殿之外依無他。又云。永曆元年七月廿二日參中。

宮白川押小路殿付女房入見參退出。
長秋詠藻ニ故女院門美福。白河ノ押小路殿ニテ彼岸ノ御念佛有シ。七日ノホト人々毎日會セントテ歌ヨミシ中ニ。霧中霞トイフ心ヲ

俊成

何トナク物哀ニモユルカナ霞ヤタヒノ心ナルラン

和尚住房三條白川

下粟田口ノ西東三條青蓮院是也。寺院ノ中ニ注シヌ

横川

叡山三塔ノ隨一。首楞嚴院是也。
新古今ニ少將高光。横川ニノホリテカシラオロシ侍ニケルヲキカセ給テツカハシケル

天曆御歌

都ヨリ雲ノヤヘタツ興山ノヨ川ノ水ハスミヨカルラシ

新勅撰ニ高光ヨ川ニ侍ケルニトフラヒカカリテ讀侍ケル

東三條入道

君カ住ヨカハノ水ヤマサルラシ瀬ノ雨ノヤムヨナケレハ

新續古今ニ後深草院。横川ノ安樂谷ニ御幸ノツ井テニ音ツカヘケル事ナト。オホセトアリケル後ニ奏シ侍ケル

思ヒ出ル雲井ノ月ノ面影モ横川ノ水ニスミレテツカヒル

根本水

横川中堂ノ北ニアリ。慈覺大師如法經書寫ノ水ナリ。右

水飲

西坂口ニアリ。今ノ人宿ナリ。釋書皇慶傳ニ漸翠微山半ニ至テ

呼テ水飲ト云云。盛衰記四ノ京都ヨリ僧綱等登山シケルニ衆徒水飲

千騎ヲ率シテ四明ノ上ヘ馳上テ真倒ニ懸立ラケルニ寄手ノ兵共水飲

ノ南北ノ谷ヘ懸落サルト昔ハ此處房舍營構テ本尊ヲ安置セラレ又脫

俗院ノ號今ニ傳稱セリ。

朝野羣載ニ戲山水飲道場觀音像碑文ヲ載テ云

僧唯普照 聖是觀音

發心不淺 弘願甚深

慈惠大僧正二十六條式云不可籠山僧出内界地際事東限悲

般若寺西限水飲北限

鳥居岡

事義ニ注シヌ

傳本第十

八坂

和名云愛宕郡八坂也。佐ト。八坂元一卿名也。然今言八坂者

傳本第十四

坂本

西坂本ヲ指テ云ナリ。戲山ノ麓東西ミナ坂本ト稱ス。西ハ修學寺

池上皇慶阿闍梨舊跡乙護法守護靈地

五房屋敷トテ今尚存ス

大原勝林院ノ邊ニアリ。事義ノ中ニ粗注シヌ。又梶井ノ御門前ニ護法

石アリ。相傳乙護法化シテ石トナレリト。大原名所記池上ハ丹波國船井郡

大日寺是也。此寺今時ハ民俗會合ノ州堂トナレリ

楞嚴安樂谷

飯室谷ヨリ行程二町計ナリ。延曆寺ノ事跡ニ見エタ

傳本第十七

安居院

寺院ノ中ニ見エタリ

後鳥羽院遠所御所

帝王編年記曰承久三年辛巳七月八日庚寅鳥羽離宮御出家御年二十三日

乙未奉遷隱岐國延應元年巳亥二月廿二日崩于彼國御年六十去位四十二年號後鳥羽院サレハ隱岐法皇ト申タテニル東鑑百練抄等彼國ニ遷給テ六年ヲ經テ此御書ヲ僧正承圓ニ下サルサレハ遠國ノ配所ナルヲ遠所ノ御所ト云ナリ

上野國府

此國羣馬郡ヲ府トセリ拾府聚也萬物ノアツル處ヲ云原等凡一國ニ一所繁昌ノ地ヲ撰テ府ト定メ國司此所ニ居テ政ヲ聞ク山城ノ北訓大和ノ十市ナト是也

傳本第十八

金峰

大和國吉野郡ニテリ日本七高山ノ隨一ナリ拾亦金山九事釋書石山寺志及日藏傳二見エタリ義楚六帖ナ云日本國都城南五百餘

里有金峰山頂上有金剛藏王菩薩第一靈異山有松檜名華輦艸大小寺數百節行高道者居之不曾有女人得上至今男子欲上三月斷酒肉欲色所求皆遂云菩薩是彌勒化身如五臺文殊已上顯德年中日本僧弘順入唐所語也云焉扶桑略記云日藏上人入死門間夢事金峰菩薩菩薩令佛子見地獄時復至鐵窟有一茅屋其中居四箇人其形如灰燼一人有衣僅覆背上二人裸袒躡履赤灰獄令

曰有衣一人上人本國延喜帝王也餘裸三人其臣也云古今著聞云吏部王記曰真崇禪師述金峰山神變云古老相傳昔漢土有金峰山金剛藏王菩薩住之而彼山教移滄海而來金峰山則是彼山也山有捨身窟號阿古谷有體龍昔本元興寺僧在童子名阿古少而聰悟試經之時師使阿古奉試及已得後代度他人如是兩度爰阿古恨忿捨身此谷即得龍身師聞捨身驚悲往看于時已化龍頭猶人而先欲害師菩薩冥護崩石壓龍故師免害貞觀年中觀海法師為見龍身往到彼窟比天明興雲降電見龍舉首高二丈計一頭八身觀海祈龍云奉寫八部法華經將救汝苦勿害於吾龍猶吐氣害將及身觀海大恐心神迷惑則歸命菩薩須寫件經於是雲霧冥失龍所在須臾雲霧即除忽然身至御在所觀海祈感如願寫經得供養之請善祐法師為講師善祐法師固辭夢菩薩告曰我今請汝勿苦辭須至方便品漢音讀之善祐感悟赴請如菩薩告比至方便品大風飄經不知所去八部法華經今見一經靈異記云吉野金峰有一禪師經峰行道禪師行前有音讀於法華經金剛般若經即留求之草中有一鬮髀歷年曝日舌猶不爛取收淨處普覆以草共住讀經六時行道禪師恒

讀法華、鬻體共誦、怪見鬻體、其舌振動。

醍醐

山城國宇治郡ナリ。醍醐寺ノ事跡ニ見エタリ。

丹後國志樂庄

加佐郡也。志樂市場相隣テ若狹界道ナリ。東鑑云、建久六年八月六日、丹後國志樂庄

伊稱保領家、雜掌解到來、地頭後藤左衛門尉基清致濫妨狼藉之由云。

傳本第二十

河内國天野

丹南郡也。寺アリ天野山金剛寺ト云。僧院七十ハカリアリ。行基菩薩ノ開基也。

相摸國河村

足柄郡也。此郡上下三分レテ。此村ハ足上郡也。小田原ヨリ北ニ當テ。行程二里ハカリナリ。小田原ノ方ハ足下郡ト云。東鑑ニ治承四年八月十八日大庭三郎景親、一千餘騎ニテ平家ノ陣ニ加ハラシカニ發向セントスルノ處ニ前武衛二萬餘騎ニテ足柄ヲ越給ノ間、景親前途ヲ失テ河村山ニ逃亡スト云。又河村三郎義秀ハ大庭景親ニ與黨シケレハ鼻首セラレヘキヲ。大庭景能潛ニ扶ヲキテ。文治四年八月鶴岳ノ流鏑ニ高名シケレハ、本領相摸國

河村郷ニ還佳ス

ヘキノ旨下知セラルトアリ。略書

遠江國久野

見付ヨリ東ニアタテ。行程三里ハカリナリ。作佛房ノ舊跡トテ。小庵今ニ構テ念佛ノ道場ナリ。

熊野山

當山縁起云、證誠大菩薩者淨飯大王五代之孫子。慈息女慈悲母女ヲ爲后妃。生男女兩子。大王並長者和國降來之時。神武天皇七十、驚峰鷄足兩山之一峰同隨來。今大峰並權現御在所是也。故號地主權現。盛衰記凡當山三所權現ノ事。日本紀ヲ始テ。類聚國史扶桑略記。朝野羣載。古事談野府記。順禮記。水鏡。帝王編。年記等ニ散在シテ具ニ載カタシ。今且彼縁起ヲ略抄シテ。地理ヲ知シメントス。抑當山ハ神武天皇三十一年辛卯。高倉下尊。命。自磐船ニ乘テ。此秋津嶋ヲ廻給ス。爰ニ紀州ノ南郊ニ至テ。一ノ大熊アリ。其長一丈餘ニシテ。金色ノ光ヲハナチ。無量ノ奇瑞光中ニ顯ハレタリ。日本紀云、大熊鬚。此示現ヲ拜シテ天ノ告ヲ承。又様々ノ靈夢ヲ感シテ。神藏ノ寶劔ヲ得給ヘリ。屢コレヲ用井テ州中ノ邪神ヲ伏セシメ。六合悉安給ス。今ノ神藏即其靈地也。又熊野ノ號彼時ニ始メリ。サレハ岩窟ノ鳥居ノ額ニモ。熊野根本神藏權現トアリ。八皇第十代崇神天皇御宇。紀伊國無漏郡音無川ノ流ニ副テ。片碎ノ宮ヲ造ル。熊野

權現是也。民俗コレヲ祭テ國常立尊ト仰キ。呼テ本宮ト云。山号
龜甲
山寺号大。此山帝都ヲ去事四十七里。高野南海ノ邊際常暖氣
ヲ生ス。中國ニ比スルニ倍シテ暖ナルハ無漏ノ郡ト云ナリ。社ノ敷地
東西横ニシテ二町。南北豎ニシテ三町。河岸ノ浮洲其形龜甲ノ如シ。
又東方ニ青山高峯コレハ七越峰トモイヘリ。廻廊六十間。東西南北
間餘巧ヲ盡シ。四足ノ門三方ニ秀タリ。南門ノ前二流テ大河アリ。往詣
ノ道俗一葉ヲ乗。浮テ新宮ニ至ル。難所遙ナリトイヘ共。歩行七里半
船路九里八
町水高ケレハ一時ニ至リ。水渴スレト二時ヲ超ス。抑又新宮ハ人皇十
二代景行天皇御宇彼河下ノニ宇ノ山本海岸ノ入江ニ望テ。新宮
新ニ宮造セリ。民俗コレヲ祭テ早玉尊ト仰ク。山号金胎山
寺号金剛寺本宮ニ後
タル事凡一百六十七年也。サレハ名ツケテ新宮ト云。シカレトモ當社ノ
根元ハ本宮ニ先タテルコト。其年歴ヲ考ルニ凡四百年。人皇第五代孝
照天皇五年庚午當社ノ東飛鳥社ノ北。岩淵幾彌谷ニシテ始テ二
宇ノ社ヲ造リ。三所權現ヲ勸請セリ。伊井諾伊井冊ヲ合シテ一社トス
ト泉津事解尊ヲ一社トス今
ノ新宮ニ遷サレテヨリ改テ十二社ヲ造。又古今ノ遷宮所改ミレトモ。
遠津濱ノ園ヲ出ズ。二所互ニ程隔タレトモ。纔ニ二十餘町ヲ越ス。此山
都テ神山ト號シテ。東ノ麓ヲ二宇ト名ツク。音無川ノ末。新宮ノ湊
ト云即是也。西ノ尾ノ末。山ノ半腹ニ南面ノ伽藍アリ。神藏野是也。人

皇十七代仁德天皇御宇那智山重テ建立ナリ。又御神ヲ八結尊ト
云。山号那智山
寺号青岸渡寺新宮ニ後タル事。凡二百六十四年ヲ經タリ。行程
相去コト五里計也。ト云。已上縁舊史云神武天皇四十二年正月丙
寅。木齊國言熊野國山之曲有熊部血伐狹田命者矣。常事好狩
遊于時見長度一丈之大熊。即放大箭射之。熊不瞋負其箭而入
深山。乃尋血跡。晚至大湯原峰。爰有三株櫟木。大熊死於樹根。血
伐狹田命至此。驚光輝見。月輪於樹上。其面高量五尋。奉問在月
汝高尊神何為離於天。居於樹上哉。答曰。吾者天神高皇彥靈尊
也。降在叀。汝於大國雪降山。魂形為玉也。住八十萬歲。十萬歲成
一角。既而八角成畢。云何然哉。八極數成人機。依八極故數成八
角。今吾孫天皇心天。故吾尊奉祭念懇也。故移于豐國日子山之
巔。其魂形玉八角八尋。住十五歲。又移於淡路國弓弦羽峰。住之
而住十六年。移於木齊國露月山。松下又住八年。遂遷于茲。留櫟
樹。今亦三年。汝速至帝都。奏由於天皇。木齊穗積祖血伐狹田
命驚走。急奏之時。天皇大悅。勅天村雲命。遣於築石。令問其事。國
民答曰。昔於日子峰有下降靈神。其神形體者豎橫五六尋。八角
五光。真玉石也。人欲奉親。倚即吐血。熱惱。數年在後。更無也。尋
至淡路。又問其事。國民答曰。昔日見長二丈八角。白玉石神降於

皇十七代

引弦羽嶽晝夜光輝靈驗行祈願無不應飛去東方今不知在處
天村雲命歸洛答奏天皇大悅重詔天村雲命添血伐狹田命遣
之見之又增二輪以三輪在時月輪詔二輪去來諾尊並去來冊
尊也從本在茲吾三柱神天皇皇祖吾在常世國名聲隨耳尊身
一有多形待天地成開而出成功施德而已去來諾尊陽氣大主
去來冊尊陰氣大主高皇產靈尊陰陽相和主天地萬物此國他
國皆無不依吾有併無不蒙我助我今見出永留居茲天皇萬庶
發信參來無不滿祈吾祠八棟造三所十二前天神七代地神五
代天地人主請募垂跡依高皇產靈尊奉鎮坐于本宮拜去來冊
尊奉鎮于新宮拜去來諾尊奉鎮於西宮于下津磐根宮柱太敷
立于高天原梁林高知奉崇高津祖宗宮之大神天下元鎮也是
此十二所太神天七代地五代也本宮西來神勸之新宮泉來神
勸之結宮諸神自集來更非人能本宮十二前是師道七代西來
為正殿並本主五代海形雄神嫡子嫡孫海形月神少彥名是新
宮十二前是二帝五后泉來為正殿產生三神大國魂神久延彥
神結宮十二前是王道七代大祖為正殿並海形日神寶祚五代
也天皇大崇之直至而祭之每月遣使奉幣祭之

傳本第廿四

伊豆國走湯山

賀茂郡也。宮根山ヨリ南ニアタテ海ニ指出夕
ル山ナリ山中ニ温湯アリ記文ニ役行者湯ヲ開

カルト熱海郷ノ出湯ニテハ十八町アリ小田原ヨリ南ノ海邊伊豆相摸
兩國ノ境ニシテ石橋山相摸ニ相連ナレリ彼山合戰ノ時軍兵通路ト
テ聊カ狼藉ノ事アリレカハ衆徒ノ歎訟ルニ依テ下知ヲ加ヘラレ頼朝卿大
崇敬セラレシ事東鑑ニ往々ナリ神社ハ瓊々杵速日尊白鳳九年庚辰ニ
建起緣當山ノ舊記ニハ仲哀天皇御宇豐時仙王開基ト俗ニ伊豆ノ御
山ト云即是也緣起ノ大略鎌倉九代記第二見エタリ一書云伊豆箱根
共本社彥火火出見尊也舊史云出維神社上皇三代時高皇產
靈大神女大山跡祇大神妻天花咲姬大神鎮坐云續後撰ニ

鎌倉右大臣

千早振イツノオ山ノ玉椿八百万代モ色ハカハラシ

釋書桓舜云舜甚寔浪遊豆州說法温泉神祠其夜夢神告曰師
早還本山必昇顯位舜如神言果為法性寺座主

傳本第廿五

鎌倉

相州鎌倉ハ詞林采葉ニ云、鎌倉トハ鎌ヲ埋ム倉ト云詞ナリ。昔大織冠イマタ鎌足ト申セシ比宿願ノ事ニシテスヨリ鹿嶋參詣ノ時此由比里ニ宿シ給ケル夜靈夢ヲ感シ年來所持シ給ケル鎌ヲ今ノ大藏ノ松岡ニ埋三給ケルヨリ鎌倉上ト其後源賴義以來源家相傳ノ地トシテ治承五年ノ比草創アテ將軍家ノ居住トナレリ此處東ハ海西ハ山ニシテ谷々ヲ居所ニ構テ入口ナリ皆巖石ヲ切通シタリ

小屋原

上野國勢田郡大胡領也

武藏國那珂郡

拾芥ニ那珂ニ作レリ此國廿四郡ノ内那珂ト云郡名ニアリ今此ニ指セル公何ト云事未考

傳本第二十六

八王子山

八王子ハ山王七社ノ内ニテ二宮ノ上ノ山腹三宮ト相並テ岸上ニ鎮坐シ給ヘリ其山嶮岨ニシテ折檻ナリ麓ヨリ社ニテ行程八町ハカリ松曲杉直ニテ古今峰茂リタリ東鑑ニハ此ヲ金子山トイヘリ按ニ是ハ王ノ字金ニ誤作ルニヤ此山金子ノ名アル事里老モ未聞トイヘリ然トモ日吉山王新記ニ伏祭明月集云ハ皇第ト

代崇神天皇即位元年甲近江國滋賀郡小比叡東山金大巖傍

天降矣ト云又神祇宣令云ハ王子同天降故曰ハ王子又ハ王子

權現訖宣云安社壇於奇巖之上補陀落山之雲移儀挑審殿於

長湖之前海岸孤島之風比勢矣本地垂迹以下ノ巨細山家冢

要略記ニ具ナリ

北嶺

比叡山ヲ南都ニ對シテ云ナリ東大興福ヲ南寺釋書傳教諸師ト云三井ヲ北寺ト云若フサチテ云時ハ三井山門ヲ北

京ト云東大興福等ヲ南都ト云

酒長御厨小倉村

上野國甘樂郡赤城山舊史云赤城神社神鎮坐ノ南ニタレリ彼山ハ下野國ニ隣リテ日光山ニ相續ケリ小倉ノ草菴今ニ遺跡アテ當時ハ禪家ノ僧守之御厨トハ禁中ノ供御神社ノ供領ニ充ラル云ナリ東鑑治承四年大神宮ノ御領伊雜神戶鈴母御厨負部神戶田公御厨云又云船橋御厨相馬御厨御領云此類往々第一第十六及壽二見エタリ内膳式云大和國吉野御厨所進場從九月至明年三月志摩國御厨鮮鰓螺起九月盡明年三月

傳本第二十七

武藏國熊谷

大里崎玉兩郡ニニタカレリ。町裏ニ清水アリ。熊谷殿馬ヒヤシ場ト云

同村岡市

崎玉郡也。熊谷ヨリ西南ニアタテ。行程半里ハカリナリ。當世ハ形ノ如ナル家居ノミナリ

傳本第二十八

同國津戸郷

傳文武藏國トアレトモ。信濃國筑摩郡ノ内ニテ。松本ノ城下ニ近シ。彼御教書ヲ下サレケルニ。信濃前司行光カ奉行タリシモ。此謂ニ依ニヤ。サレト傳文ニ武藏國御家人津戸三郎石橋ノ合戰ニ武藏國ヨリ馳參ストアリ

石橋山

相模國足下郡ノ内。早川ノ西南ニアリ。小田原ヨリ南ノ海邊ニ出ル道ナリ。早川ハ宮根ヨリ小田原ノ方ヘ流ル。河ナリ。戰場ハ山上ノ路頭ナリ。其通路其名跡トモ今ニ殘レリ。東鑑十云。日來伊豆。権現ニ御參ノ處ニ。路次石橋山ニ於テ。佐奈田與一豊三等カ墳墓ヲ覽タマフテ。御落涙數行ニ及フ。是件兩人。治承合戰ノ時。御敵ノ為ニ命ヲ奪ハレシヲ。今更思食出サレテ。其哀傷ノ故也ト

傳本第三十

遠江國笠原庄櫻池

慕原郡ナリ。十六門記云。水面一町計ト云。一書云。阿闍梨諸國ニ使ヲヤリテ。然ヘ

キ池ヤアルト尋ケルニ。東海ノ使者。但馬注記澄筭ト云。少僧カハリテ申サク。櫻池コソ南ハ滄海萬里ナリ。北ハ山木マニアリ。海ヲ去ル事遠カス。興アル池ト申シト云。九卷傳ニ。花山院ノ御領トイヘリ。粗事義三國傳記云。遠江國笠原庄櫻池ト云。昔彼國ノ刺史ナル人。初テ下向シケルニ。洛陽ヨリ櫻前ト云。寂愛ノ美女ヲ具足シテ下リケル。時ニ國民等。彼池ノ縁ニ假屋ヲ構テ。國司ヲ禮ス。彼女。姓モ與ヨリ下テ。垂幕ヲ隔テ遊興ス。一座千秋ヲ祝テ。酒宴半ナリケルニ。彼池俄ニ色ヲ變シ。逆浪櫻前ニ打懸テ。共ニ池底ニソ引入。又國司興醒。諸人色ヲ失テ。騷動ス。サレハ水練ノ者共ヲ入テ。碧澤ノ底ヲ求レトモ。終ニ行方ヲ不知ナリ。又國司大ニ歎テ云。此池ノ主。我妻ヲ奪ヘルニヤ。サレハ臆テ對治スヘシトテ。水ヲ竭サントスルニ。山廻テ便ナク。鈕ニ及ハントスルニ。底深シテ餘アリ去。程ニ國中ノ薪ヲ集テ。山邊岩石ヲ燒キ。池中ニ轉入スル事。七日七夜ナリキ。時ニ池水色變シテ。黒キ事墨ノ如ク。青キ事藍ノ如シ。後ハ血色ト成テ沸上テ。大毒蛇顯ハレヌ。其形特。牛ノ如クニシテ。背ニ黒キ鱗ヲ連。頂ニ白キ角ヲ戴。口赤ク爪利カ。浮出テ死ニケリ。サレ櫻池ト申ナリ。其後相模阿闍梨快賢ト云僧。肉身ヲ不替シテ。弥勒

出世ニ値ント願テ屈身ノ行ヲ修シテ大地身ト成テ主ナキ池ナレハトテ此池ニ入テソ住ニケル其弟子ノ法然ト人彼國ニ下向シテ池ノ邊ニ到給ニ始ハ元ノ姿ニテ對面シ給ケルカ後ニ上入ノ所聖ニ依テ大地ノ形ヲ現シテ見エ給ケルコソ不思議ナレ聖書ト

傳本第三十一

異域 大唐天竺ハ此國ノ外ナレハ異域ト云ナリ又日本ハ自國ナレハ親ニテ我國ト云餘ハ他國ナレハ疎ニテ異國異朝ト云サレハ八幡ノ神託云他國ヨリ我國云云宣集等アタレクニトモヨリ

月氏 西域記云天竺此云月也佛日既没諸教諸聖如月其五印土周九萬餘里三垂大海北背雪山北廣南狹形如半月畫野區分七十餘國云山海經海內東經云居蹠造月支國多

好馬美果有大尾羊小月氏天竺國皆附庸云云震旦 名義集云或曰真丹旃丹琳法師云東方屬震是日出之方故云震旦華嚴音義翻為漢地此不善華言樓炭經云怒河以東名為震旦以日初出耀於東隅故得名也祖庭事

傳本第三十二

鷲峯 靈鷲山ヲ云ナリ山ノ形鷲ニ似テ靈仙ノ所住ナレハ名ワクト云王舍城ノ東北ニアリ梵語ニハ耆闍崛云翻譯名義集ニ諸文ヲ出セリ

鶴林 娑羅林ヲ云ナリ佛入滅ノ時此林色ヲ變シテ白鶴ノ如クニ枯ニケレハ此名ヲ得タリ名義集等ニ具ナリ事義分ノ中ニ注シヌ

舍衛 雲川弥陀經新疏云舍衛者正云室利羅筏志底訛言舍衛新翻豐德謂豐四事一財物二欲塵三多聞四解說舊翻聞物厥意大同此是中印度北橋薩羅國都城名為簡南橋薩羅國故以城名而為國號云又名義集ニ見エタリ

蓬萊 義楚六帖云十州記山海經等云高麗國都利府東嶋有瀛洲國生州在東海辰巳地面方二千去蓬萊山近書又云日本國亦名倭國東海中秦時徐福將五百童男五百童女止此國也今人物一如長安都城東北千餘里有山名富士亦名蓬萊其山峻三面是海一朶上聳頂有火煙日中上有諸寶流下

夜即却上常聞音樂徐福止此謂蓬萊至今子孫皆曰秦氏中已略是顯德年中日本僧十州記東方云蓬萊山對東海之東高一千里周過五千里外別有圓海繞山海水正黑而謂之冥海無風而

洪波百丈不可得往來上有九天真王宮蓋太山真人所居惟飛
仙能到其處耳山海經云蓬萊山在海中上有仙人宮室皆以金
玉為之鳥獸盡白望之如雲在渤海中也海內白氏文集第三史記
本紀始等事義二注釋書舍利尼傳云浦嶋子蓬萊仙鄉樓數
百年梁僧傳一小兒至蓬萊得道人書還送與史宗云
夫木鈔家集祝

民部卿為家

ワタツウミニシラヌ浪間ニスムカメノ蓬カ嶋モ君カタメトフ

方丈瀛洲

孫興公力遊天台賦云涉海則有方丈蓬萊注云
皆海中名也張平子力思玄賦云登蓬萊而容與兮

留瀛洲而採芝兮注云海中神山也字彙云瀛音盈神山名日本
紀白氏文集萬葉等ニワタツウミト訓ス已上ノ三件皆海中ノ仙居ニ

シテ人常ニ見ス山或海中ノ化城ノ如シコヲモテ或同處或異處處々
ノ説不同ナリ

五臺山

處々法苑珠ノ説多代州ニアリト云感通三寶錄云山方
三百里崇峻巉巖有五高臺上不生草松柏茂林森於

谷底其山極寒號清涼山有文殊將五百仙人即斯地魏文帝宏
所製上有入馬迹石上今在矣已上義楚六帖附一大明志云
五臺山在府治嘉興西北山東南有宅秀王祠西南有木紋觀音

殿以石刻法華等經列為闕凡十三間及立東西二塔建炎兵火
後石經獨存

清涼山

上ノ諸文ノ如キハ五臺清涼同處異名ト聞エタリ若大明
志ニヨラハ別ニ一山アリ彼云清涼山在府城延安東北上

有屍毘巖相傳昔屍毘王修行處又有萬佛洞內大小石佛萬餘
又有仙石洞在山北刻石云金皇統九年梁文仙鑿山半有鷲峰
泉寺僧于懸崖上垂繩汲之云

波羅奈國

西域記云舊曰波羅奈新曰波羅訛也中印度境婆
娑云有河名波羅奈去其不遠造立王城或翻汗達

城亦云鹿苑已上名義集

鐵圍山

一須弥世界ノ總構ナリ凡世界ノ建ユラ云ニ中央ニ一ノ須
弥アリ又七金山アテ須弥ヲトリマク事王城ノ四方山ヲ以テ

圍カ如シ圍ユト七重ニシテ重々ノ中間皆大海ナリ八功德水中ニ
湛エタリ最外ノ海ハ塩水ヲ湛エテ是ヲ外海ト名ツク此外海ノ
中ニ洲アテ須弥ノ四方ニ當レリ是ヲ四大洲ト云南方ニ當ルハ即

閻浮提ニシテ三國天竺二大唐日本皆其中ニアリ此外海ヲ過テ小鐵圍

大鐵圍ノ二山アリ二山ノ中間亦大海アテ常ニ黑闇ニシテ日月モ
光照及バス諸ノ地獄或ハ其中ニアリ此山鐵ノ所成ニシテ世界ヲ

トリミク。因テ鐵圍山ト名ツク。俱舍論世間ニ見エタリ。

傳本第三十三

東山鹿谷シカダ 愛宕郡如意嶽ノ麓吉田黒谷ノ後ナリ。俊寛僧都平氏ヲ謀リシ時ノ酒宴會合ノ地。此上ノ山腹ニアリ。俗

ニ談合谷ト云。又平相國清盛公ノ別荘。此處ニアリト云。住蓮安樂ノ遺跡トテ。大師ノ遺骨ヲ收テ。上ニ石塔ヲ立テ形ノ如クノ草庵アテ。

大像ノ弥陀尺計五フ安置セリ。天和年中萬無上人知恩院法然院ヲ今ノ地光雲寺ノ北ニ營テ休退ノ地トシ。住蓮安樂ノ古風ヲ移シテ。六

時禮讚ヲ興行ハル。今ノ本尊及元祖ノ石塔等ハ皆被地ノ所有也。

小松谷御房 上ニ見エタリ

法性寺小御堂 寺ハ九條河原ニアリ。小御堂其内ニアテ。又西御堂トモ云。具ニ寺院ノ中ニ注シヌ

傳本第三十四

信濃國角張 一本ニ角張ニ作レリ。今本及九卷傳角張。一書ニ假名ニテカクハリ。盛衰記或ハツノハリトモアリ。正字及和訓

郡郷並方角等未得案内也

鳥羽南門 下鳥羽ナルヘシ。門ハ今廢絶シヌ。今一念寺トテ。弥陀大像ヲ安シタル小堂アリ。渡海場ト云。處此邊ニアレハ

大底此ワタリナルヘシ。壽永二年平家西海ニ赴時。池大納言賴盛卿都ニ忘タル事アリトテ。鳥羽ノ南ノ門ヨリ引返サレタリト平家物語アリ。古此所ヲ渡。口トシテ。繁昌ノ地ナリト見エタリ

攝津國經嶋 俗ニ兵庫ノ築嶋ト云是也。帝王編年記廿云。承安三年入道大相國清盛於福原輪田濱摂津國始

被築嶋。于時龍嫌起風。陽侯壑波。不得防固。爰埋一人祭海神。石面書寫一切經。即以其石得防固。號曰經嶋。爾而以降上下無煩。

舟既得全。泊者行基菩薩之草創。年中嶋者入道相國之興隆也。平家物語云。福原ノ經嶋ハ。應保元年二月上旬ニツキ始ラレケル

カ。同シキ八月二日ニ。俄ニ大風吹テ。波ニユリクツサル。同シキ三年三月下旬ニ。阿波ノ民部重好ヲ奉行トシテ。築レシカ。人柱立ラレキナント。公

卿センギ有シカトモ罪深シトテ。石ノ面ニ一切經ヲ書テ。築レケル故。經ノ嶋トハ申ナリト國阿上人傳傳文ニハ。安元ノ寶曆ニ。此事アリトイヘ

リ。年代處々異説アリ。考ルニ應保元年ヨリ。承安三年ニ至テ。凡十三

○松王ト云小童ノ罪深キ事ナセソト諫シトナリ。

修復播磨國魚住泊云山陽西海南海二道舟船海行之程自檀生泊至韓泊一日行自韓泊至魚住泊一日行自魚住泊至大輪田泊一日行自大輪田泊至河尻一日行此皆行基菩薩計程所建置也云云今時此泊ニ藥仙寺古云輪田千僧寺ト云精舎アリ寺中ニ虛白堂アリ元祖大師昔時寄宿ニシテ水陸無遮會七月十五日ノ法規ヲ彼堂ニ始ラカル今ニ至テ其規タエス再五九月ヲ定式トシテ法會ヲ營ムト彼寺ノ水陸圖像ノ縁起ニ見エタリ

播磨國高砂浦

賀古郡也今十輪寺アリ元祖ノ開基ト云事義ノ中ニ注シヌ

同國室泊

日本ノ遊女此處ヨリ始ルトイヘリ昔ヨリ貴介公子此處ニ遊戯セシ事撰集抄ナトニ往々見ユ江口橋本兵庫神崎ノ遊女ニテ此末ナリト云粗事義ノ中ニ注シヌ

傳本第三十五

讚岐國塩飽

是小嶋ナリ扇嶋小豆嶋相並ヘリ傳文三月輪殿ノ知行又伊與國ヲモテ殿下ノ御領ニ充テノ事東鑑ニ見タリ

同國子松庄

和名云那珂郡子松都萬或作小松一書ニ那珂郡八月輪殿ノ御領トイヘリ

傳本第三十六

攝津國押部

八田古事紀和名抄ニ作八田續日部郡上邊ト本後紀三代實錄ニ作矢田云處アリ西宮ノ西二里ハカリニテ脇濱ニ隣リ兵庫ニ相近シ父老相傳テ云上古ハ不知曾近比年計マテハ上部ト書シテ改テ上邊トナセリト或押部押部神戶トモ書ナリト今按スルニ押部字形相似押部神上音訓同シク又部ト邊ト戸ト唱ヘ同シケハ展轉シ來テ古今差異スルニヤ又村民相傳云昔神功皇后三韓ヲ退治ニシテ歸朝ノ時此ニ於テ異敵ノ首實驗アリ因テ頭ト云ト

大谷禪房

今之知恩院是也寺院ノ中ニ注シヌ

傳本第三十七

西山水尾

愛宕山ノ西南ノ麓ナリ三代實錄及扶桑略記等ニ元慶三年四月清和天皇山城大和攝津ヲ經テ名山勝地ヲ巡禮ニシテ丹波ノ水尾寺ニ入御シ給フト圓宗寺ノ西山陵ニ御骨ヲ納メ奉ル堂前ニ御塔アリ

傳本第二十八

四條京極

東西ノ京極アリ。今言京極者何レト云事ヲ不知今ノ東
京極ハ寺町ナリ室町殿日記云天正十八年ノ比秀吉
公諸大名ニ被_レ御付。洛陽ノ東西ニ土手ヲツカセ一切ノ寺トモ洛
中ニ三千テ。在家ト立並ケレハ。德善院ニ御_セ付テ。諸寺ハ京極ヨリ一
町東へ押出シテ。北ハ鴨口ヨリ下ハ六條マテ。片面ニ屋敷ヲ渡サルト云

花園

華園左大臣有仁公ノ宅地ニシテ。石ヲ壘テ花園トス。藤原
法皇其地ヲ愛シテ。行宮トシ給ヘリ。今之妙心寺即其地也。

又北山ニ別ニ花園ト云アリ。大臣ノ雲孫家ヲ其地ニ移シテ亦名之華
園。今ノ高野村ノ西北ハ塩岡ノ南ニアルハ即是也。又祇園ノ南ニ同名
ノ地アリ。拾芥抄云雲居寺花園向祇園南云。或云是ハ称号ニシテ
所ノ名ニハアラサルヘシト

八幡

山城國久世郡科手郷ニアリ。舊男山石清水ト名ク。宇佐
宮縁起曰。詔宣曰。我。是。日。本。人。皇。第。十。六。代。譽。田。天。皇。廣
幡八幡磨也。我名曰護國靈驗威力神通大自在王菩薩。又云貞
觀元年大安寺行教大法師。畧。巽。方。男。山。石。清。水。鵠。峯。上。屢。現。大
星光。中。隨。御。示。現。點。處。結。艸。且。先。以。法。味。云。云。コ。レ。ヨ。リ。以。來。山。上。山

下皆神号ニヨテ
八幡ト称ス

一切經谷

平家物語ニ盛衰記五ニ粟田口ノ邊一切經ノ別所ニ
明雲座主暫住シ給トアリ。今ノ神明ノ社ノ東南一町
ハカリニ。一切經谷慈覺谷ト云名跡アリ。又鐘撞堂ト称スル地アリ
其基址今僅カニ形ハカリ殘レリ。父老相傳テ慈覺大師所棲ノ地
天台ノ道場ナリキ。ソレヨリ先タチテ。行基菩薩ノ一切經ヲ納給
處ナレハ。此名ヲ得タリ。東岩倉此邊也。ト今ノ白川橋金剛寺ノ佛像
ハ。此谷ニオハセシヲ近古彼寺ニ移セリ。サレハ彼寺ヲ一切經山ト号ス云

東石藏

或ハ岩倉ニ作レリ。是王城ノ四方ニ在リ。今石藏トハ南
禪寺ノ奥名所禪林寺ノ東傳ナリ。相傳桓武帝遷都ノ
時王城ノ四方ニ勝地ヲ擇テ。法華經ヲ納テ地鎮トシ給ヘリ。サレハ四
方ニ岩倉ト云アルハ是ナリ。今東石藏其一ナリ。此説往後拾遺往
生傳云。東山有一山寺號石藏寺。彼山寺是行圓聖人之建立也。
件聖人是大和國人。修行之次至彼山頭結庵。始住。漸經四十餘
年。松柏成林。房舍滿院。云。一書云。此地ニ觀勝寺アリ。是行基ノ開
基ニテ。園城寺唐坊行圓再興ス。本尊千手觀音ハ。先ニ行基造給テ。腹
内ニ聖德太子ノ御作。正觀音ノ像ヲ納ラレキ。行圓又出雲路ニテ定

肇ノ造レル弥陀ノ三尊ヲ求得テ彼寺ニ移シ一字ヲ立テ安_レ置_レラレシヲ抄上塩囊其後應仁元年大内介此ニ陣取テ大殿佛閣一時ニ燒失スト云凡斯邊伽藍ノ基址ト見ユル者往々ナリト拾遺集ニイハクヲ山ヲ

ウコキナキ岩藏山ニ君カ代ヲハコヒ置ツク千代ヲコソツメ

傳本第三十九

東都白川禪房

今ノ知恩院是也賀茂河ノ東ヲ摠シテ白川ト稱スレトモ別シテ此邊白川ノ河水ニ近シ

當時知恩院ノ西門ハ其影河水ニ浮ヒツヘシ
家集 慈鎮

花ハニタシ心ハソラニ淺緑春メクコロノ白川ノ里

梅尾

葛野郡也平岡ノ北禎尾ノ東洛陽ノ西北行程ニ里ハカリナリ傳文云高雄山之別院也高山寺ト號スト云草創以

下ノ事寺院ノ中ニ注シヌ

傳本第四十二

六波羅

六波羅密寺ノ西建仁寺ノ南ナリ今建仁寺ノ門前ニ北御門ト稱スル處アリ是兩六波羅第宅ノ北門ナリト云

承久三年北條家兩人ノ一族ヲ京都ニ置テ畿内西國ノ政ヲ行シム是ヲ兩六波羅トイヘル事東鑑廿五ニ見エタリ第ヲ南北ニ造テ兩守護ノ居處トシキ又此地ハ池大納言賴盛卿ノ舊跡ニテ文治六年十一月賴朝上洛ノ比在京ノ宿所ヲ造作セラレ是ヨリ先ニ度々宿所ノ地ノ事京都ニ申サルトイヘ共其所イニ夕治定セズ今年上洛ニ依テ東路ノ邊宜候ハシ歟ノ由殊ニ馳申サレメ給ニ依テ池殿ノ舊跡ニ治定ス一品房昌寛ヲ差上ニテ新館ヲ造ラレムトアリ東鑑略書

西山粟生野

山城國乙訓郡也大原野此北ニアリ

傳本第四十三

河内國讚良

一郡ノ摠名ニシテ別ニ一處ノ稱トス

姉小路白川稜殿辻子

是大嘗會ノ時河原ノ稜ニ假殿ヲ起シ處也平家物語二云壽永二年十一月廿一日大嘗會御禰三條末

月廿一日大嘗會御禰三條末十一月廿一日大嘗會近江丹後オコナル百

練抄云、建曆二年十月廿八日、天皇依大嘗會御禊行幸三條末河原、又云、承久元年十一月廿七日、白川、枝殿邊燒亡及數町、延勝寺塔並金堂、成勝寺寂勝寺塔三基金堂、證菩提院等燒亡云、一書云、姊小路白川二階房ト號ス。信空上人ノ宿房也。漢語燈錄ニ、白川、本房寢殿、雜舍付屬、信空大德此邊ノ事ニヤ。此邊ノ事ニヤ。

播磨國朝日山

真言ノ靈場高野ノ末山ナリ
揖保伊比東郡也。朝日山大日寺。

鳥邊野

鳥戸山ノ麓。六波羅密寺ノ東南。古ヨリ人ヲ送リニ葬場ナリ。貴人野府記御高僧性靈集勤操法師等ヲ茶毗ニテ無常ヲ

詠スルノ和歌諸集ニ散在セリ。性靈集鈔云、或作鳥戸、或作鳥邊、和語相近也。顯昭拾遺鈔云、鳥戸山者、阿彌陀峰也。其下云、鳥邊野今云、阿彌陀、峯、小一書云、豐國、神廟ヲ此山ニ建ラレテ、葬場ヲ建、仁寺ノ前、鶴林ニ移サル、或行、基菩薩ノ定置レタル、五三昧場ノ延年寺ハ、此地ナリト云、三代實錄三云、貞觀十三年閏八月廿八日制定、百姓葬送之地、其一、在山城國葛野郡五條荒木西里、其二、在六條久愛原里、其三、在紀伊郡十條下石原西外里、其四、十條下佐比里、其五、十二條上佐比里、又三云、贈皇太后藤氏鳥戸山陵、在山城國愛宕郡、又勅以鳥戸鄉四町ヲ為贈正一位藤原朝臣總繼墓地、已上元慶七年紀中畧

遠江國橫路

城東郡ニアリ。西蓮ノ住、房信寂上人往生ノ舊跡今ハ知人モ無トソ

樹下谷

傳文ニ、菩提寺ノ奥ト云、菩提寺寺院中ハ下醍醐南ノ末、東ノ山ニセナリ、谷ハ寺ヨリ東ニ當テ、六七町ニアリ、今ニ名ヲ遺セリ

竹谷

傳文ニ、清水ノ奥ト云、寺ノ東南ニアリト云

傳本第四十四

相摸國飯山

大住郡也。日向山ノ東北、千里ハカリナリ。大山ニ近シ。毛利入道西阿カ領地ナリ。東鑑ニ寶治二年九月

御靈

長谷村ヨリ西南ノ方ニアリ。鎌倉權五郎平景政カ祠ナリ。保元物語ニ、神トイハレタリトアリ。神生ハ小坂

氏ナリ。景政カ家臣ノ末也ト云フ。梶原村ニモ、御靈ノ宮アリ。里老ノ云、當社ハ本梶原村ニ有シラ。後ニ此地ニ亦勸請ス。故ニ今祭禮ノ時ハ、彼所ノ神主。出合テ勤也トイヘリ。東鑑云、建保三年六月廿日、今夜子、尅御靈社鳴動及兩三度。

其下有雲車羽旆鳳駕龍軒玉女仙童不可稱次云云六帖上十州記云崑崙在西海成地北海亥地去岸十三萬里山高平地三萬六千里上有三角方廣万里形如偃蓋下狹上廣北曰閼風正西曰玄圃臺正東曰崑崙宮西王母所治也大明志七崑崙山在肅州衛城西南二百五十里南與甘州山連其巔峻極經夏積雪不消世呼雪山俊涼張駿時酒泉太守馬岌言周穆王見王母於此宜立王母祠駿從之此外山海經經西山大明志十五廿七廿八等二同名異山アリ

筑後國高良山

延喜式神名帳云筑後國三井郡高良玉垂命上云粗厨寺ノ事義ニ注シ又

同國山本郷

一郡ノ惣名ニシテ別ニ一郷ノ名トス

高野粉河

寺院ノ部ニ注シ又

同國上妻

是又郡名也拾芥ニカニツト訓ス處ニハカウツト唱ヘリ

東山赤築地

盛衰記ニ永萬元年清水法師合戰ニ打負テ延年寺赤築地ニノ閑道ヨリ落行ケルトアリ今ノ經書堂ヨリ一町ハカリ西ノ方ヲ赤築地ト云

傳本第四十七

一條堀川橋

往時安倍晴明天文ノ淵ヲ極テ十二神將ヲ仕フ其妻彼神將ノ貌ニ畏ケテ彼神將ヲ橋ノ下ニ呪シ置テ用事アル時ハ召仕ケリサレハ此ニテ吉凶ヲ橋占スレハ十二ノ職神必入口ニ移テ善惡ヲ示ストイヘリ治承二年十一月十一日中宮御産ノ時モ此ニテ占アリ盛衰トソ

傳本第四十八

石垣

筑後國竹野郡也石垣山圓乘院觀音寺公元明天皇敕願和同二年州創行基菩薩開基也本尊者赤旗檀一寸八分立像十一面觀音毗紐天之所造也行基作六尺大像白藏彼小像於頭首內先筑前觀音寺凡四十二年也賜僧糧七十五町起略中古ヨリ天台宗トシ決答銘心抄云石垣者別所號也筑後國有之金光坊者是彼寺別當也云

出雲路

日本紀載賀茂神跡云昔城北出雲路有小女云云釋行圓傳盛衰記七云賀茂ノ河原ノ西一條ノ北ノ邊ニ才ハスル出雲地ノ道祖神ト云一書ニ出雲寺ノ町ハ相國寺ノ慈照院ノ北ニアリ町ノ南ニ門アテ慈照院ノ中ニ通ス是古上出雲寺ノアリ所ナリ昔上ノ京極ニ上下出雲寺アリ傳教大師ノ建立ナリキ此寺ニシテ真濟法師法花說法ノ事アテ舊記ニ見エタリ其後寺ハ

(一)石垣ハ久留米ノ東行程五里州野ヨリ二里ハカリ東也

絶タリ。桓武帝遷都十三年ノ後、幸^{サカ}神ヲ上出雲路一條ノ北ニ遷ス
ト云。其社今尚存^ラニテ。其處ヲ幸神町トイヘリ。サレハ上下出雲路ハ。
舊ノ名ニシテ。此寺其地ニ在^レユヘニ。寺號トナリケルニヤト云。又云。
上出雲寺ハ傳教ノ艸創ナルヲ。後ニ上御靈ノ神宮寺トセリ。此寺ノ
事源氏物語及毘沙門堂ノ舊記ナト見エタリ。古毘沙門堂ノ地ニ
在^レトナレハ。今ノ塔壇ナルヘシ。サレト塔壇ハ古相國寺ノ塔ノ有^レ所
ニシテ。彼堂ノ塔ニハアラストモ云ヘハ。一定シカタシ。下出雲寺又下御
靈ノ神宮寺ナリシカ。兩寺トモニ今ハ絶タリ。今考ル。毗沙門堂ハ。上
御靈ニアリテ。智海法印居住ノ地ナリ。法印此ニ住^レテ。毗沙門天王
衛護ノ事アル故ニ。是ヨリ毗沙門堂ノ法印ト號セル由。天台明匠
記ニ見エタリ。園太曆云。康永二年十月廿三日可有^レ行幸仙洞。
嚴主^上云云。行幸萬里小路北行^キ毗沙門堂大路西行^キ。此仙
洞ハ持明院御所ハ安樂小路ナリキ。サテ出雲路ト云名ハ。出雲前司
成季ト云者ノ住ケル故ナリト。古今抄^{爲家}ニ見エタレト。或人ノ云ルハ。賀
茂ノ邊ヨリ高野ノ邊ニテヲ。出雲郷ト云。其通路ナルヲ出雲路トコソ
云メ^レト云。延喜式神名帳云。愛宕郡廿一座賀茂別雷神社出雲
井於^カ神社賀茂御祖神社出雲高野神社云云。

